

カナダ・バンクーバーの「多様性と包摂」に関する人類学的研究

本研究は、カナダ・バンクーバーを対象として、多文化社会における人びとの共存の一つのあり様を、人類学的なフィールドワークに基づいて描き出そうとする試みである。本研究の特徴を一つ挙げるとするならば、それは筆者自身の属性であろう。筆者は、車イス利用者である。車イス利用者であるということが、フィールドでの人々との関係性に少なからず影響を及ぼしたかもしれない。また、障害者であることによって、筆者の行動が、筆者の意図しない目的や意味を伴って相手に解釈されることもあった。たとえば、筆者が老人ホームでボランティアに従事することは、ホームに入居する高齢者に「ポジティブな影響を与える」とか、小学校で広島歴史や平和に関してスピーチをすることは、平和を伝える以外に「子どもたちに自立した障害者の姿を見せる」という点で意味のあることだと捉えられたりした。筆者が「彼ら」の言動を、彼らのもつ様々なバックグラウンドを考慮しながら解釈するように、「彼ら」もまた、筆者の存在や言動を理解しようとする時、筆者のバックグラウンドと切り離して考えずにはいられないのであろう。だからこそ、本論文を執筆するにあたって、フィールドワーカーが車イス利用者であることの意味、そのメリット／デメリットは何かということを意識し問いかけながら、丁寧に書いていくことを心掛けたつもりである。

しかしながら、本研究の主たる目的は、車イス利用者から見たバンクーバー社会を描き出すことではない。「車イス利用者」であるということは筆者の特徴の一つではあるが、「アジア系」「日本人」「女性」「学生」「独身者」といった多様なファクターが様々に絡み合っ、フィールドワークにおける筆者の雑多な日常を形作ったものと考え。筆者自身が持ち合わせる「多様性」が、フィールドにおける様々な出逢い、そして本論文の中身の「多様性」へと結びついたのでないかと思う次第である。

フィールドワークを通じて出逢った人々の日常と、筆者自身の日常を描き出すことを通して、バンクーバー社会にある多様性や複雑性の一端を、少しでも鮮明にすることができていれば幸いである。

諏訪 春菜

Abstract

Anthropological Study of Diversity and Inclusiveness in Vancouver, Canada

Haruna SUWA

It is not uncommon to see the terms 'diversity' and 'inclusiveness' used together as a slogan in the context of multiculturalism, inclusive education, diversity management in business, and so on. However, diversity and inclusiveness have opposing vectors: one demands differentiation, while the other demands unification. The aim of this study is to clarify, from an anthropological perspective, the ways in which diversity and inclusiveness are balanced in a multicultural society.

In this study, I focus on ethnic diversity, cultural diversity, and physical diversity in Vancouver, Canada. On the basis of the ethnographic data collected during my field research in 2012-2013, I analyze how diversity is represented in various places and how people recognize these places by interpreting symbols such as languages, signs and pictograms. Through this analysis, I clarify the range of ways in which diversity and inclusiveness are balanced in different situation. In addition, I describe how people live alongside and with others who have different backgrounds, focusing on their everyday activities.

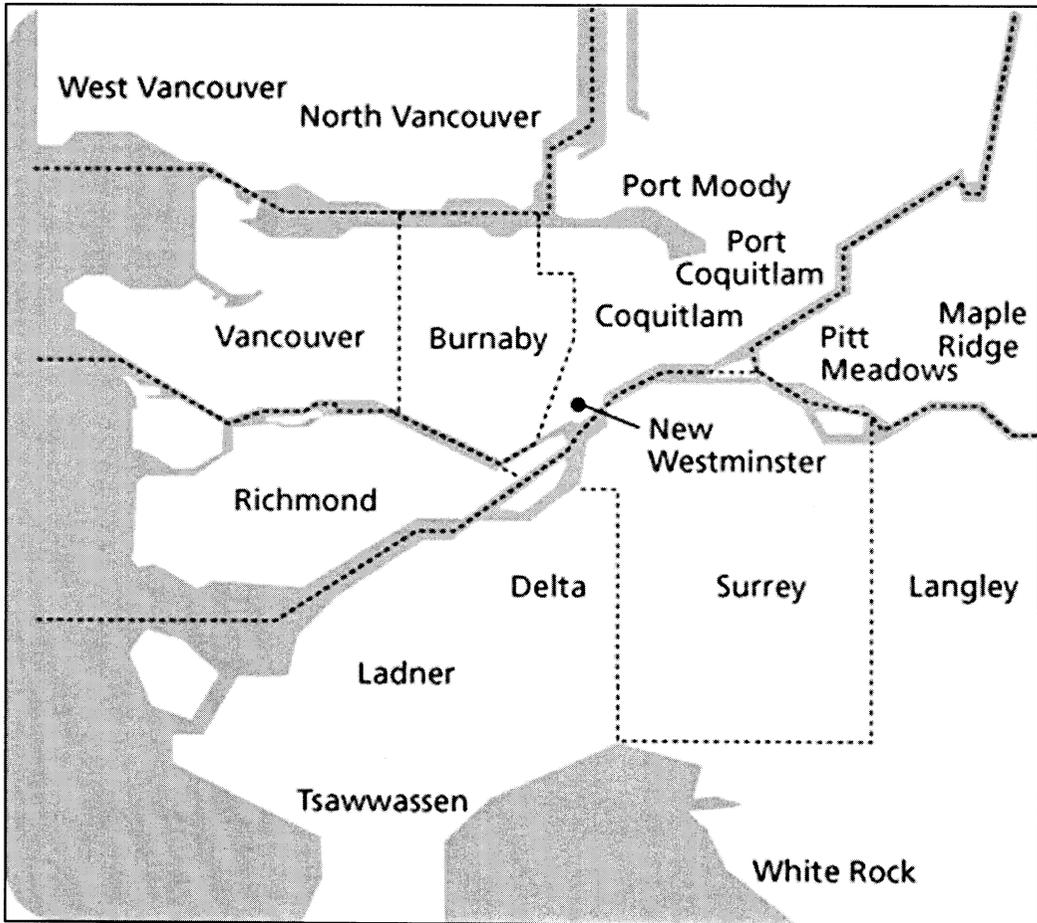
目次

序章	7
1. 研究の目的、背景、方法	7
2. 多文化主義と「多様性と包摂」	10
3. 本研究の視点	12
4. 調査の概要	13
5. 用語と表記について	14
第1章 バンクーバーの多様性の諸相	15
1-1. 調査地へのエントリー	15
1-1-1. 住む場所を探す	15
1-1-2. ある日本人女性との出会い	17
1-2. オリエンテーション—ある日本人女性から見たバンクーバー社会	19
1-2-1. 西と東—バンクーバーの社会階層	19
1-2-2. 「リアルカナディアン」—バンクーバーの民族的多様性	21
1-2-3. 「中国の人」「台湾系」「香港系」	23
小結	23
第2章 リッチモンド市中心地の「ニュー・チャイナタウン」	25
2-1. リッチモンド市における民族的多様性	26
2-1-1. 1970年代以前—バンクーバー郊外の「ヨーロッパ系住民のコミュニティ」	26
2-1-2. 1980年代以降—中国系移民の増加と「ニュー・チャイナタウン」	29
2-2. 数の多さと文化の表象	30
2-2-1. 中国系住民の存在を際立たせる中国語表記	30
2-2-2. 中国文化の陰で見えづらくなる多様性 —“Are they Canadian or Chinese?”	32
2-3. 中国語のサインをめぐる摩擦	34
2-3-1. 中国語表記問題	34
2-3-2. 中国語の「異質性」と英語の「普遍性」	36
小結	37
第3章 パブリック・マーケットにみる多様性と二言語主義	40

3-1. グランビル・アイランドのパブリック・マーケット—公共空間のデザイン	40
3-1-1. グランビル・アイランドの再開発	40
3-1-2. パブリック・マーケットの公共性	43
3-2. 観光地としてのパブリック・マーケット	44
3-2-1. カナダの縮図としてのグランビル・アイランド	45
3-2-2. パブリック・マーケットの「カナダらしさ」	48
3-3. パブリック・マーケットにみる二言語主義	49
小結	51
第4章 日系エスニック組織の葛藤	55
4-1. バンクーバーの日系エスニック組織	55
4-1-1. 「隣組」について	55
4-1-2. 隣組の運営と活動内容	56
4-2. 隣組にかかわる人びとの多様性	58
4-2-1. スタッフ	58
4-2-2. ボランティアと利用者	62
4-3. エスニック組織の公共的側面	66
4-3-1. 多様なニーズに対する苦悩と取り組み	66
4-3-2. エスニック組織が抱えるジレンマ	68
小結	68
第5章 身体的多様性とその包摂	70
5-1. 日本人車イス利用者からみたバンクーバーの公共交通機関	70
5-1-1. 車イス利用者のバス利用	70
5-1-2. 「Good driver」が意味すること	72
5-2. バス利用をめぐるルール	74
5-2-1. 車イス利用者優先の暗黙のルール	74
5-2-2. 障害者割引制度にみる「カナダ人」と「外国人」	76
5-3. 「みんな一緒」のルール	77
5-3-1. あるクラス写真をめぐって	77
5-3-2. 「差別」概念のあいまいさ	78
小結	80

第6章 多文化社会で生きる	82
6-1. エスニック・バックグラウンドの活用と市民権をもつ意味	
— 中国系移民1世男性のライフヒストリー	82
6-1-1. 中国からカナダへ	82
6-1-2. エスニック・バックグラウンドに由来した人的ネットワーク	84
6-1-3. 言語戦略とエスニック・バックグラウンドを活用したビジネス展開	85
6-1-4. エスニック・バックグラウンドに基づかないビジネス展開	86
6-2. カナダ社会で働くことの意味 — 中国系移民1世女性のライフヒストリー	88
6-2-1. カナダと香港を行き来する	88
6-2-2. 仕事探しと「カナダ経験 (Canadian experience)」	89
6-2-3. 仕事への意欲 (上昇志向)	91
6-2-4. 働くことの意味	93
6-3. 「チャイニーズであること」と「カナディアンであること」	
— 中国系移民1世夫婦の日常生活と近所付き合い	94
6-3-1. 母国の文化・習慣を維持する	94
6-3-2. 近所付き合い—「チャイニーズ・スタイル」と「カナディアン・スタイル」	96
6-3-3. 「私たちは彼らとは違う (“We are different from them.”)」	97
6-4. 多文化的経験と差別に対する敏感さ—カナダ人男性のライフヒストリー	100
6-4-1. バンクーバーへ	100
6-4-2. 客の文化的背景を考慮したビジネス	102
6-4-3. 相手のバックグラウンドの尋ね方	103
小結	105
終章	107
「多様性」と「包摂」の狭間で	110
謝辞	114
参考文献	115

図：バンクーバー大都市圏



参照元：Translink ウェブサイト

(<http://www.translink.ca/en/Rider-Guide/Accessible-Transit/HandyDART.aspx>)

序章

1. 研究の目的、背景、方法

バンクーバーは、多様な宗教、身体的特徴、性的志向、世界中のあらゆるエスニシティや文化的背景をもつ人たちとカナダの先住民コミュニティの混在によって成り立っています。(市の職員と委員会は、この多様性がバンクーバー市の強み、活力、そして繁栄の源として価値あるものと認めます。

わたしたち市職員が多様性と包摂に取り組む姿勢は、市の行動指針に反映されています。(中略)

すべての市民が、いかなるバックグラウンドにかかわらず、市民サービスに完全にアクセスでき、偏見や差別をうけることなく暮らすことができるように、市職員はさまざまなプログラムや支援を提供します。(下線は筆者の記入による)

(City of Vancouver official website: Diverse communities and Multiculturalism)

上記の文章は、バンクーバー市のホームページから抜粋したものである。ここからわかるように、バンクーバー市は住民が多様なバックグラウンドを抱えていることを認めている。そして、「多様性と包摂」(Diversity and Inclusiveness)に取り組むことを謳い、偏見や差別のない社会を築こうとする姿勢を表明している。

このような多様性と包摂という表現は、バンクーバー市に限らず、国の移民政策や教育現場、また企業の雇用方針など、さまざまな場面でスローガンのように使用されている。しかし、この二つ一組で用いられる「多様性」と「包摂」とは、本当に同時に成り立つものなのであろうか。本研究は、このような問いからスタートしている。

多様性 (Diversity) というとき、そこでは人びとがもつさまざまな違い—差異があるということ認めることを意味している。極端にいえば、人びとの多様性とは個々人の多様性ということになり、人の数ほど多様性があるということになる。一方、包摂 (Inclusiveness) とは、人びとをまとめること、統一することを意味する。つまり「多様性」と「包摂」という言葉は、一方は差異化する力を、もう一方は統一化する力をもち、互いに相反する作用をもつ言葉である。そのため、両方を同時に達成しようとするのはかなりの難題のように思える。たとえば、学校を考えてみよう。あるクラスには、多様な言語を母国語とする生徒が在籍している。生徒の言語的多様性を最大限に認めようとして、それぞれの学生に母国語で話すことを認めるなら、

授業は成り立たない。また、生徒の数だけ多様な母国語で書かれた教材を用意することは、時間も費用も膨大にかかる。そこで、お互いに意思疎通をはかるための共通言語を決めることで、学級運営は成り立ち、みんなが互いに会話できるようになる。日本であるならば、日本語がその共通言語として使用されている。また、国連（国際連合）は、世界中のさまざまな国々が加盟する国際組織であるが、6つの言語が公用語に定められている。

このように、多様性を認めるとはいえ、多様な個々人のニーズすべてに応えることは難しい。国という文脈で考えてみても、国民の民族・文化的多様性を認めるばかりでは、多様な集団がバラバラに存在する状態になり、一つの国として成立していかない。そこで、どこかで折り合いをつけながら、多様な人びと（あるいは多様なニーズ）をまとめていくという作業が必要とされる。したがって、いかに多様性を包摂していくか、どのように多様性と包摂のバランスをとっていくのかということが重要な課題となるのである。それでは、多様性と包摂を両立させるために、どのように折り合いをつけているのだろうか。その際、折り合いをつける基準とは何なのだろうか。

また、上記のバンクーバー市の文言では、住民が「偏見や差別」をうけることなく暮らしていけるようサポートすると述べられている。このことから、偏見や差別というものが、多様性と包摂を両立させる際の妨げとして捉えられていることが読み取れる。しかし、どこからが「偏見」「差別」なのだろうか。何をもって偏見や差別と見なすかは、人によって一様ではない。さらに、ある状況では差別と捉えられるような出来事も、状況が異なれば、差別と捉えられない可能性も出てくる。すなわち、多様性と包摂の両方の要求を同時に満たそうとすると、いかに人びとに偏見や差別と見なされない形で折り合いをつけるのかということがポイントとなるのである。それでは、いかなる論理で、その折り合いのつけ方が人びとに納得され、多様性と包摂が両立しているように見せようとしているのだろうか。

さらに、「多様性を認めること」と「包摂すること」のバランスの取り方は、いつでも同じであるとは限らないのではないだろうか。たとえば、多文化的な状況があるなかで、ある文化を担う人びとが特に数が多い場合、どのように多様性に折り合いがつけられるのだろうか。多文化的な状況があっても、「公的な場」として公共性を強調しなくてはならない場合は、どのように多様な文化が包摂されるのだろうか。逆に、公共性よりも、特定の文化的背景をもつ人びとが集まるような、特殊性を打ち出す場ではどうだろうか。また、多様な人びとがいるなかでも、明らかに平等でない状態がある場合は、どのように違いのある人たちを包摂していくのだろうか。

以上のことをふまえて、本研究では、バンクーバーのさまざまな公共空間を事例として、次の問題に取り組む。

- ① 多様な民族的・文化的・身体的差異をもつ人びとを、どのように包摂しているのだろうか。
- ② 「多様性を認めること」と「包摂すること」を両立させるために、どのように折り合いがつけられるのだろうか。

これらの問題に関して、現代の多文化社会バンクーバーのさまざまな公共空間にみられる多様性の表象のされ方を、象徴人類学の観点から分析することを通してアプローチする。そうすることを通して、それぞれの公共空間の状況によって、「多様性と包摂」のあり方が異なるということを明らかにすることが目的である。

「多様性と包摂」のあり方を明らかにするために、なぜ公共空間にみられる多様性の表象のされ方に着目するのか。その関係と根拠を示すために、以下では具体的な例に沿って説明していきたい。

多様性に折り合いをつけながらまとめていく（包摂する）という「多様性と包摂」の作業のプロセスは、同時にそのまとまりに含むものと含まれないものを線引きする作用を伴うものである。それによって、含むものと含まれないもの間に差が生みだされることになる。たとえば、先に挙げた国連の例を詳しく見てみる。国連にはさまざまな国々が加盟し、それらの国々で話される言語も多様であるが、公用語として6つの言語が定められている。ホームページや公式文書はこの6つの言語に翻訳され、加盟国の言語が多様だからといってすべての言語に翻訳されるわけではない。すべての言語の使用・翻訳を認めれば、多様な母国語をもつ人たちの間でコミュニケーションが取れないので、とりわけ6つの言語を公用語に定めることで折り合いをつけ、運用していこうというわけである¹。

6つの言語を公用語として定めることは、国連の多文化性を表し、多文化・多言語的対応として捉えられる一方で、国連に加盟する国々の民族的・文化的・言語的多様性は、実際はもっと多様で複雑である。すなわち、表象される文化の多様性と、現実に存在する文化の多様性との間にズレがあることがわかる。そしてこのズレは、公用語を母語とする人たちとそうでない人たちとの間で、国連が発信する情報を入手しようとする際に、言語的にアクセスしやすいかどうかという点で差を生みだすことにつながると言える。

このように、表象される文化と実際にはあるが表象されない文化、見える文化と見えない文

¹ 国際連合の公用語は、アラビア語、中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語の6つである。
[国際連合広報センター (http://www.un.org/ja/info/un/charter/membership_language/)]

化、選ばれる文化と選ばれない文化がある。それは、いったいなぜなのか。この分け目を決める基準とは何なのか。このような問いは、言い換えれば、多様な文化がある中で、どの範囲までを包み込むのか、その範囲に何は含まれないのか、その範囲を決める基準とは何なのかという、「多様性と包摂」の問題を考える問いに密接にかかわっている。

こうした問いを発しながら、バンクーバーという都市におけるさまざまな公共空間（商業施設、市場、組織、公共交通機関）を見てみると、それぞれの空間の見え方が違うということに気づく。その見え方の違いは、その空間に存在するさまざまなシンボル（看板、文字、ピクトグラム、人の外見など）によって方向づけられている。そして、そのシンボルを人びとがどのように解釈するかによって、その空間の認識のされ方は異なってくる。

本研究では、このような視点から、さまざまな公共空間にみられるシンボルを分析することを通して、それぞれの公共空間で表象される多様性と表象されない多様性を分ける基準とは何か、その基準を正当化する論理は何かということを明らかにする。そして、多様性のどこまでが包摂されるのかという範囲（包摂のあり方）が、それぞれの空間で微妙に変化するということを示したい。

2. 多文化主義と「多様性と包摂」

民族的・文化的に多様な人びとによって構成される多文化社会において、文化的多様性を認めながら、国あるいは社会としてのまとまりをどのように維持していくのかという問題は、カナダにおいては多文化主義（multiculturalism）の文脈のもとで議論されてきた。多文化主義は、1970年代以降、多くの移民を受け入れ、多様な民族・文化的背景をもつ人びとによって構成される国々において、そのような多様な国民を社会的に統合するための論理として採用されてきた。この多文化主義は、社会の構成員の民族・文化的多様性を認め、多様性の維持・発展を奨励することと、国としての統一的な枠組みを維持することを同時に両立させようとするもの、あるいは両立可能であると想定するものである。すなわち、多文化主義は「多様性」と「統一性」という一見相反するベクトルをもつ理念を内包した概念であると捉えられる【青木2008】。

カナダにおいては、1971年に多文化主義が国策として世界で初めて導入されたが、これは多様な民族集団間の文化の関係は対等であると認めた上で、英語と仏語の二言語を公用語に定める二言語多文化主義という形をとるものであった。すなわち、民族的・文化的多様性を認める一方で、言語的には二言語主義をとることで多様性に制限を加え、国としての統一性を維持しようとするものであることがわかる。このように、カナダの多文化主義も、国内の多様性を積極的に認めながら、その多様性を国という枠組みのなかに「包摂」しようとする原理として採

用されているということができる。

これまでの多文化主義に関する議論でも、このような「多様性」と「包摂」の関係について議論されてきた。そこでは、多様性をどこまで認めるのかということが問題とされ、その許容範囲によって多文化主義のあり方が一様ではないことが指摘されてきた[関根 1996]。「多様性を認めること」により重きを置く立場の多文化主義では、多様な民族的背景をもつ人びとが自らの文化、言語、伝統的習慣、生活様式を維持することを認め、エスニック・グループの言語や文化保持も積極的に援助される。また、マイノリティとして社会的に不利な立場にある人びとの状況に配慮して、差別是正措置等を取る必要性が主張される²。その一方で、多様性を肯定的に捉えつつも、多様性を無制限に認めることは国の統一性を脅かし、分裂を招くとする主張もある³。そのような立場においては、「多様性を認めること」よりも、国としてまとまりを維持する必要性、つまり「包摂すること」が重視される。どちらの立場も、多文化社会において、人びとの多様性を認めた上で、彼らを国・社会に包摂しようとする姿勢を基盤とする点では共通しているものの、「多様性」をより強調するのか、それとも「包摂」により重きを置くのかという点で異なっている。このことから、両方のバランスをどのように取るかによって、「多様性と包摂」のあり方は変化するということが考えられる。

また、多文化主義は、多文化主義を掲げる国の国民・市民のアイデンティティに影響を与えることが議論されてきた。とりわけ、多文化主義における文化の捉え方が問題視されてきた。多文化主義では、文化が、厳密に規定された集団の構成員によって所有・共有される「もの」として扱われ、集団同士を分断すると指摘されてきた[Prato 2012: 1]。また、文化を固定的に捉える見方のもと、個人は「〇〇系」として定式化された文化的集団の一員として自らをアイデンティファイすることが求められるため、多文化主義は、間接的にマイノリティの人びとの自由を制限し、彼らに平等な機会を与えるかわりに、文化的、地理的ゲッターに閉じ込めてしまうと指摘される[Prato 2012]。さらに、「多様性を認めること」と「包摂すること」を同時に成り立たせようとする多文化主義の性質から、「多様な文化的背景をもつ市民をナショナルな枠組みに位置付けるための装置」[河上 2014:151]として捉える見方もある[南川 2004]。多文化主義のもとでは、たとえば「エスニックであること」と「カナダ人であること」が両立可能であるとするのが、国民の心理的統合を促すとも見られている[徐 2001:84]。しかし、

² このような措置の代表例として、アファーマティブ・アクションやクォータ制などが挙げられる。

³ 1990年代後半以降は、多くの移民を受け入れる欧米諸国において、国民統合理論としての多文化主義の「失敗」が叫ばれるようになる。そこでは、多文化主義が多様な民族・文化的集団間の差異を温存・強化し、そのような集団間の差異は社会の分離を招き、主流社会から分離した集団は、社会・経済的上昇の機会に恵まれず、社会的関係の断絶や集団間の軋轢を引き起こすという批判が展開されてきた[Vertovec, 2010: 86]。

先に示したように多文化主義は「多様性」と「包摂」という相反するベクトルをはらむ概念であるがゆえに、両者を両立させようとする時に対立やジレンマが生みだされることは十分に考えられる。本研究では、多文化主義を謳うバンクーバー社会において、多様性をどのように包摂しようとしているのか、また、どのような場合にジレンマが生じるのかを見ていくために、バンクーバーのさまざまな公共空間を取り挙げる。

3. 本研究の視点

これまで、多文化主義に関する研究においては、多民族・多文化的な状況があるなかで、個別の民族や文化的集団を取り上げ、彼らの日常生活を調査し、彼らから見た社会のあり方を明らかにしようとする研究がなされてきた。とりわけ、エスニック・マイノリティに関する人類学的研究では、マイノリティが社会のなかで相互扶助また政治的主体となるために、集団としてのアイデンティティをいかに形成していったか、いかに自己の文化を表象していったかという過程が中心的に議論されてきた[河上 2014 : 13]。しかし、そのような研究においては、研究の対象が特定の民族や文化、地域に限定され、そのような集団が個別完結的に取り上げられることで、多民族・多文化的な状況における多様な人びとの間の「交差」「関係」を描きだそうとする取り組みは少ないことが指摘されている[島村 2006 : 86-88]。このことに対して、個別の民族、文化の表象に限定するのではなく、多様な人びとによって成り立つ社会の全体を多様性の観点から包括的に捉え、その社会空間のあり方を分析することで、現代都市の多様性や複雑性をより立体的に描きだす可能性や必要性が主張されている[島村 2004, 河上 2014]。本研究は、このような主張を支持する立場から、研究対象を個別の集団に限定せず、また複数の空間を取り挙げることで、バンクーバーという都市の複雑性やそこに生きる人びとの多文化的経験を、人類学的フィールドワークにもとづいて描きだすことを試みる。

現代都市の複雑性のなかに生きる人びとの姿を描こうとした人類学的な試みとして、河上[2014]の研究がある。河上[2014]は、日系アメリカ人の集合的アイデンティティが表象される場として研究の対象とされてきたサンフランシスコ日本街において、在米コリアンを中心とする在米アジア系マイノリティの存在にスポットライトを当てることで、これまで表象の対象とされてこなかった彼らがそこで築いてきた「見えない」生活の場や日常的なつながりの在り様を描きだした。河上は、日本街という場所に焦点を当て、そこでは表象される文化と、実際にはあるが表象されない文化があることを示し、そのズレの意味を問いかけた。その問いに取り組むことを通じて、「表象によって構成される現実、あくまでも人間が経験する現実の一部であること」[河上 2014 : 167]を示し、人類学におけるマイノリティの文化表象の新たなあり方を模索した。

このような先行研究に影響を受け、舞台も手法も異なるが、筆者もバンクーバーという場を舞台に、目に見えるものと実際にはあるが見えてこないものの中にあるズレに着目した。これはまた、筆者自身が現地でのフィールドワークを通して感じたことと呼応するものでもあった。たとえば、実際には多様な文化的背景をもつ人びとが暮らしている場所が、学術論文上では「ニュー・チャイナタウン」と称され、現地の人たちも「チャイニーズ」が暮らす場として認識していた。また、多様な文化的背景をもつ人たちが働き、世界中から観光客が訪れるような場所で、実際にそこに身を置いていれば多様な言語を耳にするにもかかわらず、目に映る言語は英語と仏語のみであることに違和感を覚えたりした。このような違和感を出発点として、多文化社会バンクーバーという場所の複雑性を描きだし、そこに生きる個々人の多文化的経験と、それを通じて感覚的に身に付けてきた彼らの生きる術なるものを、実際の日常生活に根差した具体的な出来事を通して描きだすことを試みたい。

4. 調査の概要

本研究の内容は、先行文献研究および2012年10月から2013年9月の間にバンクーバーでおこなったフィールドワークで得られたデータを中心に分析・考察をおこなったものである。筆者は、バンクーバーのリッチモンド市在住の中国系移民夫妻宅に、ホームステイという形で滞在した。第2章で扱うリッチモンド市については、同市や中国系移民に関する先行研究および同市で集めた資料、また滞在先の夫妻を含めた同市に暮らす人々へのインタビューや、同市外に住む人々からの聞き取り調査に基づいている。

第3章で扱うグランビル・アイランドのパブリック・マーケットには、マーケットでカードを販売するデイ・ヴェンダー (Day vendor) のデイブさんの友人として定期的に通うことができた。カード作りを学びながら、デイブさんと一緒に店番および接客をおこない、参与観察およびデイブさんやマーケット内で働く人々に聞き取り調査をおこなった。

第4章は、バンクーバーの日系ボランティア組織「隣組」での参与観察およびスタッフへの個別インタビュー、またボランティアや利用者として出入りする人々への聞き取り調査をおこなった。隣組へは、ボランティアとして定期的に入出入りした。

第5章については、一車イス利用者としての筆者の体験が中心となっている。また、バンクーバーの公共交通機関に関する資料や新聞記事を扱った。

第6章で取り挙げる3人は、筆者の滞在先の夫妻と、3章で扱ったマーケットのヴェンダーであるデイブさんである。3人の日常生活や仕事の様子の参与観察と3人からの聞き取りをもとに、記述・分析をおこなった。

5. 用語と表記について

・バンクーバー

バンクーバー市とその近郊の自治体を含むバンクーバー大都市圏 (Metro Vancouver) を指す。

・公共空間

本研究では、主に4つの事例を「公共空間」として取り扱う—リッチモンド市の商業施設が集まる中心地、パブリック・マーケット、日系ボランティア団体「隣組」、都市バス。これらの事例は一見すると、商業施設、市場、組織、公共交通機関と、次元の違う統一性のない事例のように思える。しかし、どれも本来「誰でも赴くことのできる」「誰でも利用できる」性格を備えた空間という点で共通しており、たとえばゲーテッド・コミュニティ (Gated Community) や会員制クラブのような、特定の参加資格を持たないと入れない、参加できない空間ではない。そうした意味で、本研究では、これらの事例を「公共空間」として捉えることとする。

・人名と組織名について

人名については、仮名を用いる。また、組織名は実名を記載している。

・英語の表記について

固有名詞の場合は、() 内に記す。当事者が語った言葉については、“ ” 内に表記する。

第1章 バンクーバーの多様性の諸相

人類学的なフィールドワークにおける調査は、人との出逢いによってはじまる[J.ピーコック 1993]。したがって、誰と出逢うかということは、フィールドワークへのかかわり方や、フィールドワークの内容に大きな影響を及ぼすものである。筆者のフィールドワークも、ある日本人女性との出逢いによってはじまった。彼女は、筆者がフィールドに「入る」ための手助けをしてくれた人物であり、フィールドで最初にかかわった人物である。つまり、筆者は彼女の指導（オリエンテーション）を受けて、フィールドに入った。本章では、筆者のフィールドワークが彼女との出逢いによってどのように始まり、どのようなオリエンテーションをうけて、フィールドに入っていったのかということをも具体的に記述する。

1-1. 調査地へのエントリー

1-1-1. 住む場所を探す

フィールドワークを実現させるために重要なことがある。それは、フィールドでの滞在先を確保することである。住む場所がなければ、フィールドに滞在することはできないし、ましてや調査をすることもできない。そのため、筆者のフィールドワークへのかかわりは、住む場所を探すことから始まった。

フィールドにどのように滞在するかには、さまざまな方法がある。あらかじめ現地に知り合いや協力者がいれば、その人物の家に滞在することが可能かもしれない。あるいは、住居を借りて一人で暮らしたり、他人との共同生活をするルームシェアという選択肢もあるだろう。さまざまな方法があるなかで、筆者が選んだのはホームステイという滞在方法であった。ホームステイは、その国に暮らす人の家庭と一緒に住み、生活を共にする滞在形態である。現地の人と一つ屋根の下で暮らし、話し、食事を共にするホームステイは、現地で生活する人びとの生活を調査したいと考える筆者にとって魅力的なものであった。こうして、ホームステイ先を探すことを決意した。

しかし、どのようにホームステイ先を探すのだろうか。現地に知り合いはいないため、自力で探す必要があった。また、筆者は障害があり車イスを利用しているため、生活範囲に階段や段差がないことなど、住む場所を確保する上で物理的な制約があった。そのため、筆者の状況に合う家を探すことは、そんなに簡単にはいかないかもしれないという不安があった。

バンクーバーでのホームステイ先を探すために、いくつかの方法を試した。一つは、インターネットのホームステイ先紹介サイトである。この紹介サイトは、世界各国のホームステイ先を探せるサイトで、ホームステイをしたい側（ゲスト）と、ホームステイをしてもらいたい側

(ホスト)とを会わせる場である。滞在を希望する国と都市を選択し、自分の情報(性別、年齢、出身国など)とホームステイ先への希望(滞在費用、家庭環境など)などを書き込み、投稿する。また、似たようなサイトとして、カナダ専用の留学掲示板も利用した。先の紹介サイトが英語ベースであるのに対し、この掲示板は日系企業が管理するもののため、日本語ベースの掲示板であった。筆者は、これらのサイトおよび掲示板に自分の情報と希望を書き込み、投稿した。しばらく経って、筆者の投稿に対して興味をもったホストから何件か返信が来た。それから、返信をくれたホストと交渉をはじめた。筆者にとって一番重要な点は家の構造(バリアフリーかどうか)なので、ホストに室内の写真をメールで送付してもらうなどのやりとりを重ねた。結局、筆者の状況に合う家は見つからなかったことと、相手がどのような人か、つまり「良い人」「信頼できる人」だろうかという懸念が付きまとい、この方法はうまくいかなかった。

別の方法は、留学エージェントに依頼して、ホームステイ先を手配してもらう方法である。留学エージェントとは、海外留学を希望する人たちを対象に、主に留学に関する手続きを本人の代理として行う会社のことである。業務内容は、語学学校選びやビザ申請に関する渡航前の相談・アドバイス、現地生活に関する情報提供、学校の入学手続きの代行、滞在先の手配などである。カナダの都市のなかでも、日本人の語学留学やワーキングホリデー先として人気の高いバンクーバーには200以上の語学学校があるとされ、現地にオフィスを構える留学エージェントも多数存在している。後に現地で知り合った留学エージェント勤務の経験がある女性によれば、スタッフを多数抱える大手エージェントから、少人数でやりくりしている小規模のものまで「星の数ほど」の留学エージェントがバンクーバーには存在するとのことである。筆者は、大手から小規模のものまで、いくつかのエージェントに問い合わせた。多くの留学エージェントは、現地の生活にかかわる相談に無料で応じているため、筆者は車イスでも生活できるバリアフリーのホームステイ先を探すことが可能かどうかを問い合わせた。

この方法でも、ホームステイ先探しは難航した。理由は、エージェントが契約しているホストのなかに、そのようなバリアフリーの家をもつホストがいないことや、車イス利用者に対してホームステイ先を手配したことがないため、対応しかねると断りの返信をもらったためである。どうやら車イス利用者が海外でホームステイをすること、しかも誰の付き添いもなく一人で滞在することは、想定されていないようだ。また、エージェントによっては、今現在契約しているホスト以外に、新たにバリアフリーな家をもつホストを探して欲しい場合は、そのようなホストが見つかるかどうかにかかわらず料金が発生するとのことであった。この方法は、料金を払っても確実に滞在先が見つかる保障がないため、他に手立てがない場合の最終手段として残しておこうと考えた。

これらの方法を試すと同時に、インターネットを利用して、バンクーバーにおける車イス生活や街のバリアフリー状況などに関する情報収集をおこなっていた。インターネットの検索サイトに「バンクーバー」「車イス」「滞在」「生活」などの単語を組み合わせて検索をかけ、ヒットしたサイトを見ていった。ある時、何ページ目かに、日本から来た車イス利用者の短期滞在を世話したとする、日本語のページを見つけた。ホームページを開くと、どうやらいわゆる留学エージェントのようだった。しかし、前述の留学エージェントと異なる点は、主な業務内容が賃貸住宅探しおよびホームステイ先の手配に特化していることと、対象者に移住者が含まれることであった。このホームページを運営する会社の前例実績のページに、以前車イス利用者の滞在先を手配し、バンクーバーでの滞在の手助けをしたことが紹介されていた。早速、筆者はこのホームページの問い合わせ先にメールを送った。バンクーバー滞在の目的や計画、自分の状況などを簡単に記して、ホームステイ先を探してもらえないかと尋ねてみた。翌日に受け取った返信には、確実に見つかるとの保証はできないが、最善を尽くして探すと言われていた。

このホームページに行きついたことが、筆者がフィールドワークを実現させるうえで大きな足掛かりとなった。つまり、このホームページを運営する会社が、筆者のホームステイ先を手配してくれたのである。この会社は、バンクーバー在住の日本人女性京子さんが個人で立ち上げたものだった。次節では、筆者がホームステイ先の家庭と契約するまでの過程を、エージェントである京子さんとのやりとりに注目しながら記述する。京子さんとのやりとりを通じて浮かび上がった「京子さんから見たバンクーバー社会」は、筆者自身がバンクーバー社会をどのように見るのかということに影響を与え、枠組みを与える役割を果たしたのである。

1-1-2. ある日本人女性との出会い

京子さん（40歳代半ば）は徳島県出身の日本人女性で、2007年に夫と3人の子どもとともにブリティッシュ・コロンビア州（BC州）に移住した。大学教員をしていた夫が、現地の大学の研究員として一年間の就労ビザ（Work Permit）を得ることができたことをきっかけに、カナダ移住を決意したとのことである。日本で勤めていた頃は、夫は過労のために体を壊して辞職し、看護師をしていた京子さん自身も、仕事の忙しさや職場の人間関係に嫌気がさしていたという。また、アレルギー体質の子どもたちのためにも、もっと自然が多く、空気のきれいな所で子育てしたいと考えてきたと語った。「こっち（BC州）に来てから、子どもたちのアレルギーがよくなった」と京子さんは話していた。京子さんと夫の職業がBC州の推薦移民のカテゴリーに当てはまり、一年ほどで永住権を取得することができたとのことである。移住後は、BC州の州都ビクトリアやバンクーバー市西部に住んだのち、現在はリッチモンド市西南部に居を構えている。

前述の通り、京子さんとの出会いは、筆者が彼女のホームページを見て、ホームステイ先を探して欲しいと相談したことがきっかけである。京子さんが現在の会社を立ち上げたのは、2012年のことである。それ以前にも、「ボランティア（無償、人助け）」で日本人家族の移住の手助けをしていたという。子どもが成長し、子育てに余裕ができたため、何か仕事を始めようと思ったと話した。

「子どもが大きくなってきて、パートをしようと思ったけど、時間も拘束されるし、時給ももっと良い方がいいと思って、自分でビジネスすることにした。これまでもやってきたことだし、世話好きなのもあって。」

自らの移住経験を活かして、これまでにしばしば人助けとして無償でやってきたことを、「ビジネス」として営むことにしたと語る。

京子さんの仕事は、一般的には留学エージェントと呼ばれる職種に当てはまる。京子さんの場合、主に移住者や長期・短期滞在者のための賃貸住宅探しおよびホームステイ先の手配を個人で行っている。「大手にできないことを、自由に、したいように自身の方針でできる」ため、個人で会社を立ち上げることにしたのだと話す。京子さんに住居探しの依頼や相談をしてくる人たちは、主に京子さんが開設しているホームページを見て、問い合わせをしてくる。その他には、以前に京子さんのサポートを利用した人からの口コミで、仕事の依頼が舞い込んでくることもあるとのことだ。依頼者が現地に渡航するまでは、メールや国際電話を利用してやりとりをする。依頼者の希望を聞き、希望に合う条件を本人の代理で探していく。と同時に、バンクーバー在住者として、依頼者に現地の生活に関するさまざまな情報を提供する。

ホームステイ先の確保のために、筆者は京子さんとのやりとりを重ねた。やりとりの内容は、まずは筆者自身について詳しく伝えることからスタートした。何歳か、学生なのか仕事をしているのか、なぜバンクーバーに滞在するのか、どのような滞在資格を取得して渡航する予定なのか、いつ渡航し、滞在期間はどれくらいか、障害・病気名は何か、日本ではどのように暮らしているか、日常生活で困難な動作は何か、どのような生活環境であれば問題がないか、ホームステイ費の上限はいくらか、両親が一人で渡航することを了承しているかどうか……。これらの情報を京子さんは求めた。これは京子さんが筆者のホームステイ先を探すために必要な情報であるとともに、筆者が信用できる人物かどうか、また本気でカナダに来る気があり、滞在資格や経済的側面から渡航が実現し得るかどうかを見極めるための材料だったと考えられる。そのなかでも、障害名や障害の進行度合い、日常生活でできること／できないことについて、京子さんは正確に知りたがった。これは彼女の看護師としての知識や経験をもとに、筆者の状

況を正確に把握し、長期滞在の実現可能性、安全性を判断するためだったと考えられる。なぜなら、ホームステイ先探しを引き受け、滞在先を手配することは、筆者の現地での生活に対し責任を負うということにもなるからである。

筆者の要望に沿って、京子さんはホームステイ先を探し始める。筆者をホームステイとして受け入れても良いという家庭が見つかり、実際に筆者の障害の状態でも住める家かどうかを写真等で確認した後、具体的なステイ費の交渉や契約内容確認（在学証明書による筆者の身分証明など）の仲介を京子さんが行う。正式に契約を交わすのは、筆者の滞在許可（ビザ）がおり、バンクーバー行きの航空券を購入して渡航日が確定してからとなる。

ここまでは、すべて渡航前のサポートであり、実際に京子さんと対面するのは、バンクーバーに到着してからである。彼女のクライアントは、筆者のようなワーキングホリデー・プログラム⁴を利用する若者から、観光目的⁵で訪れる「ビジター」、子どもの英語教育のために母子だけで渡加する「親子留学」、就労ビザを得て、将来的には移住（永住権取得）を考えている人たちなどである。このように京子さんのクライアントの身分や滞在資格、バンクーバー渡航の目的などバックグラウンドはさまざまであるが、すべて日本人である。日本語のみでホームページを開設していることから、日本人のみを相手にしたビジネスであることがわかる。

それでは、京子さんはどのようにクライアントのステイ先を見つけ、そのステイ先の情報をどのようにクライアントに伝えるのだろうか。また、彼女はクライアントに現地の生活に関する情報やアドバイスを提供するが、その情報はどのようなものだろうか。彼女が教える情報やアドバイスには、彼女がどのようにバンクーバーの社会や人びとを見ているかということが表れている。また、京子さんがクライアントに、自らが勧めるステイ先をどのように紹介するかということから、日本人である彼女が日本人を相手にビジネス展開する際の戦略が表れている。次節では、筆者のホームステイ先探しを事例に、ステイ先としてどのような家庭や場所を勧めるのかに着目することを通して、京子さんが見るバンクーバー社会の諸相を明らかにしたい。

1-2. オリエンテーション—ある日本人女性から見たバンクーバー社会

1-2-1. 西と東—バンクーバーの社会階層

京子さんがクライアントのステイ先を見つける方法は、以前から付き合いのある知人・友人に話をもちかけるか、新たに募集をかけて探すといった具合である。前者の場合、たとえば、

⁴ ワーキングホリデー・プログラムは、18歳～30歳までの日本国民が、ワーキングホリデー協定を結んだ国に1年～2年の間、長期滞在できるビザ制度のことである。ワーキングホリデーの場合、働くことが許可されている。カナダの場合、滞在期間は1年である。

⁵ カナダへは、日本のパスポートがあれば6カ月間滞在することができる。

子どもの同級生の母親で以前にもホームステイの学生を引き受けた経験のある人や、自身が通う教会で知り合う人などである。新たに募集をかける場合でも、京子さん自身が実際にオーナーと直接会って面談し、クライアントが滞在することになる部屋や近隣の環境の下見を行う。クライアントの受け入れ先を探す際、「ホスト（ホストファミリー）が良い人」を最優先して、自分自身が実際に会って信頼できると思った人のみ紹介することである。

滞在先として推薦するエリアも、ある程度限定している。主に彼女自身が暮らすリッチモンド市西南部やバンクーバー市西部（Westside）に位置する家をステイ先として紹介しているという。その理由として、これらのエリアに暮らす人びとは、比較的経済的に余裕があり、生活水準が高いためだと彼女は説明する。

「ある程度閑静な住宅地で、そこに住む方の生活がある程度高い水準のエリアでないと。ホスト（ホストファミリー）の生活に余裕のないエリアですと、十分なサポートが難しいのでバンクーバー・ウェストサイド、UBC、Dunbar、Kerrisdale、Richmond west-south 等をすすめたいと考えています。」⁶

ここで彼女が指す「ホストの生活に余裕のないエリア」というのは、主にバンクーバー市東部（Eastside）のことである。バンクーバー市の西部と東部の違いは、住宅価格や家賃の高さの違い、また犯罪率、治安の良し悪しとともに語られる。彼女がこれまでどのように賃貸物件やホームステイ先を探してきたかを語る時、クライアントの安全を重視するため、東部には足を踏み入れてこなかったと話した。

このような説明から、京子さんは、バンクーバーには、生活に余裕のあるエリアと、生活に余裕のないエリアがあることを見ていることがわかる。前者は、バンクーバー市西部やリッチモンド市西南部を含む「ウェスト」を指し、後者は、バンクーバー市東部を中心とした「イースト」である。また、「ホストの生活に余裕のある」とは、その場所に住む人びとの経済レベル、社会階層を指す。つまり、「ウェスト」には、中・上層の人びとが住み、「イースト」は低所得者層が暮らしているということを意味している。さらにこのことは、京子さんから見た「安全なエリア」と「安全でないエリア」という区別にも結びついていて、京子さんは、「ウェスト」を自身のクライアントに紹介できる安全なエリアと見る一方、クライアントの安全を保障できないため、住居探しに適さないエリアとして「イースト」を認識するのである。このように、「ウェスト」と「イースト」は、そこに暮らす人びとの社会階層の違いを象徴する言葉として捉えら

⁶ 筆者との渡航前のメールでのやりとり（2012年8月20日）から抜粋。

れている。

1-2-2. 「リアルカナディアン」ーバンクーバーの民族的多様性

ホームステイ先探しの場合、ホストファミリーの民族・文化的バックグラウンドも考慮している。興味深いのは、京子さんがホストファミリーを紹介する上で、その人（家族）が「カナディアン」であるということを強調することである。

たとえば、ある時、彼女とスカイプ（skype）を利用して話をした際、ホストファミリーの民族・文化的背景の話になったことがあった。筆者は彼女に、バンクーバーに滞在する間、現地の日系組織でボランティアをしながら、日系カナダ人コミュニティについて調査する計画であることを伝えていた。そのため、彼女から日系カナダ人の家庭でホームステイをしたいかと尋ねられた。彼女は、筆者が日系カナダ人の家庭でホームステイすることができれば、日系カナダ人から話を聞く機会が増え、筆者の調査に役立つと考えたようだった。筆者は、ホストファミリーがどのような文化的背景をもつ人でも構わなかったため、日系カナダ人にはこだわっていないこと、どのようなバックグラウンドでも良いことを伝えた。すると、彼女は、次のように話した。

「なるべくカナディアンを探します」

この京子さんとのやりとりは、筆者にとって興味深いものであった。「なるべくカナディアンを探します」という話しぶりからは、まず、カナディアンとカナディアンでない人たちがいることを想起したし、「なるべく」という表現からは、前提として筆者がカナディアンの家に滞在することを希望しているだろうと京子さんが思っていることが感じられた。それに、そもそも彼女が言う「カナディアン」とはどのような人のことだろうと興味が湧いたのである。

これに関連して、もう一つ興味深い点は、京子さんのホームページ上に、ホストファミリーの紹介について、「聞きとりやすいきれいな英語を話すリアルカナディアン」の家庭を紹介すると書かれていることである。「リアルカナディアン」という言葉は初耳だったので、興味をそそられた。この表現からわかるのは、京子さんが言う「リアルカナディアン」は、カナディアンでも「聞き取りやすい英語を話す」カナディアンである。ということは、カナディアンでも、聞き取りづらい英語、つまりアクセントのある英語を話すカナディアンがいるのだろうと思った。すなわち、カナディアンのなかでも、聞き取りやすい英語を話す「リアル（本物の）」カナディアンがいる一方で、アクセントのある英語を話す「リアル」でないカナディアンがいるということである。では、彼女が指す「リアルカナディアン」とは、具体的にどういう人なのだ

ろうか。

また、「カナディアン」あるいは「リアルカナディアン」という言葉は、彼女が想定する顧客対象にアピールするための宣伝文句であり、いわば彼女のビジネスの「売り」だと考えられる。京子さんの顧客対象は、前述したように日本人である。では、彼女は「カナディアン」や「リアルカナディアン」という言葉を通して、日本人に何をアピールしたいのだろうか。

京子さんがここで示す「カナディアン」とは、いわゆる「白人」である。カナディアン＝白人とするイメージは、日本人に限らず、カナダ社会のなかにも根強く存在するイメージである⁷。しかし、移民の国カナダでは、カナダ生まれのカナダ育ちだとしても、中国やフィリピンのルーツを持つ見た目はアジア人の「カナディアン」がいたり、国籍上はカナダ市民権をもつ「カナディアン」であっても、英語に強いアクセントをもつ移民という場合もある。つまり、カナダ生まれで、「白人」で、英語のネイティブ・スピーカーであるというような「カナディアン」像は、実際のバンクーバー社会に生きる「カナディアン」の姿に必ずしも重なるとは限らない。

一方で、カナダ人の家庭でホームステイを希望する日本人が、渡航後、思い描く「カナディアン」「カナダ人」イメージと現実の間にあるズレに気づき、落胆するケースは少なくない。そのため、バンクーバーでのホームステイに関する日本人向けの情報サイトでは、「ホームステイ先は白人であるとは限らない」ということを前もって説明しているケースも見られる⁸。

このような背景があるなかで、京子さんは、自身のビジネスを宣伝する上で、あえて日本人がイメージする「カナディアン」像を活用する。それを表すのが「リアルカナディアン」という言葉であると考えられる。つまり、彼女が言う「リアルカナディアン」とは、ステレオタイプのカナディアンのイメージ通りの人、つまり、カナダ生まれで、「白人」で、英語のネイティブ・スピーカーということだと考えられる。そのような人をあえて「リアル」な「カナディアン」と書くことで、日本人クライアントの期待を裏切らないという意味合いが暗に込められていると捉えられる。

このように京子さんは、クライアントに「よりカナダ的」な人を紹介する。それは、彼女自身の日本人としての感覚から、日本人が好むもの、好まないものを想定した結果の行為である。これは、彼女が日本人相手のビジネスを営むうえでの戦略なのである。

⁷ カナダの作家であるN.ピソングットは、カナダ社会には主たる構成員が白人であるという根強い認識があり、非白人はいつまでたっても「どこから来たのか？」という問いにさらされることで絶えず出自が問題とされ、マイノリティ意識を植えこまれると指摘する[寺迫 1998]。

⁸ カナダやバンクーバーでのホームステイに関する情報を提供するホームページを参照。

https://www.google.co.jp/?gfe_rd=cr&ei=x7aDVLiQI-bS8gfhtYHAAQ&gws_rd=ssl#q=%E3%82%AB%E3%83%8A%E3%83%80%E3%80%80%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A4%E3%80%80%E7%A7%BB%E6%B0%91

1-2-3. 「中国の人」「台湾系」「香港系」

しかし、いつでも必ず「リアルカナディアン」をクライアントに紹介できるとは限らない。たとえば、京子さんが筆者のホームステイ先として手配したのは、広東省と香港出身の移民夫妻の家庭である。彼女は、筆者に夫妻のことを、「香港出身のカナディアン」と紹介した。香港出身のカナディアンと紹介することで、「カナディアン」ではあるが、香港にルーツをもつ人たちであり、「白人」ではないことを示唆する。また、中国系と紹介するのではなく、香港系と紹介した。このように京子さんは、外見的、またエスニックな背景だけを言うのであれば「中国系」でも伝わる場合でも、「香港系」「台湾系」「中国の人」というように差異化して語っていた。彼女が指す「中国の人」は中国本土出身者であり、彼らと「香港」や「台湾」の人を区別して語る。これは、香港や台湾が地理的・政治的・文化的に中国（中華人民共和国）とは異なる地域であるという視点から区別する意味合いだけでなく、「中国」「香港」「台湾」のそれぞれに彼女が抱く印象が異なることや、日本人がそれぞれに抱く印象の違いを理解したうえで、意識的あるいは無意識的に区別して語るのだと考えられる。たとえば、一般的に日本人から見て、台湾＝親日と結び付けても、中国＝親日とは結び付かないということ、京子さん自身も日本人であるからこそ理解しているのである。このような理解に基づいて、意識的あるいは無意識的に、「中国」とひとまとめにして語ることをしないのである。ホームステイ先のご主人が広東省出身の中国本土出身者ではあっても、彼女は香港系として紹介するのである⁹。

小結

ホームステイ先を確保する過程で京子さんと交わしたやりとりを通して、見えてきたことを整理してみたい。

京子さんが筆者にホームステイ先として推薦するエリアを説明するとき、そこには彼女がバンクーバーをどのように見ているかということが反映されていた。彼女は、住む場所の違いを、そこに暮らす人びとの社会階層の違いと結び付けて認知していた。つまり、バンクーバーの「ウエスト」を、生活に余裕のある中・上層の人たちが住むエリアと捉える一方で、「イースト」は低所得者層が暮らすエリアとして捉えられていた。また、京子さんから見て、そのような経済的に余裕のある人たちが暮らす「ウエスト」は、安全なエリアであり、そうでない「イースト」は住むにあたって安全を保障できないエリアとして捉えられていた。

⁹ 興味深いのは、ホストファザー本人も、自らを広東省出身の「チャイニーズ」であるとは認めても、「中国本土には属していない」と話すように、中国本土出身者から自らを区別して語ることである。この点については、第6章で詳しく触れたい。

京子さんがクライアントにどのような人を紹介するかということから、彼女から見たバンクーバーの人びとの差異が見えてきた。つまり、カナディアンとカナディアンでない人。カナディアンのなかでも、聞き取りやすい英語を話す「リアル」なカナディアンと、英語にアクセントのあるカナディアン。また、「中国系」の背景をもつ人のなかでも、中国本土出身者、香港出身者、台湾出身者といった多様性も見えてきた。そのような多様な背景をもつ人たちのなかでも、京子さんが日本人クライアントに紹介するのは、「よりカナダ的」な要素を備えた人であり、そこには日本人相手にビジネスをするうえでの彼女の戦略が垣間見えた。

京子さんとのやりとりを通して浮かび上がるのは、彼女から見たバンクーバー社会であり、そこに存在する経済的、言語的、民族的多様性の諸相である。フィールドに入る過程で、筆者は、このような京子さんの見方に少なからず影響を受けた。しかし、実際にフィールドで生活してみると、彼女の見方とは異なる様相を帯びたバンクーバー社会が見えてきた。それは、筆者が想像していた以上に複雑な多様性を備えたバンクーバーの姿だった。

次章からは、具体的な場を事例として、フィールドワークを通して見えてきた多様性を描くとともに、それぞれの場で多様性をいかに包摂しようとしているのかということについて検討していく。

第2章 リッチモンド市中心地の「ニュー・チャイナタウン」

本章では、リッチモンド市の商業施設が集まる中心地（図1、図2）において、中国文化が表象される過程を検討することを通して、多文化的な状況があるなかで、特定の空間が特定の文化に結びつけて語られる様相を明らかにする。

図1 リッチモンド市（青線内）

（City of Richmond Hot Facts 参照）

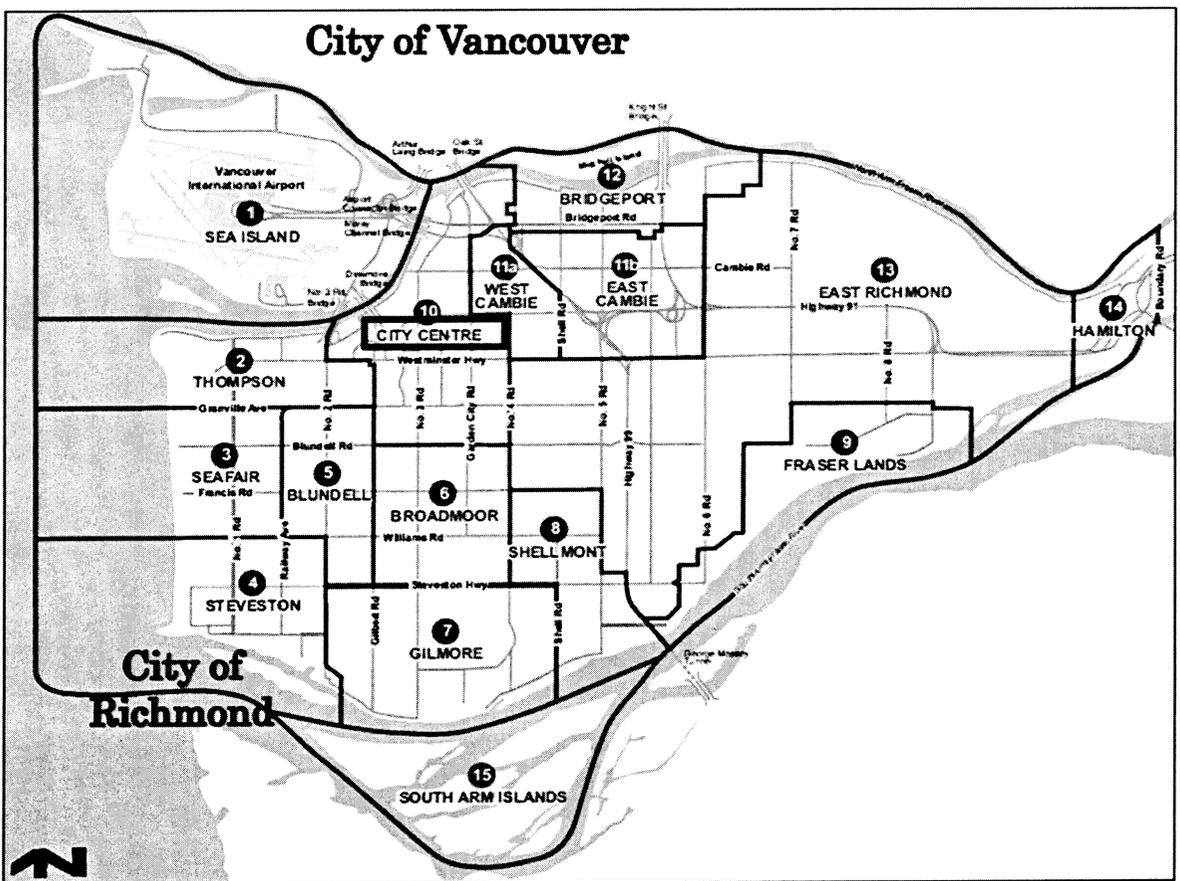
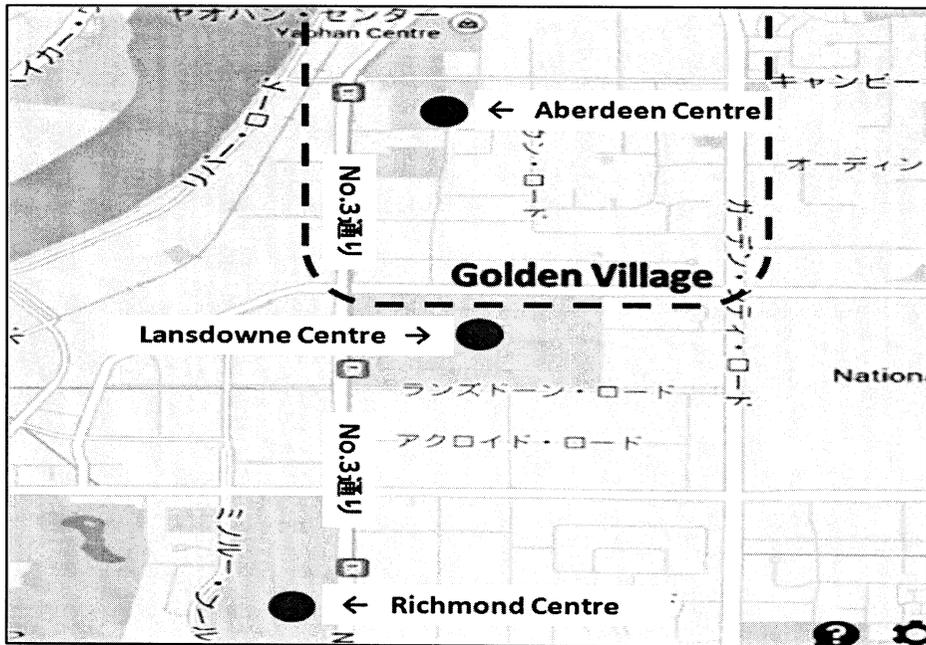


図2 リッチモンド市中心地（シティ・センター地区）の拡大図



(Google Map をもとに、筆者が作成。)

2-1. リッチモンド市における民族的多様性

2-1-1. 1970年代以前—バンクーバー郊外の「ヨーロッパ系住民のコミュニティ」

リッチモンド市 (City of Richmond) はバンクーバー市の南郊外に位置し、メトロ・バンクーバー (Metro Vancouver: バンクーバー大都市圏) に属す自治体の一つである。2014年現在、人口は約207,500人で、バンクーバー大都市圏の自治体のうち4番目に人口の多い市である¹⁰。1860年代から1950年代初頭まで、この地域は主に農業地域であったが、南西端に位置する漁村ステーブストン (Steveston) は鮭の漁場として栄えた[Dwyer et al., 2013: 12]。19世紀後半にステーブストンに大規模な缶詰工場 (キャナリー) が設立されると、漁業や缶詰加工業に従事するために多くの漁業従事者が集まり、日本や中国からの移民労働者も海を渡って移り住んだ。特に、日本の和歌山県から多くの移民が渡り、戦前のステーブストンには「ス村」

¹⁰ City of Richmond official website: Population Hot Facts 参照。
(http://www.richmond.ca/shared/assets/Population_Hot_Facts6248.pdf)

と呼ばれるほどの日系コミュニティが築かれていたとされる[山田 2000]。中国人移民も非熟練労働者としてキャナリーで働いていたが、日本人移民に比べ数的に少数であった。たとえば、世紀転換期のステーブストンにおいて、日本人の人口がおおよそ 2000 人だったのに対し、中国人は 100~200 人程度だったと言われている[Ray et al., 1997 : 87]。そのため、戦前のステーブストンでは、中国系移民は少数派として特に周縁化された存在だったと言われる[Ray et al., 1997 : 87]。

19 世紀後半からステーブストンには日本人や中国人といったアジア系移民の存在があったが、リッチモンド全体をみるとヨーロッパ系住民が圧倒的多数を占めており、アジア系住民が集住するステーブストンは「例外」的地域として捉えられていた。Ray ら[1997]は、1970 年代までのリッチモンドには、イギリス系およびヨーロッパ系住民からなるコミュニティとしての強固なアイデンティティが根強く存在したと指摘する。人口構成についても、1971 年時点でリッチモンドにおけるアジア系住民の割合は、全体の 5.5% (大半が日系移民) を占めるに過ぎなかったと報告されている [Ray et al., 1997 : 88]。

このように数的にもイギリス系およびヨーロッパ系の「白人」優位な社会のなかで、アジア系移民は厳しい差別や偏見の対象とされてきた。アジア系移民が多かったステーブストンでは、戦前、日本人漁師は白人漁師よりも量的・質的にも勝っていたため、白人漁師の間で反日・排日感情が高まっていたという[山田 2000 : 127]。また、中国人の多くはキャナリー内で手作業の仕事に従事していたが、大型機械が導入され作業の機械化がすすむと、中国人はそれまでの職から追い出された[Ray et al., 1997 : 88]。カナダ政府の移民政策にも、日本人移民と中国人移民への人種差別的措置が取られていた。中国人移民に対しては、1885 年に人頭税が課せられ、1923 年には中国人排斥法 (Chinese Exclusive Act) が制定されている[山田 2000 : 128, 王 2011 : 3]。また、アジア系移民は政治的な権利も剥奪されていた。1872 年には、ブリティッシュ・コロンビア州において、先住民と中国人の選挙投票権を剥奪することが州議会で決議され、1895 年にはそこに「ジャパニーズ」(日本国籍者およびカナダ生まれの日系人も含まれた) も加えられた。第二次世界大戦が勃発すると、日本人移民は「敵国人」とみなされ、1942 年には日系人は太平洋沿岸の居住地から内陸部の奥地へと分散的に強制移動・収容させられた[山田 2000 : 128-129]。私有財産も没収の対象とされ、ステーブストンの日系漁者は漁船を押収されている。

このように、戦前のリッチモンドおよびブリティッシュ・コロンビア州では、国や州のアジア系移民に対する人種差別的な政策のもとに、アジア系移民への差別・偏見が根強く存在したことがわかる。白人優位の社会のなかで、アジア系移民は社会的、経済的、政治的に周縁化された存在であったとみることができる。

戦争の終結後しばらく経って、中国人や日本人に対するこのような差別的措置がようやく解消されることになる。1947年に中国人排斥法が廃止されたことにより、すでにカナダに居住していた中国人移民は家族を呼び寄せることが可能となった。その2年後の1949年には、日系人に対する戦時措置法が廃止され、BC州沿岸地域に帰還することが認められた。内陸部の収容所に強制移動させられていた日系人の人びとのなかには、徐々にこの地に戻ってくる者もあらわれた。

一方、戦後のリッチモンド市は1960年代以降、商業区域が拡大された。市の北西にバンクーバー国際空港のメインターミナルが竣工されたことを皮切りに、商業化・都市化が進行した。同時に、バンクーバー市中心部から、より手頃で魅力的な住宅を求める人々がリッチモンド市に移り住むようになった[Dwyer et al., 2013 : 12]。こうして、リッチモンド市はバンクーバーの郊外住宅地としての性格を強め、人口増加の一途をたどる。

また同時期、カナダ政府の移民政策が改正された。従来の人種に基づき移民を選別する政策が廃止され、新たにポイント制度を導入することによって、学歴や教育程度が高く、専門的スキルを持った移民が優先的に受け入れられるようになった。1960年代の国の移民政策の改正は、カナダの諸都市において、従来の人種差別的な移民法のもとで差別されてきたアジア地域からの移民が増加する大きな転換点になったとされる [谷垣 2010 : 186]。

しかし、1970年代になってもなお、リッチモンド市はヨーロッパ系住民が多数派を形成する白人社会であった。Rayら[1997]は1981年のセンサス（国勢調査）を分析し、この時期はまだリッチモンド市人口の民族構成に大きな変化はみられないと報告している [Ray et al., 1997 : 88]。このように1980年代初頭においても、リッチモンド市では依然としてヨーロッパ系住民が多数派を構成し、同市内外の住民からバンクーバー郊外の「ヨーロッパ系住民のコミュニティ」として見られ続けた。G. Deer[2006]によれば、このような「ヨーロッパ系住民のコミュニティ」としてのリッチモンド市像が、1979年にリッチモンド市で出版された書籍のなかに色濃く表れていると指摘している。この書籍は、リッチモンド市誕生100周年を記念して出版されたもので、同市の歴史委員会主導のもと市の歴史をまとめたものである。そのため、市行政の利害や意向に強く方向づけられて編纂された、市「公認」の歴史本であるとG. Deerは捉える。G. Deerによれば、この本を通してリッチモンド市のアングロ・ヨーロッパ系コミュニティとしての歴史や特色が強化される一方で、日本人移民や中国人移民がいかにスティープストーンに定着していったかが触れられながらも、そのようなアジア系移民が危険な犯罪者と結び付けて引用されたり、白人労働者の職を奪う競争相手として描かれることによって、アジア系住民は社会の周辺的位置に追いやられ、常に「他者」として表象されてきたと指摘している [Deer 2006 : 26-28]。

2-1-2. 1980年代以降—中国系移民の増加と「ニュー・チャイナタウン」

しかし1980年代後半になると、このような「ヨーロッパ系住民のコミュニティ」としての均質的な自画像を大きく揺さぶる変化が生じ始める。1980年代以降、リッチモンド市では都市開発が進むとともに、海外からの移民が急増し、それにより市住民の民族構成に劇的な変化が生じた。報告によれば、1971年には、市の人口の87%以上がヨーロッパ系住民であったのに対し、1991年には人口の40%以上の人びとが海外生まれであったとされている[Chiang 2001: 21]。なかでも、中国系移民は著しく増加した。1980年代以前は人口の1%にも満たなかったのに対し、1981年に7%、1991年に16.5%、1996年には33%を占めるに至っている[F. S. Chiang 2001: 21]。2011年のセンサスに基づく資料によれば、リッチモンド市には現在140もの異なる民族的背景をもつ人びとが暮らしている。そのうち最大のエスニック・グループは「中国系 (Chinese)」49%で、次いで「イギリス系 (English)」、「カナダ人 (Canadian)」、「スコットランド系 (Scottish)」、「フィリピン系 (Filipino)」、「東インド系 (East Indian)」となっている[City of Richmond, *Ethnicity Hot Facts 2014*]。

このように、現在のリッチモンド市において、数的に多数派を構成するのは「中国系」住民である。「中国系」と言っても出身地や移住時期、社会階層の違いによって、一くくりににはできない多様性がある。たとえば、戦前の移民が広東地域の農村出身者であったのに対し、戦後、とりわけ1980年代以降に増加したのは、香港からの移民である。香港からの移民が増加した一番の要因は、香港の中国返還であった。谷垣[2010]によれば、1984年の中英共同声明によって、1997年に香港が正式に中国に返還されることが決まると、中国共産党政権下の生活に不安を抱いた人びとは海外移住を決断したという[谷垣 2010: 183]。また、天安門事件直後の1990年にも香港から多くの人びとがカナダへと移住した[谷垣 2010: 183]¹¹。この時期、香港からの移民が大挙して押し寄せたバンクーバーは、「ホンクーバー」とも呼ばれたという[谷垣 2010: 182, 王 2011: 9]。香港からの移民数は、中国返還後は減少し、2000年代以降は中国本土出身者がカナダへと移民してくるようになる[谷垣 2010: 182]。また、社会階層について言えば、1980年代以降の移民のなかには、香港や台湾、中国本土からの教育程度が高く、経済的に余裕のある「ミドルクラス」の移民が多く含まれたとされ、彼らの多くがリッチモンド市に移住してきたとされる[王 2011: 13]。

従来、移民は移民先の新しい社会で遭遇する様々な困難に対処していくために、まずはエスニック・タウンのような同胞が集住する地域に居住すると考えられてきた。バンクーバーにも、

¹¹ 谷垣によれば、香港からのカナダへの移民は、1987年に3万人、88年に4万5800人、90年には6万2000人と増加した[谷垣 2010: 183]。

19 世紀後半から現バンクーバー中心街の東部に中国系移民が集住するようになり、「チャイナタウン」が形成された。しかし、上述したような近年の中国系移民は、そのようなエスニック・タウンを介さず、直接郊外に居住するという点が注目されている[Ray et al., 1997 : 89]。

こうして多くの中国系移民が流入したことで、リッチモンド市には多様な中国文化がもたらされた。中国語のテレビ・チャンネルやラジオ、中国語の新聞などが普及している。また、香港の食文化や、中国本土の地域別の食文化がもたらされ、飲茶のレストランのほか、中国食材を扱う店が多く立地している。それらの店の看板には広東語や標準中国語が表記される。リッチモンド市中心街を南北に走る No.3 ロード沿線には、そのような中国語を表記した看板を掲げるレストラン、スーパー、美容院、家具店、銀行、医院などがあらわれた。

こうした状況を背景に、リッチモンド市は「バンクーバーのニュー・チャイナタウン」[山下 2009, 2011]として紹介されるようになる。「ニュー」と呼ばれるのは、バンクーバー市中心部の東部に 100 年以上前から存在する「チャイナタウン」と区別するためである。このチャイナタウンが、バンクーバーの中国系移民の歴史を伝える「歴史的場所」として観光地化され、近年の移民家族がもはや生活の場として選択しなくなった一方で、「ミドルクラス」中国系移民が集まる新たな中心地としてリッチモンド市が注目されるようになったのである[Lee, Peter S. and Li, Eva Xiaoling 2013]。

このようにリッチモンド市は、近年「ニュー・チャイナタウン」と称されるように、中国系住民の住む街として表象されている。しかしセンサスが示すように、リッチモンド市の民族構成は多様であり、また、前述したスティーブストンのように歴史的に「ジャパントウン」として知られてきた村もある。実際には多様な文化的背景をもつ人たちが暮らしているなかで、なぜ同市は「ニュー・チャイナタウン」として表象されるのだろうか。なぜ、人びとはリッチモンド市を中国系住民の街として認識するのだろうか。次節からは、このような疑問について検討していく。

2-2. 数の多さと文化の表象

本節では、リッチモンド市が「ニュー・チャイナタウン」として表象される理由を、同市中心街の商業施設に表れる言語に着目することを通して検討すると同時に、中国文化が強調されることにより見えてこない多様な文化の存在を示す。

2-2-1. 中国系住民の存在を際立たせる中国語表記

リッチモンド市北西部に位置する中心街（シティ・センター地区）は、南北に走る幹線道路 No.3 通りに沿って展開している。この通り沿いには大小さまざまな規模の商業施設が隣接して

おり、その中心的な施設として3つのショッピングセンターが立地している。この3つのショッピングセンターのうち、シティ・センター地区の南半分に位置しているのが、リッチモンド・センター (Richmond Centre) とランズダウン・センター (Lansdowne Centre) で、同地区の北半分に位置するのがアバディーン・センター (Aberdeen Centre) である。アバディーン・センターが位置する同地区北部一帯は「ゴールデン・ビレッジ (Golden Village)」と呼ばれ、市の公式観光サイトでも「リッチモンドにおけるアジア文化の中心地」として紹介されている¹²。ゴールデン・ビレッジには、アバディーン・センターのほか、日本および中国の商品を中心的に扱う「ヤオハン・センター (Yaohan Center)」、香港スタイルのショッピングセンターである「パーカー・プレイス (Parker Place)」といった中国系オーナーが経営する商業施設が多く立地している。また、アバディーン・センターの向かいにある「プレジデント・プラザ (President's Plaza)」は、中国系のスーパーマーケットや飲茶レストラン、中国系の干物店や雑貨店、ホテルや仏教施設が入った複合施設である。¹³

フィールドワーク中、筆者はホームステイ先の中国系移民夫妻とともにプレジデント・プラザをしばしば訪れた。広東と香港出身の夫妻は、週末になると朝食と昼食を兼ねて飲茶レストランで外食することが多く、筆者も同行して一緒に食事をとった。夫妻のお気に入りの飲茶レストランの一つが、プレジデント・プラザ2階にある「Red Star」である。このレストランは、筆者にとってエキゾチックな魅力をもつ場所であると同時に、どこか所在無げな気分になるような場所でもあった。というのも、客やスタッフの間では中国語が飛び交い、訪れる度に「ここに日本人は自分だけではないか」という気持ちになるからである。レストランの入り口に着くと、受付のスタッフが「ジョーサン (おはよう)」とあいさつして、夫妻と広東語で席の位置や何人客かというやりとりを交わす。週末の11時過ぎにもなると、レストラン内は中国系と思われる家族客で混みあい、親戚一同で円卓を囲んで食事をしている姿も見かけられた。円卓のテーブルに着いてメニューを見ると、中国語しか書かれていなかった。初めてこのレストランを訪れた時、ホストファザーのウィリアムさんが店員に、英語のメニューがあるかどうかを店員に尋ねると、しばらくして英語のメニューを店員が持ってきてくれた。それを見てホストマザーのジェイミーさんが、「英語のメニューなんてあったのね」と言っていたのを覚えている。

その後も夫妻と1カ月に1~2度の頻度でこのレストランに通ったが、客の大半はアジア系 (中国系と思われる) の顔立ちの人たちで、時々、中国系の友人や恋人あるいは配偶者と訪れ

¹² Tourism Richmond のホームページを参照。
(<http://www.tourismrichmond.com/things-to-do/golden-village/>)

¹³ Tourism Richmond のホームページを参照。
(<http://www.tourismrichmond.com/things-to-do/golden-village/>)

ている「白人」客を見かけることがあったぐらいである。

前述したゴールデン・ビレッジに点在する商業施設では、英語と中国語（簡体字と繁体字）の二言語を表記する店をかなり多く目にする。店舗によっては、中国語しか表記していない場合もある。また、これら施設のホームページを参照してみると、すべての施設が英語と中国語のウェブサイトを用意し、なかには英語と簡体字と繁体字の3言語のウェブサイトをもつ施設もある。このことから、これらの施設が、中国系住民を中心的な顧客対象としていることがわかる。

ゴールデン・ビレッジ以外の場所でも、No.3 通り沿いを中心に、リッチモンド市中心街では中国語の看板を掲げた店を目にすることは多い。中国系のレストランや食料品・日用品店に限らず、銀行や医院、美容院などの専門サービス店なども、英語のほかに中国語を表記した看板を掲げている（図3）。このことは、リッチモンド市が多くの中国系住民にとって日常的な生活の場であるということを示している。また、中国語の看板は、中国語を理解する客層を呼び寄せるアピーリング・ポイントにもなり得る。つまり、商業的観点から見れば、店のオーナーたちにとって中国語は、中国系の人びとを惹きつけるためのツールであると捉えられる。

店のオーナーたちが中国系の客層を惹きつけるために中国語の看板を掲げることは、同時に、その店々が立地する空間の景観に、中国文化というエスニックな要素を付け加える役割を果たしている。山下[2011]は、都市地理学の観点から、地域の景観を特徴づけるエスニックな要素として、宗教施設や民族の伝統的な建築様式、街を歩く人びとの顔立ちや衣装などとともに、看板に用いられる文字を挙げている[山下 2011 : 72]。すなわち、看板に記される中国語の文字は、リッチモンド市を中国系住民の街として特徴づける要素であり、同市を「ニュー・チャイナタウン」として人びとにイメージづける作用をもつと考えられる。このイメージは、また、中国系住民が人口のほぼ半数を占めるという事実によって強化されていると考えられるだろう。

2-2-2. 中国文化の陰で見えづらくなる多様性— “Are they Canadian or Chinese?”

中国系住民の多さに加え、中国語を表記した看板が目立つことによって、リッチモンド市が中国文化や中国系の人びとと結び付けられてイメージされるようになったと考えられる。こうして中国語表記が目立つことにより、実際には中国系以外の多様な文化的背景をもつ人たちが暮らしているということが見えづらくなる。

事例：

ある時、スカイトレイン（電車）内で、近くに座っていた男性（白人男性）に「日本人？」と声をかけられたことがあった。その男性と、目的の駅で降りるまでの間、短いやりとりを交

わした。筆者が日本から来ていること、1年間滞在する予定であること、リッチモンド市でホームステイをしていることを話したあと、次のような質問を投げかけられた。

「彼ら(ホストファミリー)は、カナディアン?それともチャイニーズ? (“Are they Canadian or Chinese?”)」

筆者は、このように彼が筆者のホストファミリーの文化的背景を限定した形で質問したことに少々驚いた。なぜなら、彼は「ホストファミリーはどのような人か?」とか「ホストファミリーは何人か?」という聞き方をするのではなく、「カナディアンかチャイニーズか」というように、あたかもその2択しかないような聞き方をしたからである。実際、筆者のホストファミリーは広東省と香港出身の中国系移民夫妻だったので、結果的に彼はこの2択形式の質問によって、筆者のホストファミリーがどのような人物かを言い当てた形となった。

彼の質問を通して表れるのは、リッチモンド市が中国という特定の文化(それを担う人びと)と強く結び付けて認識されているということである。「カナディアンかチャイニーズか」という二項対立的な見方によって、数的に少ない、その他の多様な文化の存在は見えづらくなる。しかし、実際には、中国語の看板を掲げる店舗が多く立ち並ぶなかに、フィリピン系の店舗や日系の店舗がはさまれて営業していたりする(図4)。日本語やベトナム語の看板を掲げる店もある(図5)。一見すると普通のハンバーガーショップが、実はフィリピン系オーナーによって経営されており、フィリピン系住民が通い、常連客と店員がタガログ語で会話していたりする。

さらに、リッチモンド市に中国系オーナーが経営するショッピングセンターやスーパーマーケットが進出し、中国系商品を中心としたアジア系の商品が手に入りやすいことで、中国以外のアジア地域出身者の生活の場となっている側面も見逃せない。たとえば、6年前に日本からバンクーバーに移り住み、リッチモンドに住みながら、アバディーン・センター内の日系美容室で美容師として働いている日本人女性(30歳代)は、筆者とのやりとりの中で次のように語った。筆者が、リッチモンドには中国系の人たちや店が多くて、最初の頃は驚いたと話した後で、

「本当にそう。アジアって感じ。でも、だからこそ、住めてるんだと思う。アジア色が無くても全部ウェスタンだったら、たぶんこんなに長く暮らせてないと思う。」

中国系住民の数の多さや、中国系商業施設や商店の展開・充実と中国語の看板の存在によっ

て、近年、リッチモンド市は「ニュー・チャイナタウン」と称される。このように中国文化が強調され、表象の対象となる一方で、数的に少数派の人たちのエスニックな文化は表象の対象とならず、景観的にも目立たない存在であった。しかし、日本人女性の話の例からは、特定の空間が特定の文化とその文化を担う人びとにのみ結び付けて語られる裏で、実際は、もっと多様な人びとの日常生活の場が、同じ空間のなかに存在しているのだということが想像される。

2-3. 中国語のサインをめぐる摩擦

中国語を表記した看板が増え、存在感を増してくるようになると、地域住民や外部の人びとの目には、あたかもそこに「チャイナタウン」が作りあげられるような、また、その領域を拡大させようとしているかのように映る可能性がある[河上 2010:114]。また、中国語の看板は、中国語を理解する客層への商売的なアピールとなる一方で、中国語を理解しない人たちを遠ざける可能性もはらんでいる。ここでは、中国語の看板をめぐる生じた論争に着目し、数の多さによって中国語表記が「問題」として表象される様相を見ていく。

2-3-1. 中国語表記問題

2012年～2013年の筆者の滞在中、『Vancouver Sun』や『Richmond Review』などの地元新聞やインターネット記事上で、リッチモンド市における中国語の看板をめぐる議論が展開されていた。たとえば、記事上では「Chinese-only sign debate: All Canadians benefit from common language.」(2012年1月14日付け Vancouver Sun)、「Chinese Signs In Richmond: Should There Be A Limit?」(2013年3月15日付け The Huffington Post B.C.)、「English should predominate in Richmond signs. Many Chinese agree. Update」(2013年3月16日付け Vancouver Sun)などの見出しが躍っていた。この議論は、ある地元住民の女性が、リッチモンド市において中国語だけを表記し、英語を表記しない看板が増えていると主張する手紙を地元新聞社に送ったことから始まった。そして、その女性を含む2人の地元住民が、リッチモンド市議会に対して、商業用の看板に表記される中国語を制限する法律を制定することを求めるといった内容を地元新聞が取り挙げ、注目を集めた。

この地元女性たちや、彼女たちに賛同する人たちは、同市において中国語のみの看板が増えていることや、たとえ中国語と英語の二言語が表記されていても、英語が中国語に対してフォントが小さいことなどを批判するとともに、英語を優先して表記するべきであると主張した。

また、ブリティッシュ・コロンビア州では、表現の自由の名のもとに外国語のサインを掲げる

ことが認められているが、それは「多文化主義への誤ったアプローチである」¹⁴とか、移民の社会的分離を妨げるためにも英語を優先することが必要だとする主張もあらわれた。

一部の地元住民が中国語の規制を求める嘆願書を提出したことに對して、市議会側が要望をのむことはなかった。その理由として、看板にどのような文字を表記するかを決めるのは、店のオーナーの特権であると同時に、どのような店に行くかを選ぶのは買い物客の自由であると説明された。結局、看板の文字表記の制限に関する申し立ては却下され、騒動は一応おさまりを見せた。

中国語の看板をめぐる巻き起こった一連の議論のなかで興味深い点は、中国語のみの看板が多すぎるとする主張とは裏腹に、実際には、そのような事実は存在しないということが調査によって明らかにされたことである。この調査結果は、リッチモンド市の諮問委員会の一つで、異文化交流に関する問題を扱う委員会 (International Advisory Committee) のメンバーであるジョージさん (男性) によって発表された。委員会のメンバーが、中国系商店が多く立地するシティ・センター地区の No.3 通り沿線¹⁵の看板を一つずつ調査して、中国語のみを表記した看板が実際にどれだけあるかということが示されたのである。その結果、869 の商店のうち、中国語のみを看板を掲げている店はわずか 11 件 (全体の 1.4%) だったことが明らかになった¹⁶。

筆者は知り合いの伝手を得て、ジョージさんにインタビューをすることができた。彼によれば、この調査で調べられた範囲には限りがあるにしても、中国語のみの看板は 900 弱の商店のうち 1 割にも満たないという結果が出て、しかも 11 件の店の多くは、中国語の本を扱う本屋など、中国系の客層のみを強く意識しているような店だったと説明した。筆者自身、同市中心街を日常的に利用するなかで、中国語の文字を多く目にする事から、中国語のみの看板が多いような印象を抱いていた。そのことを彼に伝えると、

「やっぱり、イメージがある。いっぱい目に入ってくるから、多くあるように感じる。でも実際はそんなになかったということが、この調査でわかったんです。」

と話した。彼によれば、中国語のみの看板が多すぎると主張していた人たちは、この調査結果

¹⁴ 2012 年 1 月 14 日付け Vancouver Sun 記事より。

(<http://blogs.vancouversun.com/2012/01/14/why-chinese-only-signs-arent-good-for-canada/>)

¹⁵ 具体的な範囲は、リッチモンド市北部の Bridgeport から、南部の Richmond Centre までの範囲である。

¹⁶ 2012 年 3 月 1 日付け Richmond News 記事、2013 年 3 月 18 日付け The Huffington Post B.C. 記事、および委員会メンバーのジョージさんへの直接の聞き取り (2013 年 7 月 6 日) による。

を信じようとせず、調査範囲が限られていて、リッチモンド市全体をカバーできていないと指摘されたとのことである。

「彼ら（中国語の看板にクレームをつける人たち）は、ここはカナダだから英語を使うべきだと言うんですね。でも、ここはカナダだから、誰がどんなサインを出しても、誰も文句は言えないんです。」（ジョージさん）

この調査でもう一つ注目される点は、中国語以外の言語を表記した看板については、調査の対象とされなかったことである。また、街中の看板をめぐる一連の議論でも、中国語以外のエスニックな言語の看板については、とりたてられる様子はみられなかった。なぜ、中国語の看板だけが、問題とされたのだろうか。その理由は、やはり、「数」だと考えられる。中国語の看板が問題となり、その他のエスニックな言語の看板は、実際にはあっても問題にならないのは、数が多いか少ないかの違いである。中国系住民の多さ、中国系商店の多さ、中国語を表記した看板の多さが、リッチモンド市のイメージを中国文化と結び付ける。しかし、数の多さが、リッチモンド市における中国文化を際立たせることは、同時に中国文化が「問題」や議論の対象として表象される要因にもなるのである。

2-3-2. 中国語の「異質性」と英語の「普遍性」

中国語の看板をめぐる議論は、リッチモンド市中心街という公共空間における文化の表象のあり方をめぐる問題だと言える。これまで見てきたように、リッチモンド市の事例からは、実際には多様な文化があっても、より数の多い文化が表象され、数の少ない文化は表象の対象とはならないことがわかる。中国系住民の多さ、中国語の看板の多さといった「数の多さ」は、リッチモンド市を中国系住民の街や「ニュー・チャイナタウン」として、人びとの認識を方向づける作用をもっている。すなわち、リッチモンド市において中国文化は数が多いから表象の対象とされ、数が多いゆえに問題として表象されるのである。

しかし、中国文化が問題の対象とされるのは、それが表象される公共空間があらかじめ支配的・中心的な集団の文化や価値観によって色濃く規定されているためである。このことは、多文化主義のはらむ問題点として指摘されてきたことである。つまり、「・・・公共圏を深く規定する言語や装いやマナーを文化的特殊性に規定されない無色透明のものとして扱うことでこれらに普遍性が付与されるのに対し、「異文化」や「他文化」として位置づけられた人びとの文化様式や生活態度は、「特殊」で「偏った」ものとして普遍性を装うそれよりも低位置におかれ、周縁化されつづける」という批判である[米山 2006 : 309]。中国語の看板をめぐる議論にお

いて、英語を優先すべきであると当然のように主張されるように、リッチモンド市において、英語は「一般的なもの」「当たり前なもの」として見られており、対照的に中国語は「特殊」なものとして位置づけられていることがわかる。

小結

本章では、リッチモンド市の中心地を事例として、人びとが特定の空間を特定の文化と結びつけて認識する理由を見てきた。リッチモンド市は、中国系住民が多く居住していることと、中心地において中国語を表記した看板が目立つことにより、現地の人たちから「ニュー・チャイナタウン」や「中国系住民の住む街」として見られていた。中国語を表記した看板の多さが中国文化や中国系住民の存在を際立たせる一方で、実際にはあるが、数的に少ない、その他の多様な文化は見えづらく、表象の対象とならない様子がうかがえた。また、中国語を表記する看板の多さが目立つがゆえに、問題視されたり、包摂の妨げとしても捉えられているということを、現地の地元新聞記事上で起きた論争をもとに検討した。中国語のサインの多さを問題視する声に対し、行政側は、商店の看板にどのような言語を表記するかはオーナーの自由であると主張し、商業的観点から中国語の表記を実質的に容認する態度がうかがえた。また、「ここはカナダだから、どのような言語のサインを出しても良いんだ」とする意見からは、多文化主義のもと、多様な文化が等しく尊重されるべきであるとする論理が働いていることが読み取れた。

図3 中国語の看板を掲げる店舗



図4 中国系商店の間に立地するフィリピン料理店（リッチモンド市中心地）



図5 日本語を表記する寿司店（リッチモンド市中心地）



第3章 パブリック・マーケットにみる多様性と二言語主義

前章では、リッチモンド市中心地の事例から、多文化的な状況があるなかでも、中国文化がとりわけ表象される理由を検討した。リッチモンド市が「ニュー・チャイナタウン」として表象されるのは、中国系住民人口の多さ、中国語を表記した看板の多さという「数」が関係していた。中国語表記をめぐる行政側の対応からは、中国語を表記した看板を掲げることは、中国語を母語とする住民を顧客として惹きつけようとするための商売上の戦略として正当であるとする論理が働いていることが見えてきた。それでは、このように特定の文化を強調することは、どのような場所でも認められているのだろうか。本章ではこのような疑問について、パブリック・マーケットの事例をもとに検討する。

3-1. グランビル・アイランドのパブリック・マーケット—公共空間のデザイン

パブリック・マーケットは、バンクーバー市のほぼ中央に位置するグランビル・アイランド (Granville Island) に立地している。グランビル・アイランドは、市中心街と残りの地域を分断するように流れる入江フォールズ・クリーク (False Creek) に浮かぶ半島状の一帯である。グランビル・アイランドは、これまで主に都市開発の分野で注目され、北米都市におけるウォーターフロント再開発の成功例の一つとして注目されてきた。その開発事業の一つとして、パブリック・マーケットに関しても紹介されてきた。これらの紹介記事を読むと、グランビル・アイランドやパブリック・マーケットが、いかに市民が集う「公共の場」として生まれ変わったかということに関心が寄せられており、そのデザイン性がとりわけ注目されていることが読み取れる。このことからわかるのは、パブリック・マーケットが「公共の場」として計画的にデザインされた場所であるということである。本節では、グランビル・アイランドおよびパブリック・マーケットの成り立ちに着目することを通して、同地区が「公共の場」としてデザインされた場であることを示す。そして、パブリック・マーケットが冠する「パブリック」の意味するものとは何なのかということを検討する。

3-1-1. グランビル・アイランドの再開発

現在のグランビル・アイランド地区一帯は、もともとはフォールズ・クリークの入り江に浮かぶ2つの砂州から成る地形で、この地域に暮らしていた先住民が貝を採集する場所として使用していたとされる。1916年に、カナダ連邦政府が管轄するバンクーバー港湾委員会 (Vancouver Harbour Commission: VHC) によって砂州の護岸が整備され、41エーカーの土地が出来上がると、工業用地域に指定された。以来、20世紀初頭の40年間にわたって、この

地区は製材所や産業用機械を作る工場が立ち並ぶ、バンクーバー市の工業、とりわけ造船業の中心地として機能した。最盛期には 1200 人の労働者がこの地区で働き、その名も当時は「工業の島」(Industrial Island) と名付けられる程であったという [McCullough 1998 : 7]。

1920 年代後半に大恐慌の影響で、工場が倒産するなど一時的に衰退する。第二次世界大戦が勃発しカナダが参戦すると、工業製品への需要増大から同地区は再び活気を取り戻した。しかし、戦争の終焉とともに、再び地区の活気が失われると、地区一帯のゴーストタウン化や地区周辺の水質汚染が問題視されるようになる。1960 年代には、多くのビジネスが同地区から撤退すると、いくつかの廃れた工場のみが残った。グランビル・アイランドは「荒廃した工業地帯」として見られるようになり、人びとが寄り付かない場所となってしまう。このような状況は、住民の環境意識の高まりのなかで問題とされるようになり、バンクーバー市と連邦政府は同地区の再開発計画に同意するに至った。

本格的に再開発が着手されたのは、1970 年代になってからである。この再開発事業の中心的なコンセプトは、グランビル・アイランドを「荒廃した工業地帯」から「人びとが集う快適な公共空間」へと生まれ変わらせることであったとされる [Donofrio 2007 : 24, 42]。1973 年に、この地区一帯は、カナダ連邦政府の委任機関である Canadian Mortgage and Housing Corporation (CMHC) の所有化に置かれ、再開発計画は CMHC の主導ですすすめられた [Donofrio 2007 : 24, 42]。

この計画の特徴の一つは、既存の建物が再利用されていることである。グランビル・アイランドにある建物のほとんど全てが同じ素材でできていることを活用し、再利用することで地区一帯の統一感を生み出すことが意図された。また、工業地帯として栄えた頃の面影を意図的に残すことで、歴史性を帯びた独特な空間をつくり出すことが念入りにデザインされたのである。現在、グランビル・アイランドは、地元住民のみならず、世界各地からの観光客が訪れるバンクーバー観光の名所として知られている。年間平均 1000 万人を集客するほどにまで成長し、北米におけるウォーターフロント開発の成功モデルとして注目を浴びるようになる [Donofrio 2007 : 48-49]。

グランビル・アイランド再開発事業のなかで一番の要とされたのが、パブリック・マーケット (Public Market) をつくることであった。この当時、北米の諸都市では「フェスティバル・マーケット・プレイス (festival marketplace)」とよばれる形態の複合商業施設が注目を集めていた [Donofrio 2007 : 32]。フェスティバル・マーケット・プレイスとは、「娯楽、社交、専門店ショッピング、そしてレクリエーションとしての食事を組み合わせ」た商業空間のことで、多くの場合、歴史的な場所や古くなった施設を再生・活性化させる目的で建設された [ベドナー 1993 : 81]。当時のバンクーバーに公共の市場がなかったことと、このような都市開発の風潮

もあり、カナダ連邦政府は、グランビル・アイランド再開発の核となる施設として、住民が日常食品の買い出しに訪れたり、季節ごとのイベントを楽しみに集まることもできるような公共の市場をつくる計画を採用した。

前述したように、グランビル・アイランドの再開発は既存の建物を再利用する形で進められた。パブリック・マーケットについても同様で、同地区北西にあった工場の建物が再利用されることとなった。機械が並び、倉庫として使用されていたスペースが、現在では屋台や調理場へと姿を変えた一方で、頭上には鉄骨やレールがそのまま残されたままになっており、工場として稼働していた当時の面影が残されている。そうして、1979年7月12日、パブリック・マーケットは操業を開始し、以来、グランビル・アイランドの集客、経済のアンカーとして機能している。

操業当初、マーケットには21の店舗しか入っていなかったが、筆者の調査当時（2013年時点）には49の店舗（Permanent Business）が営業をおこなっていた。店の種類の大半は食料品店であり、青果や魚、肉、ソーセージ、パスタ、チーズ、パン、ベーグル、はちみつ、お茶、チョコレート、アジア地域の香辛料などを扱う専門店のほか、スイーツ店やカフェ、イタリアンやフレンチの惣菜を扱う店などが軒を連ねている。さらに、マーケットの北西側の建物はフードコートになっていて、フィッシュ・アンド・チップスやハンバーガー、サンドイッチやホットドッグといった北米のファストフード的な店から、ギリシャ料理、メキシコ料理、インド料理、日本料理、中国料理、タイ料理といった多国籍な料理ブースが立ち並んでいる。さらに、マーケット内には49の店舗のほかに、さまざまなクラフトを扱う露店が出ている。そのような露店を出す人びとは「デイ・ヴェンダー」（Day Vendors）と呼ばれ、それぞれが手作りした工芸品を販売している。

このような専門店やフードコート、露店は、マーケットに人を集めるための工夫の一つである。このほかにも、人を集めるためにさまざまな工夫がなされている。たとえば、音楽を演奏するミュージシャンや、マジックや大道芸をするエンターテイナーが、マーケットの施設内でパフォーマンスをおこなっている。天気の良い日には、中庭やマーケットの外の広場で催しが行われたり、夏にはファーマーズ・マーケットが開かれる。そのような催しを見ながら友人や家族と食事や会話を楽しめるように、テーブルやベンチが備えられている。また、多目的トイレも設置され、車イス利用者や、子ども連れの家族への配慮がなされている。グランビル・アイランドにおけるビジネス活動に関するガイドラインのなかに、「バリアフリーを確保する」ことが明記されており、多目的トイレの設置はその取り組みの一つであると考えられる。ちなみに、このガイドラインでは、グランビル・アイランドが「すべての人びとにとって利用しやす

い（アクセス可能な場所）であるように取り組むことが指針として謳われている¹⁷。

エンターテイナーによるパフォーマンスの他に、訪れる人を楽しませる工夫として、マーケット内のデザインも注目されている。たとえば、ディスプレイの仕方である。さまざまな食材や惣菜がガラス窓越しにディスプレイされるだけでなく、パン作りやチョコレート作りの工程など、職人が調理する様子をも目で見楽しむことができるようになっている。そうすることで、販売している食品への信頼性、調理過程の透明性を確保するだけでなく、「開かれた市場」としての雰囲気をつくり出すことが意図されている[McCullough 1998] このように、パブリック・マーケットには、人を集めるためのさまざまな工夫が施され、訪れる人を楽しませるための空間づくりが念入りに計画されたということがわかる。

3-1-2. パブリック・マーケットの公共性

ここまで、グランビル・アイランドおよびパブリック・マーケットの成り立ちを見てきた。ここからわかるのは、グランビル・アイランドの再開発のコンセプトが、「荒廃した工業地帯」を「開かれた」「誰でもアクセスできる」「人が集まる」場所へと生まれ変わらせることだったということである。これは言い換えれば、この地区が「公共の場」となるよう、念入りに計画されてデザインされた空間であるということが出来る。また、グランビル・アイランドの再開発に関して特徴的なことは、再開発にあたって主導的な役割を担ったのが国であったということである。現在でも、グランビル・アイランドおよびパブリック・マーケットを管理・運営するのは、カナダ連邦政府の委任機関である CMHC である。

このような背景をふまえると、パブリック・マーケットが冠する「パブリック」が意味する2つの側面が見えてくる。1つは、誰でも訪れることができる、誰にでも開かれているという意味での「パブリック」である。つまり、パブリック・マーケットは、特定の人しか利用できないような私的／限定的な空間ではなく、訪れるにあたって本来制約のない「公の」「開かれた」場所であると言える。もう1つの「パブリック」の要素は、政府機関にかかわる場所であるということである。つまり、このマーケットは、国の機関の管理下にあるという意味で、オフィシャル（公式の）な場としての側面をもつのである。このことから、パブリック・マーケットは、異なる意味合いの「公共性」を兼ね備えた場所であるということが出来るだろう。

¹⁷ CMHC-Granville Island の指針 (Guiding Principles) として、その他に「持続可能な財政基盤を確保する」「グランビル・アイランドの歴史的特徴を保護する」などが挙げられている[Granville Island Leasing Guidelines 2007]。

3-2. 観光地としてのパブリック・マーケット

それでは、パブリック・マーケットは、現地の人びとにとって、どのような場として認識されているのだろうか。

筆者のホストファミリーで、バンクーバーに30年以上暮らすウィリアムさん(50歳代男性、中国系移民、リッチモンド市在住)は、このマーケットには滅多に行くことはないと話した。グランビル・アイランドのパブリック・マーケットは観光地であり、値段が高いのだと語った。また、彼が在住するリッチモンド市にあるパブリック・マーケットとこのマーケットでは、同じ「パブリック・マーケット」という名前であっても、全く性格が違っていると語る。

「リッチモンドの方は、すべてが安くて、主婦が行くところだ。グランビル・アイランドの方は観光地(“tourism place”)だ。あそこのマーケットは、ものは高いけど、観光客がやって来て気に入ったものを買っていく。そういう人たちは一回きりだし、多少値段が高くても気にしない。リッチモンドのマーケットは、安さの競争だ。安くして安くして競ってる。」

ウィリアムさんは、グランビル・アイランドは「観光地」「観光客の行く所」として捉えていた。また、市場であっても、値段が高いため、主婦が毎日の食卓に並べる食糧を調達しに行くような場所ではないと考えていた。ウィリアムさんがこのマーケットを「観光地」として見るのは、彼のホテル・マン時代の経験によるものでもあった。彼は長年バンクーバーのあるホテルに勤務していたが、宿泊する客の多くが、観光でパブリック・マーケットに出かけて、ホテル滞在中の軽い食料(フルーツやスイーツ、ベーカリーなど)を調達して帰ってきていたと語った。

ウィリアムさん以外の人からも、このマーケットが「観光地」であると語られるのをよく耳にした。たとえば、日本人女性京子さん(40歳代女性、日本人移民、リッチモンド市在住)も、このマーケットは観光地であると考えていて、普段の生活ではほとんど行くことはないと話していた。また、京子さんは、日本からバンクーバーへの移住者・短期滞在者の世話をを行うビジネスを営んでいるが、その一環として、クライアントの観光のために連れていくことがあるとのことであった。筆者がマーケットで調査している間、彼女が日本から移住してきたばかりの家族を連れて、このマーケットを案内している場面に遭遇したこともあった。

日本人旅行者にとって、このパブリック・マーケットはバンクーバー観光の要所の一つとなっている。たとえば、バンクーバーに関する日本語の観光情報サイトには、バンクーバーの「見どころ」やショッピング・サイトの一つとしてグランビル・アイランドが紹介され、なかでもパブリック・マーケットは「バンクーバーの台所」「グランビル・アイランドに行ったら誰もがまず足を運ぶ」というように取り挙げられている[ブリティッシュ・コロンビア州観光局 HP]。

実際に、グランビル・アイランドには、毎年多くの観光客が訪れている。筆者がマーケットで調査をしている間も、中国や日本、韓国、アメリカ、ブラジル、メキシコ、インドネシア、イギリス、ドイツ、南アフリカなど、さまざまな国・地域からの観光客と毎週出会った。マーケットでビジネスする側にとっても、地元の人（“local”）よりも観光客（“visitor”）の方が商売対象であるようだった。たとえば、デイ・ヴェンダーの一人で、カードを販売しているデイブさん（70歳代男性、カナダ出身）によれば、自分の顧客は以前は地元の客が多かったが、最近では観光客の方が多いと語っていた。

ウィリアムさんや京子さんの見方からは、このマーケットが生活の場としての市場というよりも、「観光地」あるいは「娯楽の場」として認識されているということがわかる。また、筆者の調査やデイブさんの話を通して、実際に世界中の国々から観光客が訪れる観光スポットであり、ビジネスする側にとっても彼・彼女ら観光客が商売対象となっているということがわかる。

3-2-1. カナダの縮図としてのグランビル・アイランド

パブリック・マーケットがどのような場であるかということを考える上で、興味深い出来事があった。ここでは、マーケットのヴェンダーであるデイブさんと筆者とのやりとりに着目して、マーケットおよびグランビル・アイランドが国のあり方を象徴する場として認識される様子を検討したい。

グランビル・アイランド（以下、アイランド）前のバス停でバスを降りると、歩いて間もなくグランビル・アイランドに到着する。アイランドに入るためには小さな橋を渡る。頭上には「Granville Island」の標識が掲げられ、ここから先がグランビル・アイランドであることを示している（図6）。

ある時、マーケットでの調査を終え、帰宅の途に就くためにマーケットを出た。デイ・ヴェンダーで友人のデイブさんが筆者をバス停まで送ってくれた。バス停の方へとつづく橋にさしかかった時、デイブさんは筆者に「知ってる？」と話しかけ、次のように語った。

「ここはバンクーバーじゃないんだ。ここはカナダなんだよ。（“Here is not Vancouver. Here is Canada.”）」

筆者には、デイブさんが言ったことの意味がわからなかった。きっと不思議なことを聞いたような顔をしていたのだろう。デイブさんはつづけて、彼が今語ったことの意味を教えてくれた。

「グランビル・アイランドは、連邦政府の所有物（“federal government property”）だからね。」

この説明を聞いて、筆者は彼が最初に語ったことの意味を理解した。彼が言おうとしていたことは、グランビル・アイランドという土地が、誰によって所有されているか、管轄されているのかということである。つまり、「ここはバンクーバーではない。カナダである。」という語りは、グランビル・アイランドがバンクーバー市の領域ではなく、国の領域であるということの意味していたのである。

このようにデイブさんは、グランビル・アイランドをカナダという国を象徴する場所として認識している。このようなデイブさんの認識の仕方は、別のある時の、筆者とのやりとりのなかでも強調された。グランビル・アイランドに定期的に通うようになると、アイランドへつづく橋の手前で、いつも同じ高齢の男性がギターの弾き語りをしているのに気付いた。足元にはお金を入れてもらうための箱が置かれ、その横には彼が描いたと思われるイエス・キリストの絵が立て掛けられていた。彼の風貌は痩せていて、白髪交じりの長い髪に、ホームレスのような身なりをしていた。ある日の帰り際、同様にデイブさんとバス停に向かっていると、いつもの男性がギターを演奏していた。筆者はデイブさんに、彼をよく見かけることを話した。デイブさんによれば、彼は長い間この場所で歌っているとのことだった。そして、次のようにも語った。

「彼はこの橋より先へは行けない。その許可がないんだ。橋のこっち側（バス停側）は B.C.（ブリティッシュ・コロンビア州）だけど、向こう側（マーケット側）のグランビル・アイランドはカナダ政府の所有地だから。」

デイブさんのこのような語りは、何を意味しているのだろうか。公共の場であるグランビル・アイランドに、なぜ彼は「行けない」のだろうか。なぜ許可がないと、橋の向こう側（グランビル・アイランド）へは行くことができないのだろうか。また、彼のようなギターの弾き語りでお金を稼ぐ人の姿を、パブリック・マーケットでも目にする。行っている行為は同じである。それでは、パブリック・マーケットで弾く人と彼との間にある違いは何なのだろうか。

この男性が「橋より先へは行けない」のは、グランビル・アイランドの敷地内でお金を稼ぐ、すなわちビジネスをする資格をもっていないということの意味していた。アイランド内の商業活動を管理するのはカナダ政府機関 CMHC であり、管理者からの許可がなければ、アイランド内ではいかなるビジネスも営むことはできない。これは、パブリック・マーケットについて

も同様で、マーケット内で営業する店舗やヴェンダーたちはみな、CMHC から選ばれ、認められ、契約を結んだ上で商売をおこなっている。先程挙げたマーケット内で弾き語りをする人たちもそうである。足元に箱を置き、演奏を気に入った客からお金をもらうスタイルは、一見すれば路上ミュージシャンのように見える。しかし彼らも CMHC が行うオーディションで選ばれた人たちである。彼らのようなミュージシャンは、マーケット内の指定されたいくつかのスポットでパフォーマンスをする。一人のミュージシャンが一つのスポットで与えられる持ち時間も 20 分と決められていて、20 分が経ったら次のスポットへ移動するルールとなっている。

このように、グランビル・アイランドで商売をするためには、管理者である CMHC による許可が必要である。この許可を与える過程は、管理者である政府が、アイランドにおける商業活動の領域に、誰を入れて、誰を入れないかということを選別する過程でもある。アイランド内でビジネスをすることが許可される人がいる一方で、許可されない人が出てくるのである。つまり、デイブさんが、先に述べた橋の前で演奏する高齢の男性について、「彼は橋の向こうへは行けない」と語った意味は、彼が物理的にアイランド内に入れないということの意味するのではなく、国によって管理された、ビジネスの場としてのアイランドに参入できないということの意味していたと考えられる。

では、彼がグランビル・アイランド内でビジネスするのに相応しくないとされる理由として、どのような理由が考えられるだろうか。一つは、演奏のクオリティが挙げられる。パフォーマンスの上手/下手という観点から、他のミュージシャン候補者と比べて彼が技術的に相応しくないと見なされる可能性はあり得る。しかし、彼が相応しくないとされるのは、そのような技術的な問題のみではないのではないだろうか。すなわち、彼の身なりやそこから連想されるホームレスというイメージが関係しているのではないかと考える。グランビル・アイランドおよびパブリック・マーケットは、世界中から観光客が訪れる、カナダを代表する観光地の一つである。観光地である以上、イメージは重要であり、安全や安心、清潔といった要素は、観光地の良いイメージを作りあげ、より多くの観光客を惹きつけるポイントとなる。それに対して、ホームレスは、「貧しさ」「犯罪」「治安の悪さ」「汚さ」といったネガティブな印象を人びとに与える存在とみなされる。そのような存在は、観光地の良いイメージを形成・維持しようとする側にとっては、観光地の景観を乱す存在であり、排除したい対象なのである。実際、筆者がパブリック・マーケットに定期的に通っていた間、グランビル・アイランドでホームレスを見かけた覚えは一度もない。バンクーバーの中心地に行けば、治安が悪いとされるイースト・サイド以外の場所でも、路上に座り込むホームレスの姿をよく目にする。筆者が暮らす郊外のリッチモンド市でも、駅周辺でホームレス風の男性を見かけることがあった。そのようなことを踏まえると、グランビル・アイランドでホームレスを見かけないということが特殊なことのよ

うに感じられる。

このギター弾きのホームレス（風）の男性の事例から見えてくるのは、グランビル・アイランドが誰にでも開かれた「公共の場」であるにしても、誰もが来ることが許されているわけではないということである。グランビル・アイランドを魅力ある観光地に作りあげようとする側にとっては、観光地の良いイメージを乱すホームレスのような人たちは歓迎されない来客である。また、前節でみたように、パブリック・マーケットやグランビル・アイランドが顧客対象とするのは、経済的に比較的富裕な人びとであり、低所得者層やホームレスのような人びとが来ることは想定されていないのである。

3-2-2. パブリック・マーケットの「カナダらしさ」

このように「観光」という要素は、パブリック・マーケットの重要な側面である。それでは、観光客は、何を観るためにパブリック・マーケットを訪れるのだろうか。また、パブリック・マーケットを運営する側（ホスト）は、観光客（ゲスト）に何を観られることを想定し、何を観せようとしているのだろうか。

観られる側であるパブリック・マーケット側が、観光客に何を観て、何を体験して欲しいのかということがよく表れているのが、パブリック・マーケット・ツアーである。このツアーは、カナダの食をテーマに観光事業を展開する「エディブル・カナダ (Edible Canada)」という企業によって組まれており、パブリック・マーケット内のいくつかの店を試食しながらガイドとともにめぐる人気のツアーとなっている。

特筆すべきは、このツアーが、カナダ政府の観光産業に関する組織 Canadian Tourism Committee (CTC) が指定する「カナダの特徴となる経験 (Canadian Signature Experiences)」コレクションの一つに認定されていることである。Canadian Signature Experiences は、「真のカナダを経験 (authentic Canadian Experiences)」できるような、あるいはカナダ旅行の良い例となるような観光ビジネスが認定されるもので、グランビル・アイランドのマーケット・ツアーは 2011 年にコレクションの一つに認定されている¹⁸。このことは、パブリック・マーケット・ツアーが、真のカナダを経験できるような観光であると国によって認められているということの意味する。このツアーに参加した観光客がパブリック・マーケットで体験できること

¹⁸ Industry Canada: Archived Promoting Canada's Signature Tourism Experiences ウェブページ (<https://www.ic.gc.ca/eic/site/ich-epi.nsf/eng/02215.html>)、Canadian Tourism Commission: Canadian Signature Experiences ウェブページ (http://en-corporate.canada.travel/resources-industry/canadian_signature_experiences)、Vancouver Foodie Tours ウェブページ (<http://foodietours.ca/tour/granville-island-market-tour/>) 参照。

は、「カナダらしい」経験であるということ、すなわち、「パブリック・マーケットを観光すれば、カナダらしい経験をすることができる」ということを意味している。

また、**Canadian Signature Experiences** の資料のなかで、このツアーは次のように紹介されている。

「・・・世界中の特産品を試食し、国際都市バンクーバーの料理にインパクトを与えた文化的影響を学ぶことになるだろう。・・・数分のうちに世界を食べ歩ける。・・・」[**Signature Experiences Collection Case Study Series 2012 : 5**]

前述したように、パブリック・マーケットにはさまざまな地域の料理や食材を扱う店が並び、フードコートには多国籍な料理ブースが軒を連ねている。このような食の多様性を通して、訪れる人にパブリック・マーケットの多文化性を「見せる」ことが意図されているとみることができる。つまり、パブリック・マーケットの食文化的多様性が、バンクーバーの文化的多様性を象徴する場として表象されていることが読み取れる。

以上のことから、パブリック・マーケットが「カナダらしさ」を経験できる場所として表象されていることがわかる。そして、**Canadian Signature Experiences** の紹介文で強調されるように、この場合の「カナダらしさ」とは、パブリック・マーケットの食の文化的多様性だということがわかる。このことから、パブリック・マーケットにある食の多様性は、カナダの文化的多様性を表象するシンボルであり、そのような文化的多様性のあるパブリック・マーケットは政府のお墨付きのもと「カナダらしさ」を備えた空間として表象されていると考えられる。

3-3. パブリック・マーケットにみる二言語主義

このように食に注目すると、パブリック・マーケットは多様な食文化のある空間であるといえることができる。これは、観光地であるマーケットへ、さまざまな国や地域から、より多くの人たちに訪れてもらうための工夫であるとも捉えられる。これは同時に、誰にでも開かれた「パブリック」なマーケットとしての取り組みでもあると捉えられる。なぜなら、特定の食文化を取り扱うマーケットであれば、特定の文化的性質に偏り、「パブリック」としての公共性、平等性の側面が弱まると考えられるからである。たとえば、前述のリッチモンド市のパブリック・マーケットは、その中国色の強さから、「パブリック・チャイニーズ・マーケット」¹⁹と見られ

¹⁹ 筆者の滞在先のホストマザー（40代、香港出身）は、リッチモンド市のパブリック・マーケットとグランビル・アイランドのパブリック・マーケットを比べて、前者を「パブリック・チャイニーズ・マーケット」であると表現していた。

ていた。このように、ある地域の食文化に偏れば、マーケットが特定の文化と結びつけて認識される可能性がある。また、特定の食文化に偏るのではなく、よりバラエティに富んだものを見たり、食べたりできる方が、観光地として人を集めやすく、リピーターを増やす効果も期待できると考えられるからである。

このように多様な食文化を扱う一方で、パブリック・マーケットで表示される言語は主に英語である。看板の文字や値札はすべて英語で表記されている。しかし、英語以外の言語をまったく目にしないかという点、そうではなかった。パブリック・マーケットで、英語の次に目にするのはフランス語であった(図7)。たとえば、入口のドアに英語で営業時間が表記されている下に、フランス語で同じように営業時間が表記されていた。また、トイレにはフランス語で、おそらく「ドアをロックするのを忘れないように！」の張り紙が貼られていた。パブリック・マーケットの外でも、グランビル・アイランド内では、フランス語を表記した注意書きをよく目にした。

筆者は、このようなフランス語を表記した看板があることに違和感を覚えていた。なぜなら、英語圏のバンクーバーにおいて、このように頻繁にフランス語の表記を目にする場所は、グランビル・アイランドぐらいだったからである。カナダが英語とフランス語の二言語を公用語とする政策をとっていることは知っているが、ブリティッシュ・コロンビア州政府はこの二言語主義は採用していない。それに、フランス系住民が比較的多く暮らすカナダ東海岸と違って、西海岸に位置するバンクーバーではフランス系住民／フランス語母語者はマイノリティであり、むしろ中国語やタガログ語、パンジャブ語母語者の方が多数派である。したがって、フランス語の需要が大きいとは思えない。では、なぜパブリック・マーケットおよびグランビル・アイランドでは、フランス語の表記を目にするのだろうか。なぜ、フランス語が表記され、他の言語は表記されないのだろうか。英語とフランス語の二言語の表記があることに、どのような意味があるのだろうか。

パブリック・マーケットで英語に加えてフランス語が表記されるのは、ここがカナダ連邦政府機関の管理・運営するマーケットだからだと考えられる。前節で検討したように、このマーケットが冠する「パブリック」には、国という公的機関によって管理される場という意味があった。その点で、このマーケットは「公的な場」であるともいうことができる。そして、「公的な場」であるがゆえに、国の公用語政策が反映され、英語とフランス語の二言語が表記されるのだと考えられる。

しかし、このマーケットは、さまざまな国や地域から観光客が訪れる、バンクーバー観光の名所として知られる場所である。観光客のなかには、英語やフランス語を母語としない人たちも含まれていた。たとえば、筆者がマーケット内で調査している間も、中国や韓国、日本など

東アジアの国々からの観光客を多く目にした。15年来、マーケット内でヴェンダーをしているデイブさんによると、最近ではそのようなアジア地域からの観光客が多く訪れるとのことであった。そのような英語やフランス語を母語としない観光客から、筆者は「中国語を話せるか？」と聞かれることがあったり、スペイン語で何かを尋ねられたりすることもあった。そのような多様な言語を話す観光客が訪れるのであれば、英語とフランス語以外に多言語で表記している店や、注意書きがあっても良いのではないかと思い、ヴェンダーのデイブさんに尋ねてみた。筆者の「マーケットには英語とフランス語以外のサインはないのだろうか」という質問に対して、彼は、

「ないと思う。マーケットは国の所有地だから、ここのサインは英語とフランス語でないといけないし、英語とフランス語のみでないといけないはずだ（“must be English and French, and only English and French”）」

と回答した。彼は、パブリック・マーケットのサインに用いられる言語は、英語とフランス語の両方であるべきであり、この2言語のみであるべきだろうと考え、その理由として、このマーケットが国の管理する場だからと考えていた。彼の語りからは、カナダの公用語に定められている以上、英語とフランス語が表記されるべきだとする考え方がうかがえる。

小結

ここで、前章で検討したリッチモンド市における中国語の看板の事例と比較してみたい。パブリック・マーケットにある張り紙や注意書きに、英語とフランス語の二言語が表記されることの意味は、リッチモンドで掲げられる看板に中国語表記があることの意味合いとは異なるということがわかる。リッチモンドにおいて英語のほかに中国語が表記されるのは、数的に多数である中国系住民を顧客対象とする、店側の商業的な戦略であると捉えられる。それに対して、パブリック・マーケットでフランス語が表記されるのは、フランス語話者を惹きつけるためという商業的な戦略ではなく、ここがカナダ政府の管理する場という性格から、国の公用語政策が反映されるためである。フランス語を使用する観光客や働き手が多いわけではないということ踏まえると、公用語であるフランス語が表記されるのは、マーケットの「公的な場」としての公共性を象徴的に示すためではないかと考えられる。

また、「パブリック」な場であるために、英語とフランス語以外の言語を表記しないのだとも考えられる。つまり、多様な言語を母語とする人びとが訪れるということに配慮して、多言語表記をしようとすれば、多様な言語があるなかで、どこまでの範囲の言語を表記するかという

問題が出てくる。多様な言語のなかで、どの言語を選び、どの言語は選ばないかとなれば、選ばれる言語と選ばれない言語の線引きをすることになる。そのため、多様な言語があるなかで、特定の言語表記のみに偏らず、公共性、平等性を打ち出すためにも、「公用語」という政策的なところで、折り合いをつけているのだと考える。

公的な場で目にする書き言葉の意味を考える上で示唆的なのが、バックハウスが述べる「公式のサイン (official sign)」と「非公式のサイン (nonofficial sign)」である[Backhaus 2006]。バックハウスは、東京の公共空間を対象として、看板や標識などのサインにどのような言語が表記されているかを調査し、そのサインの性質が、政府が関与する「公式のサイン」か、それとも政府の関与しない私的な「非公式のサイン」かによって、サインが言語景観に異なる影響を及ぼすことを指摘した。彼は、公式のサインに選ばれる言語は権力関係に規定されること、公式のサインにはどの言語が選ばれるべきで、どの言語は選ばれるべきではないかということが示されていると主張する。このことを踏まえて、パブリック・マーケットのサインを考えてみる。公的機関によって運営されるパブリック・マーケットにみられるサイン(公式のサイン)に示されるのは、サインを表象する側(CMHC)にとって、英語とフランス語が選ばれるべき言語であり、その他の言語は選ばれるべきではない言語であるということである。そして、選ばれるべき言語と選ばれるべきでない言語の差を規定するのは、公用語と非公用語、法的に守られた言語とそうでない言語という国の政策によって生み出された言語間の権力関係だということができる。

さらに、マーケットにおける言語のサインに関する「国の管理する場である以上、英語とフランス語のサインでなければならない」という見方は、リッチモンド市において「カナダだから、どのような言語のサインを出しても良い」とする考え方のもと、中国語の表記を容認する見方があったのと対照的であることがわかる。つまり、パブリック・マーケットでは、リッチモンド市の場合とは対照的な論理のもと、多様な言語のなかでも、英語と仏語が表象されることが納得されていると見ることができると考える。

図6 グランビル・アイランドの入口

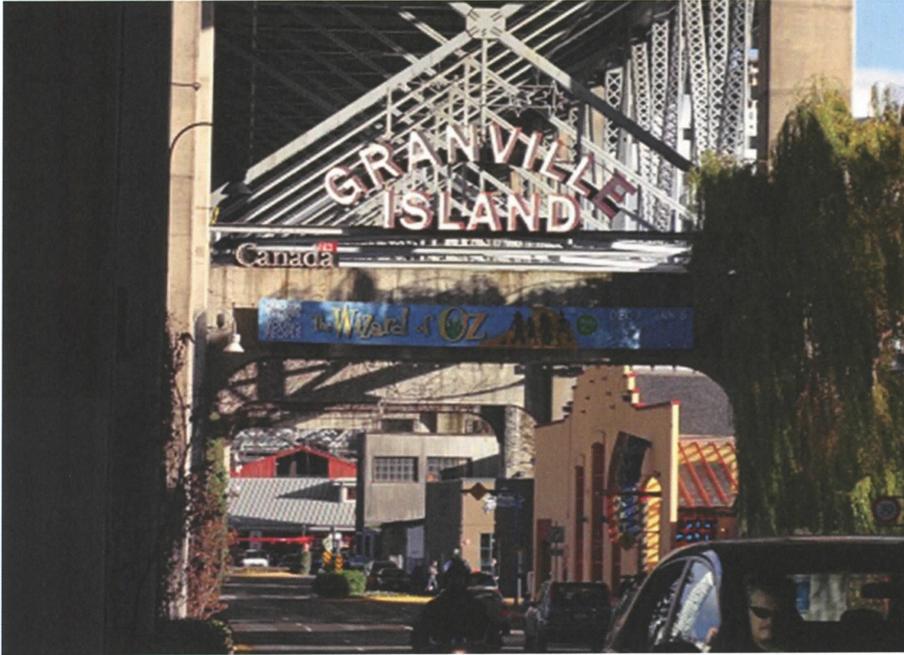


図7 パブリック・マーケットやグランビル・アイランドで見られるフランス語のサイン



(パブリック・マーケットの入口に貼られた英語と仏語の注意書き)



(英語と仏語で表記されたファーマーズ・マーケットの案内板 (グランビル・アイランド))



(英語と仏語で表記された標識 (グランビル・アイランド))

第4章 日系エスニック組織の葛藤

本章では、バンクーバーの日系組織「隣組」に着目する。同組織はバンクーバーに在住する日系人・日本人を主な対象としてサービスを提供するエスニック組織である一方、高齢者への福祉サービスを提供し、市や州の助成金を得て運営される公共的側面も兼ね備えている。多文化社会において、さまざまなエスニック組織の活動は「多様性の尊重」という文脈のもと奨励されている。しかし、特定の民族・文化的背景をもつ人々を尊重した場であるがゆえに、他の民族・文化的背景をもつ人びとは近づきづらくなる可能性がある。そうなれば、組織の公共的側面が抑えられることになる。ここでは、隣組の活動とそこにかかわる人びとに注目することを通して、エスニック組織としての役目と公共的側面との間でジレンマを抱えながら活動する組織の姿を描き出す。

4-1. バンクーバーの日系エスニック組織

4-1-1. 「隣組」について

隣組 (Tonari Gumi—Japanese Community Volunteers Association) は、バンクーバーにおいて、主に日系人および日本人高齢者を支援するために様々なサービスやプログラムを提供してきた非営利組織である。隣組の名称の由来は、1940年代の戦時体制の中で、相互扶助の促進を目的として制度化された行政単位「隣組」からきている。1973年に、1人の日系2世と4人の新移民(戦後に日本から移住した者)の日本人によって、バンクーバー市中心地東部(イーストサイド)に暮らしていた日系1世の高齢者たちに福祉サービスを提供することを目的として設立された[Tonari Gumi 2010]。

隣組ができたイーストサイドは、歴史的に日系移民とかかわりの深い場所である。第二次世界大戦以前、この地域のパウエル通り (Powell Street) 周辺には日本からの移民が集住し、日本人移民が経営する商店や下宿屋のほか、日本人学校などが立地する「日本街」が形成されていた。戦中・戦後の戦時措置法により、日系人は敵国人としてバンクーバーを追われ、東部の労働キャンプへの総移動を強いられた。その際、日系人は家も仕事も取り上げられ、私有財産はすべて没収されたため「日本街」は完全に崩壊してしまう。1949年に戦時措置法が解除されるまで、日系人はこの地に戻ることは許されず、カナダ全土に散らばって居住することを余儀なくされた[山田 2000]。1949年以後、日系人の一部がバンクーバーへと戻り、その時生活を再開する場として選んだのが、かつて日本街があったパウエル通り周辺であった。当初、このエリアに戻ってきた日系1世の高齢者たちの生活の質を向上させる目的のもと、「隣組」の創始者たちによって訪問プログラムが始められた[Tonari Gumi 2010]。1975年には、バン

クーバー市や州政府から資金を調達し、旧日本人街にドロップ・イン・センター「隣組」を開設した。日系の高齢者たちが好きな時に立ち寄れる「憩いの場」を目指し、集まって来る高齢者たちの相談に応じるサービスや、イベントやプログラムを常設するようになる。現在の「隣組」が提供するサービスやプログラムの多くが、この当時にできたものだという。

1980年代以降、低所得者層の人びとが生活する地域であったイーストサイドは、ホームレスや薬物使用者がたむろするようになり、治安の悪化が懸念されるようになった。隣組がパウエル通りにあった当時を知るスタッフは、次のように語っていた。

「(オフィスの) 裏の戸を開けると、おしっこの匂いや、異臭がしてきていた」

「道に注射器²⁰とか平気で落ちている・・・今も、日中ならまだ良いけど、行かなくていいのなら行かない方が良い。若い女の子が一人で行くのは危ない」²¹

このような周辺環境の悪さが問題視され、移転計画が持ち上がり、2000年に現在の住所であるイーストブロードウェイへと移転した。²²

イーストブロードウェイは、バンクーバー市を東西に走る幹線道路ブロードウェイ通りの東側の地域である。スカイトレインのブロードウェイ駅で下車し、バスに乗って東に10分ほど進んだところに事務所を構えており、青い屋根に「Tonari Gumi」の白い文字が目印である。あるスタッフは、現在の場所について、「パウエルに比べれば環境はかなり良い」と語る。しかし、たとえば、オフィスの裏口にゴミや物を置いたままにしておくと、浮浪者に漁られて、翌日にはなくなっていると話していた。また、周辺の建物に落書きがあったり、建物の窓や入口に鉄格子が設置されていることなどからして、決して治安が良い場所であるとは言えないエリアである。

4-1-2. 隣組の運営と活動内容

隣組は2階建ての建物で、1階前方には受付デスクがあり、スタッフあるいはボランティア

²⁰ イーストサイドに薬物中毒者がたむろする理由として、同地区に公共薬物注射施設 (Insite) が設置されていることが挙げられる。この施設は、薬物中毒者による注射器/針の使い回しによる感染症等の防止および一般市民への危害を防ぐ目的で行政によって設置された。一日に600人~700人が出入りするとされ、施設周辺に浮浪者や、薬物やアルコール依存症の人たちが集まるため、危険な地域として報告されている (在バンクーバー総領事館安全マニュアル)。ブリティッシュ・コロンビア州では薬物の販売や使用は違法であるが、毎年4月に「大麻の日」なるイベントがあるなど、大麻を合法化しようとする社会的な動きもある。

²¹ 隣組のスタッフ祥子さんからの聞き取りによる。

²² 筆者のフィールドワーク後、2013年11月に、隣組は511 East Broadway からブロードウェイ通りの西側 West 8th Avenue に購入したビルへと移転した。

アが常時座っている。受付横には、テーブルとソファがあり、ここに常連の利用者たちが腰をかけ、おしゃべりをしたり、持参した食べ物をつまんだりしている。奥に進むとキッチンと多目的スペースがあり、ここで各種のプログラムが行われている。2階にもプログラムを行う部屋があり、その他に事務局長のオフィスと、コミュニティー・サービスを担当するスタッフの部屋があり、相談がある利用者が来ればここに通される。

隣組は、60代男性の事務局長のほか、プログラム／ボランティア・コーディネーターの女性、事務の女性、コミュニティー・サービス担当の女性の4人で運営されている。財政面では、市や政府、地元の慈善福祉団体等からの助成金のほか、日系コミュニティー内の個人や団体からの現金や現物の寄付によって運営されている。有給のスタッフは4人だけだが、その他に大勢の無償のボランティアが登録されていて、隣組の活動は「ボランティアの力なしではやっていけない」とのことである。調査当時、登録しているボランティアの数は約300名で、そのうち毎週定期的にボランティアとして働いてくれている人たちは50～60人とのことであった²³。

隣組のプログラムは多岐にわたっている。体操や日本式ランチ・プログラムといったシニアの健康促進を目的としたエクササイズ系のほか、クラフト、書道、カラオケといった娯楽系、英会話や日本語クラスなどの教育系のプログラムが毎週決まった曜日に行われている。また、月単位で行われる食いしん坊会(みんなで料理を楽しむ会)やウォーキング、観光地や植物園、ランチやディナーと一緒に出かけるシニア・アウトリーチなどのプログラムもある。隣組は会員制で、年会費は30ドルである。会員になることで、隣組が所有する本やビデオ、DVDなどを無料で借りることができるほか、プログラムに安い会員料金で参加することができる。プログラムは月謝制で、60歳以上の「シニア」か、そうでないか(「一般」)によって費用が異なっている。このように、隣組を利用するに当たって、会員か非会員か、さらに「シニア」か「一般」かによって負担する費用は異なり、シニアの方が安く設定されている。

多くのプログラムで、インストラクターやアシスタントを務めるのは、ボランティアである。なかでも、ランチ・プログラムや英会話クラスでは、長年にわたり同じ人たちがボランティアとしてプログラムの運営を担っている。

隣組のもう一つの重要な活動が、コミュニティー・サービスである。これは、コミュニティー・サービス・ワーカーによる無料の生活相談サービスである。日系人・日本人の高齢者やその家族、新移住者や短期滞在者が抱える問題に対し、個別に相談に乗り、情報提供と照会を無料でおこなうサービスである。具体的には、各種申請書類の手続きの手伝い、通訳や翻訳、医療機関や公的機関への通訳同行、家庭生活や仕事上のトラブルへの相談、専門機関の紹介、ま

²³ スタッフ祥子さんへのインタビューから得た情報である。

た日本式食事宅配サービスや介護施設・病院訪問、電話ともだち（外出困難な高齢者に定期的に電話をするサービス）などである。これらはすべて、日本語と英語のバイリンガル・サービスであり、コミュニティー・サービス・ワーカーが担当している。また、ここにもボランティアが携わっている。電話ともだちや施設訪問などのサービスはボランティアが中心におこなっていて、そのスケジュール調整などはスタッフによって管理されている。

隣組が活動を行っていくうえで、スタッフとボランティアの果たす役割が大きいことがわかる。そこで、次節では、具体的にどのような人たちが、スタッフあるいはボランティアとして隣組にかかわっているのかについて見ていく。

4-2. 隣組にかかわる人びとの多様性

4-2-1. スタッフ

隣組のスタッフは、どのような人たちであろうか。ここでは、4人のスタッフの経歴や、仕事内容に着目し、隣組という組織がどのように運営されているのかを見ていく。

1) 事務局長—トムさん

トムさんは、2010年3月に隣組の事務局長に就任した。年齢は60歳代前半で、アルバータ州生まれの日系三世の男性である。隣組に勤める以前は、カナダ連邦政府機関に21年間務め、オタワやパリ、ワシントンD.C.、東京など世界各地を飛び回ったという。1992年から4年間、東京の在日カナダ大使館に勤めた後、一度オタワへ戻ったが、カナダ小麦局の東京支社勤務となり再び日本に滞在する。その後、1997年から2006年に政府機関を退職するまでの9年間で東京で過ごし、退職後は福岡に移って、モルモン教会の伝道部長として九州・沖縄地方で伝道活動を行った経歴がある。およそ12年間の日本での生活を終え、2009年にバンクーバーへ移住したことをきっかけに、現地の日系コミュニティーに興味を持つようになったと話す。ボランティアという形ででも日系コミュニティーにかかわりたいと考えていた所、現地の日系雑誌で隣組の新しい事務局長を募集している記事を見て、妻の勧めや、また友人家族が隣組を利用していたということもあって、応募したのが隣組のスタッフとなる最初のきっかけだったと話していた。

トムさんの主要言語は、英語である。トムさんはブリティッシュ・コロンビア州の東に隣接するアルバータ州の小さな農村で育った。そこには西海岸ほどではないが、小さな日系コミュニティーがあり、幼少期は土曜日に開かれる日本語学校に通っていたという。「小さい頃から日本語に触れて育ったのですか」と筆者が尋ねると、そうではなく、家では英語で、唯一日本語を使うのは、祖母の家に遊びに行った時くらいだったと語った。日本語学校に通っていたおか

げで、平仮名ぐらいは読み書きできたが、本格的に日本語を学んだのは 19 歳の時で、モルモン教の宣教師として初めて日本を訪れた時だという。2 年半の日本における生活の中で、苦労はしたが、日本語をある程度話せるようになったと話してくれた。現在では、日本語の読み書きや会話も流暢だが、母語は英語であるため、隣組の他の日本人スタッフとの会話には所々英語が混じり、日本語と英語の両方でコミュニケーションをとっているようだった。

事務局長として、隣組の運営を率いる立場であるトムさんの重要な役割が、資金調達である。運営資金の調達のために、日系コミュニティ内で力をもつ個人や企業、また市政や州政府との交渉を担っている。トムさんは、連邦政府機関に勤めていたころから資金調達の仕事に携わってきたと語っており、隣組の事務局長を務める素養が備わっていたと判断できる。また、トムさんはカナダ生まれの日系三世で、主要言語が英語であるために、行政や外部団体との英語での交渉も積極的に行える能力を備えているとみることができる。隣組のスタッフのなかで、英語を主要言語とするのはトムさんだけであり、カナダ出身者もトムさんだけである。

2) プログラム/ボランティア・コーディネーターの祥子さん

祥子さんは 40 代後半の女性で、1992 年にワーキングホリデー・プログラムを利用して現在のご主人と一緒にバンクーバーへやって来た。それ以来、移民申請が通るまでの間、一時帰国することはあったが、20 年以上バンクーバーで生活している。

隣組とかかわるようになったのは、1994 年にボランティアとして訪れたことがきっかけだという。当時、祥子さんは観光ビザで現地に滞在していたため、仕事をすることができず、また学校に通う金銭的な余裕もなかったため、3 か月程何もすることがなくノイローゼ気味になっていたという。そんな時、領事館で日本文化を教えるボランティアに参加し、たまたま一緒になった日本人女性から隣組のランチ・プログラムの話を聞き、隣組という組織があることや、ボランティアを募集していることを知ったそうだ。それからボランティアとして隣組に通い始め、永住権を取得して就職が決まるまでの間は、週に 2～3 日通っていたという。現地の日系企業に就職してからも、土日や毎年 8 月に催される日系のお祭り「パウエル祭」の手伝いなどをして、隣組とのかかわりを保っていたという。10 年程前に、前任のプログラム・コーディネーターが退職し、彼女の勧めで後任ポストに応募した。「(コーディネーターの仕事が) 自分に向いているかわからなかったけど、隣組好きだったし、応募した」と話していた。それ以来、隣組のプログラム/ボランティア・コーディネーターとして、主にプログラムの運営管理やボランティアのコーディネート業務を任されている。

祥子さんは、スタッフ業務のほかに、「オステオフィット」(Osteofit) というエクササイズ・プログラムのインストラクターも務めている。このプログラムは BC 州保健局が認める、転倒

防止や骨を丈夫にするためのエクササイズで、インストラクターになるには資格を取得しなければならない。そのため、祥子さんは 2007 年にインストラクターの資格を取得し、毎週火曜日と木曜日の 2 回、高齢者の参加者にオステオフィットを日本語で指導している。また、祥子さんは救命活動を行う資格も取得している。これは、隣組が高齢者向けのプログラムを提供しているため、利用者が高齢者が隣組のプログラム中に万が一体調を崩した場合に備えて取ったものだという。これらの資格は、スタッフとしての義務ではないが、プログラムを通じて高齢者と運動や外出を共にする機会の多い祥子さんの判断で取得したものであるとのことだ。

現在、祥子さんは日本には一年に一度帰省する程度で、今後も日本に帰るつもりはないと話す。ご主人も日本人のため、家では日本語を話し、日本食が中心だという。日本語チャンネルに加入しており、テレビもほとんど日本の番組しか見ないという。バンクーバーでの生活において言語面で不便はないかと訊いてみると、「隣組でもほとんど日本語で、最初務めた会社も日系の会社だったから、けっこう楽にここまで来た」と話していた。確かに、隣組で祥子さんが接する人の大部分は、日本語を母語とする人たちである。なかには英語を母語とする利用者やボランティアもいるため、彼らと話す際、祥子さんは英語で話し、また事務局長のトムさんと話す時も英語を交えることが多いようだった。また電話対応や、業務上で英語を使用する機会も多いと考えられ、ある程度以上の英語力は持ち合わせている。

3) コミュニティ・サービス・ワーカーの早紀さん

コミュニティ・サービス・ワーカーの早紀さん（40 代前半、女性）は、2008 年から隣組に勤務している。早紀さんは 1992 年に学生としてバンクーバーへ渡り、同市の州立大学を卒業している。隣組に務める以前は、ライフコーチ²⁴として働いていた経歴がある。

早紀さんの仕事は、相談者が抱える問題に対し、個別に相談に乗り、情報提供や照会のほか、病院や公定機関への通訳同行、各種手続き書類の翻訳などを行うことである。相談者は日本語を母語とする人たちで、バンクーバーでの生活や仕事上のトラブルを抱え、日本語で相談を持ちかけてくる。しかし、彼らの抱える問題を解決するために必要な情報を入手するためには、常に英語が必要となるため、コミュニティ・サービス・ワーカーの仕事は、英語で完璧にコミュニケーションが取れる人でなければ難しいと、早紀さん自身や他のスタッフが話していた。

隣組でコミュニティ・サービス・ワーカーとして働くためには、ソーシャル・ワーカーの専門的な資格は求められていない。実際、早紀さんもソーシャル・ワーカーの資格を持つわけで

²⁴ 早紀さんによれば、ライフコーチは、クライアントの人生や仕事における目標達成に関して、助言・指図書する職業だという。

はなく、大学で専門的に学んだわけでもないとのことだった。隣組で働くようになってから、その都度、相談相手のニーズに応じるために、政府の移民政策や各種法律など専門的な情報を調べ、知識を増やしていったという。

4) 受付・事務員の智子さん

智子さん（40代前半、女性）は、2003年にワーキングホリデー・プログラムを利用して夫婦で渡加して以来、バンクーバーに10年在住している。日本では美術系の大学院を卒業した後、アルバイト生活を送っていたという。

バンクーバーへ来て3カ月間語学学校に通った後、日本語教師養成コースに通っていた時の先生から、隣組の日本語クラスを教えるボランティアがあることを教えられたのがきっかけで、隣組にかかわるようになったという。それ以来、日本語クラス（初級）を教えるボランティアを務め、2007年に受付・事務スタッフとして雇用されている。スタッフになってからも、日本語クラスのインストラクターは続けており、もう10年になるとのことであった。

智さんは英語が苦手だと話す。彼女のご主人も日本人であるため、家では日本語を話し、隣組でも時々英語で電話がかかってくる以外、仕事もほとんど日本語で済むと言っていた。「私ができなくても、みんな（トムさん、祥子さん、早紀さん）できる人ばかりだから」「英語できなくてもやっつけていけるから、（隣組で働くこと）居心地が良いのかも」と話していた。実際、隣組のスタッフの中で、一番英語を使用する頻度が少ないのが智さんのポストのようであった。

ここまで、隣組のスタッフがどのような人たちかということを見てきた。4人のスタッフの経歴や隣組にかかわるようになったきっかけはそれぞれ異なり、言語能力や教育程度などもさまざまである。また、スタッフのなかでカナダ出身者であるのは事務局長のトムさんだけであり、ほかの3人のスタッフは日本出身者であった。

このように、スタッフの4人を見ても、隣組はさまざまなバックグラウンドをもつ人たちによって運営されていることがわかる。このことは、それぞれの仕事内容や、仕事上で相手にする人たちが異なっているということでもある。たとえば、事務局長のトムさんが仕事のうえで主に対応するのは、行政や外部団体の人、英語が主要言語の人、またコミュニティ内外の有力者である。対して、隣組の利用者である日本語を母語とする日本人高齢者を相手にするのは、主に祥子さん、早紀さん、智子さんである。コミュニティ・サービスを提供する早紀さんの場合は、日本語の英語のバイリンガルであることが必須とされるが、ほかの2人に求められることは、第一に日本語で日本人高齢者とコミュニケーションがとれることであると考えられる。

異なるバックグラウンドを持った人たちによって、相互補完的に隣組という組織が成り立っているとみることができる。

4-2-2. ボランティアと利用者

隣組にはスタッフのほかに、多くの人たちがボランティアとしてかかわっている。それでは、ボランティアとしてかかわる人たちはどのような人たちだろうか。また実際に、どのような人たちが隣組のプログラムやサービスを利用しているだろうか。ここでは、筆者がどのようにしてボランティアになったかという経緯を通して、ボランティアの仕事内容や、利用者について具体的に見ていきたい。

1) ボランティア

筆者は2012年10月から2013年9月まで、隣組でボランティアとして働きながら、参与観察およびスタッフや利用者へのインタビューや聞き取り調査を行った。調査を行うにあたり、まずプログラム／ボランティア・コーディネーターの祥子さんに連絡を取り、調査の目的を伝え、ボランティアとして当該組織に通わせて欲しいと願った。その結果、筆者の依頼を快く受け入れてくださった。10月にバンクーバーへ到着し、1週間ほど経ってから隣組を訪問した。スタッフの方々と互いに自己紹介をした後、隣組のボランティアに登録をした。隣組のボランティアになるには、登録フォームへの記入とコーディネーターの祥子さんとの面談が必要である。登録フォームには、氏名や生年月日、ビザの種類、住所、連絡先のほか、希望するボランティアの種類や頻度、ボランティア可能な期間・曜日・時間帯、趣味、特技・資格、学歴・職歴、言語能力（日本語と英語、その他の言語の能力）、隣組へのアクセス方法、運転免許の有無、それから隣組でのボランティア希望動機などの情報を記入する。ここに記入した情報と直接の面談をもとに、コーディネーターの祥子さんが、ボランティア希望者を具体的な仕事に割り振っていく。筆者の場合は障害があり車イスを利用しているため、ボランティアするにあたって難しい動作なども付け加えて、配慮していただいた。

筆者が隣組を訪れた日、奥のキッチンでは筆者と同世代と思われる数人の女性たちが漬物をつけていた。そのうち一人は30代前半の女性で、1年前に結婚を機にバンクーバーへ移住してきたとのことだった。彼女は知り合った当時、仕事を探しており、見つかるまでの間に時間があるため、数週間前から隣組でボランティアを始めたと話した。もう一人の若い女性は、日本語も流暢で、一見すると日本人だが、生まれも育ちもバンクーバーの2世であるとのことだった。スタッフの祥子さんによれば、ボランティアのなかには、彼女のような2世の若者もいるとのことだった。

この日ボランティアが作っていた漬物は、11月に行われるバザーで販売するものだった。隣組バザーは、一年間のイベントの中でも、隣組にとって大きな収入源となる行事である。バザーでは、寄付で集まった骨董品や食器類、日本人形、着物類のほか、ボランティアによって手作りされた漬物、ちらし寿司、さつま揚げ、饅頭、どら焼きなどの食べ物が販売される。日系人・日本人のみならず、地域の人たちがやってきて毎年にごわうとのことだ。筆者が最初に隣組を訪れた10月下旬は、ちょうどその準備に追われている時期で、筆者のボランティアとしての最初の仕事も、バザーで販売する商品を仕分けし、値札をつける作業であった。

翌日、この作業のために隣組を訪れると、前日とは違うボランティアが集まっていた。この日集まっていたのは30～40代後半の女性が多く、話をしていると、彼女たちのラスト・ネームが英語であることに気がついた。彼女たちは、国際結婚をしてバンクーバーへ移住してきた人たちで、水曜の午前中に行われる、お母さんと幼児向けのプログラム「ファミリー・ドロップ・イン」を手伝うボランティアであった。隣組に出入りしているうちに、彼女たちのように国際結婚を機に移住してきた女性たちと、しばしば出会った。また、子どもが大きくなり、時間に余裕ができたためボランティアをしている女性たちとも知り合った。たとえば、ある日のボランティアで知り合ったバンクーバー郊外に住む50代の日本人女性は、子育てが一段落し、時間ができたため、隣組でボランティアを始めることにしたという。彼女は、隣組でボランティアを希望する理由を、「日本の親とは離れていて、何もしてあげられないから、せめてこっちで、親と同じぐらいの歳のシニアのためにお手伝いできないかと思って」と話していた。

スタッフの祥子さんによれば、30代～50代のボランティアのなかには、彼女のように子育てが一段落した女性が多いとのことだった。また、若い人のなかには、国際結婚をした女性で、就職口が見つかるまでの間、時間があるため、ボランティアに登録しに来る人もいるとのことだった。また、筆者のような短期滞在者も、ボランティアとして出入りしていた。たとえば、筆者が別の日に隣組で会ったボランティアの日本人男性（20歳代）は、1年間の滞在予定で、ホームステイをしながら、語学学校に通っているとのことだった。

比較的若い人たちが、短期的あるいは不定期のボランティアであるのに対し、長期で、定期的なボランティアを務めているのは高齢者である。長期的にボランティアに携わるなかで、その分ボランティアも歳を重ねたため、ボランティアとして働くと同時に、隣組会員のシニアとしてプログラムやサービスを利用している場合もある。若いボランティアの多くは、仕事が見つかるまでの限られた期間をボランティアにあてている人が多いため、定期的な仕事を任すことができるのは、退職して、経済的・時間的に比較的余裕のある高齢者になるとのことだった。スタッフの祥子さんは次のように語る。

「体操とか、あとはカラオケとか、英語のクラスとかは、もうずーっと何十年って続いているプログラムなのね。だから、先生についてるって感じもあるんだよね。だからその先生が辞めると、ついてた人も辞めちゃう可能性ももちろん出てくるし。で、やっぱりその先生たちもだんだん歳とってきてるでしょ。でも実際ボランティアで定期的にそうやって教えられる人っていうのは、もうある程度、リタイアして時間に余裕があるとか。」

このように、隣組を利用する高齢者たちは、単にサービスを受ける側・サポートされる側としてだけではなく、隣組の活動を支える側としても、隣組にとって重要な存在であることがわかる。しかし、そのような定期的な仕事を担っている高齢者も、歳を重ね、身体的にもボランティアを続けることが難しくなるため、その人が勤めていたポストの跡継ぎになる人を見つけることも必要となる。スタッフの話によれば、長期的かつ定期的にボランティアを務めてくれる人を見つけることはなかなか難しく、そのため、常にボランティアの募集をかけているとのことだった。

2) 利用者

筆者は、はじめは単発的なボランティアの仕事に呼ばれていたが、しばらくして、毎週火曜日の受付デスクの仕事に任されるようになった。火曜日は、午前・午後とプログラムが立て続けに組まれており、またスタッフがインストラクターを務めるものが多いため、受付が手薄になる。その間、受付デスクで、主に電話対応をしながら、事務的な入力作業を手伝って欲しいと頼まれた。ここで、隣組の火曜日の通常スケジュールと筆者の経験した受付業務の仕事に注目することを通して、どのような人びとが隣組を利用しているのかを見ていくことにしよう。

火曜日の午前中は、オフィスの2階で日本語のプログラムが行われている。10時～11時30分までは初級クラスで、11時30分～13時までは中級のクラスである。初級クラスは、事務を担当するスタッフの智子さんがインストラクターを務め、中級の方はボランティアの女性が2人で教えている。日本語プログラムに参加する人たちは、当然のことながら日本語が母語でない人たちである。どのような人たちが参加しているかという点、スタッフによれば、バンクーバー生まれの日系人や、台湾系や中国系の人、また日本人の妻を持つ白人男性など、さまざまだという。彼らが普段話す言葉は英語であるため、火曜日の午前中は隣組に英語が飛び交う。普段は日本語にあふれ、日本にいるような感覚に陥るのは、対照的な雰囲気である。

正午近くになると、日本語クラスの参加者とはうってかわって、日本人のシニアたちが集まって来る。一見すると、日本のどこにでもいそうなおばあちゃん、おじいちゃんたちである。彼／彼女たちは、正午から始まるオステオフィットの参加者だ。オステオフィットは、12時～

13時と13時～14時の2回にわけて組まれており、両方とも隣組スタッフの祥子さんがインストラクターをつとめている。オフィスの奥の多目的スペースにて、参加者は輪になり、音楽に合わせてながら体を動かす。スタッフの祥子さんは日本語で指導し、参加者も日本語で会話をしながら体を動かしている。

火曜日に隣組に入入りする人びとに注目すると、隣組の利用者は主に3つのグループに大別することができる。

まず、戦前の移民の子孫であり、日本にルーツをもつ「日系人」と呼ばれる人たちである。彼らは、日本語クラスやランチ・プログラム、麻雀などの、娯楽あるいは教育的なプログラムに参加している。なかには、日本語も英語も理解できることからボランティアとして英会話クラスのインストラクターを務めている人もいた。このようなことから、彼らの多くが隣組にやってくるのは、日本語や日本文化に触れるためという側面の方が強いと考えることができるだろう。

隣組を訪れる人の中には、日本人でも日系人でもない人たちがいる。彼らは、直接的には日本にルーツを持たないが、妻／夫が日本人であるカナダ人や、日本に興味があり日本語を学びたい人、また在日韓国人だった背景があり日本語が流ちょうな韓国人女性などがいた。彼／彼女たちは、隣組のプログラムを利用しており、日本語クラスやカラオケのプログラム、ランチ・プログラムなどに参加していた。また、隣組の会員として、会員だけが招かれるお誕生日会などの催しにも参加していた。

最後のグループは、日本生まれで、日本語を主要言語とする人たちである。隣組のプログラムおよびサービスを利用する人たちの大半が、そのような日本人高齢者である。とりわけ、コミュニティ・サービスの利用者の大半は、このような日本人高齢者である。彼らのなかには英語が苦手な人も多い。そのような高齢者にとって、隣組は、一般には英語でしか得ることのできない公的な情報を日本語で得ることができ、日常生活で抱えた問題を日本語で相談し、日本語で解決策を得ることができる場なのである。

このような日本人高齢者は、バンクーバーに在住する子どもの呼び寄せによって移民してきた人たちや、戦後、若い時に結婚や仕事を期に移住し、歳を重ねた人たちであった。オステオフィットの参加者である理恵子さん（70歳代後半、女性）は、前者のケースである。彼女は、筆者と同じリッチモンド市在住で、カナダ人男性と結婚した娘夫婦と同居している。夫が他界したのをきっかけに、7年前にバンクーバーへ来たとのことである。理恵子さんは隣組まで、週に2回、プログラムに参加するためにバスとスカイトレインに乗って、往復およそ3時間かけて通ってきていた。同じリッチモンド市在住と知って、ある時筆者が「リッチモンドは住みやすい所ですよ」と言うと、彼女は「そう？」と言って怪訝な顔をして見せた。「だって、隣

組まで遠いじゃない」と続け、今は一人で隣組まで来られているから良いけど、転んで怪我でもしたら一人では来られなくなってしまうと不安そうに話した。理恵子さんは、リッチモンドが住みやすいかどうかを、隣組へのアクセスがしやすいかどうかで判断していた。彼女にとって隣組での活動は、普段の生活の中で大きな意味を持ち、さらに隣組まで一人で通えるということが重要であることがわかる。

また、後者のケースでは、隣組のランチ・プログラムで知り合った埼玉県出身の信行さん（日本人男性、60歳代後半）がいる。信行さんは、30年前に仕事の関係でバンクーバーへ渡り、以来ずっとバンクーバーに住んでいる。バンクーバー市中心地のアパートに一人で暮らしていた。以前は、一年に一度は日本に帰っていたが、親戚との関係が悪くなり、8年前からは日本には帰っていないと話していた。

スタッフからの聞き取りにおいても、現在の利用者の多くが、日本語を母語とする人たちである。もともとは、戦前の日系移民1世へのサポートを目的に設立された組織であるが、現在の利用者のうち戦前の移民の子孫は少数であるとのことだった。このような状況をみると、現在の隣組は、日系人のための組織というよりも、日本出身者で、日本語を母語とする日本人のための組織としての性格が強いと捉えることができる。

4-3. エスニック組織の公共的側面

前節では、隣組のスタッフ、ボランティア、利用者に着目し、隣組にかかわる人びとの多様性を検討した。本節では、さまざまな人びとがかかわることにより、ニーズが多様化するなかで、葛藤を抱えながら活動する組織の姿を見ていきたい。

4-3-1. 多様なニーズに対する苦悩と取り組み

日本語でかかって来る電話の用件は、シニアからのプログラムの欠席連絡や、プログラムやサービスに関する問い合わせのほか、ビザの延長申請に関する相談、滞在先のオーナーとのトラブルに関する相談、雇用先での仕事環境に関する相談、離婚の手続きに関する相談などである。このように、隣組を利用する（利用しようとする）人たちは、多様なニーズを抱えてやってくる。

しかし、このような相談すべてに隣組が対応できるわけではない。たとえば、筆者が隣組を訪れている間、移民申請の書類作成を手伝って欲しいという相談の電話が幾度とあった。しかし、隣組には移民申請を代行する資格を持ったスタッフはいないため、そのようなお手伝いはできないと断っていた。移民申請書類は記入方法も複雑で、すべて英語（またはフランス語）で記入をしなければならないため、英語の苦手な人にとってはかなり厄介な作業である。隣組

では、このような相談については、相談者にまず、近所に家族が住んでいるかどうかを尋ね、家族がいる場合は、家族の中で英語とコンピューターの得意な者に手伝ってもらおうよう説得していた。もし、そのような家族がいなくなれば、移民代行業者に頼むしかないと話し、隣組ではお手伝いする資格がないのだということを伝えていた。

しかし、人によっては、家族内で解決しようとしたくない人や、お金を払うから隣組でやってくれという強引な電話をかけてくる人もいたとのことだった。スタッフの智子さんは、このような電話をかけてくる人のなかには、「ただ面倒だから」「ボランティア団体だから」という理由で隣組を頼って来る人がいるとして、次のように告白した。

「(隣組に) なんでもかんでも相談してくる。でも、本当に困っている人とそうでもない人がいる」

「全部は、やっつけられない・・・」

現地での生活に、言語や文化面で問題を抱えている人の助けになりたいと思っただけでも、組織としてはできること／できないことの制限があると、スタッフは語った。

多様なニーズを抱えた人たちがやってくる背景には、現地の日本人コミュニティのなかで「困った時の隣組」という認識があるからでもあった。たとえば、現地の留学エージェントに勤務する日本人女性(30代)によれば、自社で世話する日本人滞在者が、ホームステイ先やアルバイト先、学校などでトラブルを抱えたとき相談してくる際、自社で手に負えない場合は隣組に相談することが慣習となっていると話していた。

このように、周りからの「困った時の隣組」という認識・期待と現実の間で葛藤しながら、隣組は、日系人・日本人コミュニティ内の多様なニーズにできるだけ対応していこうと取り組んでいた。事務局長のトムさんによれば、日系人・日本人コミュニティ全体では高齢化がすすんでいるため、高齢者に関するニーズが大きくなっていること、その内容も多様化してきていると語った²⁵。若いころは英語がある程度はできていても、高齢になって英語を話すことが億劫になったり、また認知症のため英語を話せること自体を忘れてしまう高齢者もいて、母語である日本語に回帰する高齢者が多いという。そのような高齢者本人やその家族を支えるためのサービス(「認知症の人を支える家族の会」)を始めたり、施設に入居する日本人高齢者の話し相手としてボランティアを派遣したりするなどのサービスにも力を入れていた。筆者も実際に、施設訪問のボランティアとして、リッチモンド市内のケア・ホームに入居する日本人高齢者の

²⁵ 事務局長トムさんへの直接のインタビュー(2013年8月13日)による。

もとに毎週通っていたが、その施設に入居する日本人高齢者 2 人²⁶は認知症の影響もあり、英語話者である施設スタッフとのコミュニケーションはほとんど成り立っていなかった。このような事情をみても、日本語でサービスを提供することに力をいれる隣組の取り組みは、現地での生活に言語や文化の面で苦勞している日本人移住者の生活の質を高める重要な取り組みであると考えられる。

4-3-2. エスニック組織が抱えるジレンマ

このように隣組のプログラムやサービスは、主に日本語で提供され、この点が、バンクーバーの日系コミュニティにおける隣組の特徴である。しかし、それゆえに、日本語を理解できない人たちには閉ざされた場になり得る。たとえば、隣組でのフィールドワーク中に、ある出来事に遭遇した。ある日、50 代ぐらいの韓国系の女性が隣組に立ち寄ったことがあった。彼女は、片言の英語で「ここは日本人だけ？」と尋ねた。どうやら、隣組のエクササイズのプログラムに興味を持ち、立ち寄ったようだった。スタッフの一人が「日本人だけではないけど、ほとんどの人が日本語を話す」と英語で答えると、彼女は参加できるかと尋ね、少しだけ英語を話せると言った。それに対してスタッフは、「日本人だけではないけど、ここのプログラムはすべて日本語。参加している人たちがほとんど日本語を話すので、日本語が理解できないと（参加するのは）難しいと思う」と伝えた。結局、彼女は「OK.」とあきらめて帰って行った。

表向きには、日本人だけを対象とする組織ではないと強調してはいるが、日本語を理解できなければ参加するのは難しいと言うことで、暗に彼女の参加を拒否していると捉えられた。つまり、日本語能力があるかどうかによって、隣組のプログラムを利用できるかどうか左右されることがわかる。彼女のように、日本語を理解できない人は、日本人や日系人が隣組で得られるプログラムやサービスを利用することは難しいということになる。また、言語はエスニシティと密接に結びつくから、バンクーバーに住む日本語を理解しない、多くの非日系の民族的背景を持つ人たちにとっては、たとえ隣組が提供するプログラムに興味を持ったとしても、入りづらい場所とならざるを得ないことが考えられた。

小結

隣組は、バンクーバーにおいて、日本にルーツをもつ人たちをサポートする目的で設立された組織であり、日系組織として、歴史のあるエスニック組織である。現在の利用者の多くは、

²⁶ 筆者が訪問していた施設のスタッフによれば、その施設に「Japanese」は 5 人いると紹介された。そのうち 2 人は英語をまったく理解していないようだった。残る 3 人は、カナダ生まれの日系カナダ人 2 世で英語を母語とする女性、日本語と英語が交じる女性、寝たきりの女性であった。

戦後に日本からやってきた日本語を主流言語とする日本人移住者であるが、戦前の日系移民の子孫や、短期滞在の若者など、多様な層の人びとが利用していた。そのような多様な層の人びとに対応するために、バックグラウンドの異なるスタッフが相互に補完し合いながら組織を運営していることが見えてきた。

このように現在の隣組は、バンクーバーに暮らす日本にルーツを持つ人たち、または日本とのかかわりがある人たちのための組織として機能している。日本人だけしか利用できないという組織ではなく、実際に、少数ではあるが中国系の人や白人のカナダ人など、日本にルーツを持たない人が利用している側面もあった。しかし、そのような日本に直接のルーツを持たない人たちのなかでも、どの程度日本あるいは日本人とつながりがあるか（つながりが深いか、浅いか）によって、区別されて認識されていた。たとえば、白人のカナダ人が隣組のプログラムに参加している場合、スタッフはその人が隣組に出入りすることを、配偶者が日本人だからという理由で納得する様子が見られた。しかし、白人のカナダ人でも、配偶者が日本人というわけでもない人については、「あの人は日本とは全くかかわりはない」というように語られていた。

そのような状況のなかで、日本語を話さない、日本とまったくかかわりのない人がやってきた場合、スタッフはどう対応するのであろうか。

韓国系の女性をめぐる起きた出来事は、隣組のエスニック組織としての側面と、高齢者福祉に携わる同組織の公共的側面との間で起きたコンフリクトとして捉えることができる。隣組は、主に日本人および日系人へのサービスを提供する日系のエスニック組織である一方で、高齢者福祉という公共的分野に携わるとともに、市や州政府からの助成金を得て運営される公共的側面も備えている。組織の運営に公的資金が流れることで、ある程度開かれた場でなくてはならないと考えられる。また、そもそもは日系・日本人のための組織ではあっても、日本人のみの組織と言うことはできないのだと考えられる。なぜなら、多文化主義のもと、人種や民族の違いを理由に誰は参加できて、誰は参加できないと制約を設けることは、人種差別や偏見として受け取られかねないと考えられるからである。

しかし、開かれた場にするために、多様な民族・文化的背景をもつ人たちの利用を受け入れてしまえば、本来、対象とする日系人や日本人の人たちに十分なサービスが行き届かなくなったり、日本語環境だった場所で多様な言語が使用されるようになると、日本人の利用者にとって居心地の良い場所でなくなってしまう可能性もある。韓国系の女性に対する「日本人のための組織ではないが、日本語ができないと難しい」というスタッフの表現からは、エスニック組織が抱えるジレンマが浮き彫りとなり、エスニック組織としての側面と公共的側面とのジレンマのなかで、せめぎ合いながら活動する組織の姿がうかがえた。

第5章 身体的多様性とその包摂

本章では、身体的多様性に焦点を当て、多様な身体的差異をもつ人びとをどのように包摂していくのかということを検討する。具体的には、フィールドワーク中に筆者が遭遇した出来事を取り挙げる。1 つは、公共交通機関の利用をめぐる車イス利用者優先のルールである。もう1 つは、地元の新聞記事に掲載された小学校のクラス写真の撮り直しをめぐる問題である。この2つの事例に着目することを通して、身体的差異をもつ人びとを包摂するあり方の多様性について示したい。

5-1. 日本人車イス利用者からみたバンクーバーの公共交通機関

本節では、まず、一車イス利用者である筆者からみたバンクーバーの公共交通機関、とりわけバスの利用状況について記述する。

5-1-1. 車イス利用者のバス利用

車イス利用者である筆者が、フィールドワークをする上で不安だったことの一つは、移動手段である。筆者は車の免許をもたないため、現地での移動はもっぱら公共交通機関を利用しようと考えていた。カナダはバリアフリー先進国と言われており、街中や交通機関も整備されていると聞いていた。しかし実際に利用してみるまでは、車イス利用者でもスムーズにバスや電車を利用できるのかという不安はあった。どのぐらいの割合のバスが車イス対応車なのだろうか。一般の人と同じように、いつ、どこで、どの路線のバスでも乗ることができるのだろうか。

日本で筆者が暮らしていた地域の場合は、車イス利用者でも乗ることができるバス、いわゆる低床バスが走っていた。しかし、そのようなバスを利用するには、いくつかの制約がともなっていた。まず、低床バスの数が少なく、どの時間に低床バスが走るのかということが常に変化するため、いつでもバスに乗れるわけではなかった。たとえば、あるバス停に何時何分に停まるバスに乗りたいたいと思っても、そのバスが低床バスかどうかは、バス会社に問い合わせないとわからないのである。したがって、バスに確実に乗りたいたい場合、筆者はまずバス会社に電話をかけ、何月何日の何時台であればどの時刻に低床バスが走るかということを確認する必要があった。あるいは、事前にバスに乗る時間を決めておけば、当日の3日前までにバス会社に連絡することで²⁷、筆者が乗りたい時間帯に低床バスを配車してもらおうという方法をとっていた。こ

²⁷ バス会社によれば、筆者の暮らしていた地域で運行するバスのスケジュールは、その日の3日前に確定するとのことであった。したがって、3日前までに何時頃にバスに乗りたいたいかを事前に知らせてもらえれば、その時間に低床バスを配車しますと回答だった。

うしてバスを利用することが可能となっていたが、このような方法は事前に予定が確定している場合は問題ないとしても、急な予定変更には対応しづらいものだった。そのため、日本でバスを利用して行動しようと思えば、低床バスの配車時間に合わせて事前に組んだ計画通りに正確に動く必要があるのであった。

実際にフィールドで公共交通機関を利用してみると、渡航前に抱いていた不安はすぐに解消された。バスや電車（スカイトレイン）は、車イス利用者の筆者でも利用しやすいものであった。バンクーバーを走るバスには、車体を下げて乗り降りを容易にするニーリング（Kneeling）の機能と、ランプ（Ramp）と呼ばれる傾斜板をスイッチ一つで自動的に地面にかける機能の2つが備わっており、これらの機能のおかげで車イス利用者でもバスにスムーズに乗ることができるようになっていた。とりわけ、ランプを自動的にかける機能は、日本で利用していたバスと異なる点であった。日本のバスの場合も、車イス利用者が乗り降りする際に地面に傾斜板をかけるが、自動ではなく、運転手が手動で傾斜板をかけるという方法がとられていた。そのため、運転手は車イス利用者が乗り降りする度に運転席を離れて、バスを降りないといけなくなる。それに対してバンクーバーの場合は、この作業が運転席のボタン一つでできるため、運転手はその都度バスを降りる必要がなく、運転手の手間や時間が短縮されていた。この効率的な設備のおかげで、筆者はバスを心理的にも快適に利用することができた。なぜなら日本では、自分が乗り降りする度に運転手に手間取らせ、その間バスを停めてしまうことに気が引けてしまっていたからである。

バスを日常的に利用するようになると、これらの機能が、何も車イス利用者のためだけにあるものではないことに気づかされた。バンクーバーのバスには、歩行器やベビーカーなど、車輪のついた器具を利用する人たちも頻繁に乗って来るため、彼らが乗り降りするときにもこの2つの機能が活躍していた。またバス内の前方部は、車イス利用者やウォーカーを使う高齢者、ベビーカーのための優先スペースとなっていた。普段は椅子になっていて乗客が座っているが、バス停に筆者のような車イス利用者が並んでいるのを見つけると、座っていた添え付け式の椅子を上げてスペースを空け、乗客は後方に下がる。乗客にはそのように行動することが求められており、車イス利用者が乗って来ても座ったままにいる乗客に対しては、運転手や周囲の乗客がその人に後ろに下がるよう声をかけていた。

この優先スペースは車イス2台分のスペースであるが、車イス利用者2人で埋まることも珍しくなかった。このようにバンクーバーでは、車イス利用者がバスを利用する光景は日常茶飯事である。バンクーバーを走るバスにはいくつかの種類があるが、すべてのバスが車イス利用者でも利用できるよう整備されたアクセシブル・バスである。つまり、どのバスでも乗ることができるようになっている。これは日本のように、限られた時刻にしか低床バスが走らないた

め、バス利用に際して時間的な制約が伴うのとは対照的である。

バンクーバーの場合、時間的な制約はないが、場所的な制約は多少あった。それは、車イス利用者の乗り降り可能なバス停が指定されているということである。車イス利用者は、ランプを地面にかけるだけの十分なスペースのある、指定されたバス停でバスに乗り降りするルールとなっている。そのようなバス停の標識には車イスマークがあり、また、バス会社のホームページ上でどこが車イス対応のバス停で、どこは対応していないかを確認することができるようになっていた。

車イス利用者であることで、フィールドでの物理的アクセスに伴う制約が健常のフィールドワーカーと比べて多かったかもしれない。エレベーターのない建物の2階以上にアクセスすることは困難だったし、電動車イスのバッテリーが切れるまでしか行動できないという制約もあった。さらに、これは車イス利用者に限ったことではないが、公共交通機関という移動手段を選択したことで、フィールドでの行動範囲が公共交通機関網の発達した地域内に限定されたということも事実である。そうであるにしても、このようにバスや電車などを物理的・心理的に利用しやすかったことで、筆者がフィールドで一人で行動できる範囲は格段に広がったのである。

振り返ってみれば、バスや電車をこれほど日常的に活用したのは、人生ではじめてのことでもあった。車イス利用者が住み慣れた土地を離れて、外国で、しかも一人でフィールドワークを行うことは、一見難しそうに思えるかもしれない。しかし、移動の自由さ、柔軟さという側面から考えると、バンクーバーというフィールドを選んだからこそ、一人でのフィールドワークを実現させることができたのかもしれない。

5-1-2. 「Good driver」が意味すること

バスを日常的に利用するという事は、筆者にとって非日常的な経験だった。そのため、フィールドでバスに乗ること、バスで移動すること、バスという空間内で起こることは、筆者にとって興味深いものであった。それと同時に、実体験を通して当然視していた日本でのバス利用をめぐるルールや習慣、車イス利用者への人びとの反応や自分自身の行動を改めて思い返し、バンクーバーでのそれとの違いを意識させられるきっかけにもなった。

バンクーバーでバスを利用して最初に興味深く感じたのは、バスの運転手が、車イス利用者への対応に慣れていることである。バンクーバーの運転手は、バス停に車イス利用者が待っていても動じることなく淡々と業務をこなす。日常的に車イス利用者と接するために、車イスの種類にも敏感である。たとえば、筆者が利用する日本製の見慣れない電動車イスを見て、「そんなコンパクトな車イスを見るのは初めてだ」「どのメーカーの車イスか？」と尋ねられる

ことが頻繁にあった。カナダで一般的な電動車イスは、シートの下部分に大きなモーターがあり、スピードが速く、バッテリーの持続時間も長いが、大型で非常に重くなっている。そのようなカナダ製の電動車イスに比べると、筆者の電動車イスは小型で、軽く、小回りが利く。運転手の筆者の車イスに対する反応は、普段見慣れた車イスとの違いに対する驚きと興味の表れだった。

また、運転手や周囲の乗客から、筆者の車イスの操作の仕方に対して「Good driver」と声をかけられることも少なくなかった。前述したように、車イス利用者はバス内前方の優先スペースに乗る（車イスを駐車する）ことになっている。車イス2台分が入るスペースがあるものの、バス内が混んでいたり、ベビーカーや他の車イス利用者が先に乗っていると、スペースが狭められ、指定された場所にスムーズに駐車することが難しくなる。とりわけ、大型の電動車イスやスクーターを利用している人にとっては、小回りが利かないため、駐車するのに手間取ってしまう様子が見られた。それに対して、筆者の小型の車イスだと小回りが利き、比較的スムーズに時間をかけずに駐車することができた。その駐車の様子を見た運転手や周囲の人びとから、車イスの運転の仕方が上手いという意味で「Good driver」と言われることがあった。

この「Good driver」という言葉には、単に車イスの操作が上手いと評価する表面的な意味の裏に、運転手や乗客が、バスを利用する車イス利用者に常に「Good driver」でいることを求めるという意味も込められていた。ある時、混雑したバス内で筆者がスムーズに指定されたスペースに車イスを駐車すると、近くに立っていた乗客の女性から「Good driver」と声をかけられた。それから彼女は少し声のトーンを落として、次のように耳打ちした。

「バスに乗って来る車イス利用者（“wheelchair driver”）のなかには、車イスの運転に慣れていない人もいるわ。あなたみたいにグッド・ドライバー（“good driver”）じゃないものだから、時間がかかるのよ」

彼女の話しぶりからは、車イス利用者が指定されたスペースにスムーズに駐車することができないことで、バスの停車時間が長引くことに対する不満が感じられた。このことから、運転手や他の乗客が、車イス利用者に対して、スムーズにバスに乗れるように車イスを操作することを期待していることが読みとれる。バンクーバーの公共交通機関を運営する Translink も、障害者の公共交通機関利用に関する資料²⁸のなかで「車イスやスクーターを使用する乗客は、それらを安全かつ効率的に操作しなければならない」と注意を促し、そのような技術がない場合

²⁸ Translink 2011 February 1st “Guide to Getting Around Metro Vancouver” 参照。

は、Translink の子会社が提供するトレーニングを受ける必要があると記している。車イス利用者が公共交通機関を利用することが定着し、公共交通機関へのアクセシビリティが保障されているからこそ、車イス利用者側には、バスの業務を円滑に進めるように、「Good driver」として行動することが求められるのである。

しかし、そのように車イス利用者に対して「Good driver」となることを内心では要求してはいても、そのことを車イス利用者に面と向かって口にすることはしない。筆者に耳打ちした女性も、「大きな声では言えないけど・・・」といった様子であった。車イス利用者と運転手や周囲の乗客との間には、バス利用をめぐる、見えない緊張関係が存在することが感じられた。

5-2. バス利用をめぐるルール

フィールドでバスを利用するなかで、バスの乗り方に関して、筆者の価値観と現地の人びととの価値観がぶつかる出来事があった。これは、バスの乗り方をめぐって、筆者が当たり前のこととして取った行動が、現地の人にとっては当たり前ではなく、注意を受けた出来事である。ここでは、この出来事に焦点を当てることを通して、バンクーバーのバス利用をめぐる暗黙のルールを検討する。

5-2-1. 車イス利用者優先の暗黙のルール

ある日の帰宅途中、筆者がいつも利用するバス停には、家路につく人たちで長い列ができていた。バス停に着いた時にはすでにたくさんの人が並んでいたもので、筆者は最後尾に並んだ。するとバスの運転手に、「(列の)先頭において。君を一番先に乗せるよ」と言われた。筆者は、列に並んでいる人たちに悪い気がしながらも、運転手の言った通りに先頭に並び、一番初めにバスに乗った。当初、筆者は、このように列があっても車イス利用者を先頭に並ばせる行為は、この運転手に限ったことで、彼の親切心なのだろうと思っていた。したがって、その出来事の後も、バス停に列ができている場合は、その列の最後尾に並んでいた。そうすることが、日本では当たり前の行動であり、後から来た人が列を無視することは「横入り」として非難される行為であることを学んできたからである。

別のときも、筆者は列に「ちゃんと」並んだ。すると、列の後ろに並んでいる筆者を見た運転手に、「他の人に気を使っているのはわかるけど、君が一番前にいなきゃいけないんだ (“You are supposed to be in the front!”)」と注意された。なぜ、運転手はこのように言ったのだろうか。どうして、筆者は列を無視してバスに最初に乗ることが許されているのだろうか。

たとえ列ができている、筆者を列の先頭に来させようとするのは、運転手だけではなかった。ときには、列の先頭にいる人から、「自分の前において」と言われることもあった。さらに

驚いたことは、車イスを利用している人が、たとえ後に来てても、迷いなく列の先頭でバスが到着するのを待っていたことであった。筆者が良く見かけた車イス利用者の男性は、誰に言われるでもなく、列の先頭でバスを待っていた。列に並ぶことなど念頭にはない様子で、周囲の人たちもそのことに違和感を抱いていない様子であった。

また、車イス利用者より先にバスに乗ろうとする行為は、良くない行動とされているようだった。たとえば、筆者を含めて数人が待つバス停に、バスが到着した。筆者より前にいたある男性は、携帯電話をいじりながら、バスに乗ろうとした。すると運転手は彼が乗るのを制止して、彼の後方を指差した。運転手が示した後方を振り返った彼は、筆者がいるのに気付くと、「あ、ごめん。気付かなかったんだ。」と言って、筆者に順番を譲ったのである。

バスの乗り方をめぐる一連の出来事を通して浮かび上がるのは、「車イス利用者を優先的に乗せる」というルールが現地の多くの人びとによって共有されているということである。しかし、このようなルールに関する項目は、バス会社のガイドラインの中には見つけられなかった。ホームページ上や、バス内の掲示板に注意書きされていることもなかった。つまり、車イス利用者優先のルールは、正式な規則として明記されるようなものではなく、現地の人びとの中で暗黙のうちに了解されている「暗黙のルール」であり、現地の社会で支持される価値規範、行動基準を表すものだと考えられる。

車イス利用者を優先的に乗せるルールがある一方で、列に並んで順番を守るというルールもある。実際に人びとは列に並んでバスを待ち、早く来た人から先に乗るという「早い者順」の集団のルールを守っている。この2つの相反するルールがぶつかる時、なぜ前者のルールが優先されるのだろうか。

バスという公共交通機関を利用する際、何の調整も施されない状態では、車イス利用者を含む障害者は不利な状況に置かれる可能性がある。この「暗黙のルール」は、そのような公共交通機関の利用をめぐって生じる、健常者と障害者の間の格差を調整するためのものであると考えられる。一般に身体障害者や高齢者は「交通弱者」と呼ばれるように、身体的能力の違いや移動に伴う制約を受けるという点で、社会的弱者として位置づけられる。社会的弱者に対する強者として位置づけられるのは、健常者である。この「暗黙のルール」の事例は、多様な人びとがいるなかで、明らかな「弱者」と「強者」が存在し、そのままでは「弱者」が不利益を被る・社会的に「排除」される可能性のある場合、「弱者」を優先したり、特別な権利を与えることで、「強者」と同等の利益や機会を得られるようにしようとするケースとして見ることができる。すなわち、車イス利用者のように、身体的能力の違いから交通手段や移動に制約を抱えている人が、健常者と同じようにバスを利用できるようにするためには、優先順位をつける必要があるという論理のもと、車イス利用者が列に並ばないこと、最初にバスに乗ることが正当化

されるのである。

5-2-2. 障害者割引制度にみる「カナダ人」と「外国人」

このように、車イス利用者の例をもとに、バスの乗り方という点で、障害者が健常者より優先される論理がいかにか正当化されるのかを示した。これは、言い換えれば、優先順位をつけることによって、バスへの障害者の物理的アクセスを保障するものであると見ることができる。しかし、すべての障害者があらゆる面で、バスへのアクセスにおいて優先されるわけではなかった。このことを表す例が、障害者割引制度である。バンクーバーでは、障害のある人が一般の人より安い料金（Concession Fares）で公共交通機関を利用することができる。この障害者割引制度は、ハンディー・カード（Handy Card）と呼ばれる ID カードを持つ人に適用され、永続的な身体的、知的、精神的障害をもつ人びとに対し発行されている。

筆者はこの割引制度があることを知っていたが、ハンディー・カードを申請するには、かかりつけの医師の診断書とともに申請書を提出しなければならない。また、一短期滞在者である筆者が、申請対象であり得るかどうかも定かではなかったため、現地に到着してから詳しく調べてみようと考えていた。フィールドでの最初の月、筆者は通常の料金チケットを購入し、バスや電車を利用していた。ある時、バス内で隣に座っていた高齢の車イス利用者から声をかけられた。その男性は、筆者がバスに乗る際に、一般的な料金チケットで支払いをしているのを見たらしい。筆者が割引制度のことを知らないのだと思い、割引チケットのことを説明し始め、「どこのセブンイレブンでも買えるから、次回からは割引チケットを買いなさい」と言った。筆者は、自分が短期滞在者であることを伝え、そのような「外国人」でも割引チケットが買えるだろうかと尋ねてみた。すると彼は、「そんなことは関係ない。障害者は障害者だ」と強調した。

彼の話に促されて、自分が割引制度を利用するために必要なハンディー・カードの対象者かどうかを、バス会社に問い合わせしてみた。結局のところ、筆者はそのカードの対象者には含まれないことがわかった。割引制度のことを教えてくれた男性の予想とは裏腹に、ハンディー・カードを取得でき、割引制度を利用できるのは、カナダ市民あるいは永住者に限るとの回答であった。その後入手したバス会社の資料にも、「ハンディー・カード申請者はバンクーバーの永住者であること」と明記されていた²⁹。

²⁹ 原文は、次の通りである：“Persons with a permanent physical, sensory or cognitive disability that is sufficiently severe that they are not able to use conventional transit without assistance, may be eligible for HandyCard. Applicants must be permanent residents in Metro Vancouver.” [Translink 2011 Guide to Getting Around Metro Vancouver]

前述したように、バスへの物理的アクセスの面では障害者が健常者より優先的に扱われていた。しかし、障害者割引制度に着目すると、この制度を利用できるのがカナダ市民権や永住権をもつ者に限られており、そのような資格を持たない「外国人」は対象外であることがわかる。つまり、障害者という共通性はあるつつも、バスへの経済的アクセスという面では、カナダ市民／永住者と外国人が明確に区別されており、市民権／永住権を持つ人と持たない人という差異化の論理が働く。このように市民／永住者という資格を持つか持たないかという差が、カナダに生きる人びとを区別する大きな境界線であるということが言える。

5-3. 「みんな一緒」のルール

前節では、バスの利用をめぐる筆者自身の経験を通して、身体能力的に多様な人びとをいかに包摂するのか、その包摂の仕方を正当化する論理とは何かを検討した。ここでは、前節の事例とは対照的な論理で障害者を包摂しようとする事例を取り挙げる。

5-3-1. あるクラス写真をめぐって

2013年6月13日の地元新聞『The Province』の一面に、ある写真が掲載された。写真は、ある小学校のクラスの集合写真で、子どもたちと担任の先生がひな壇に並んで座っているものである。ひな壇の横に、車イスに乗った男の子がいた。その男の子は車イスを利用しているため、ひな壇には登れず、壇の横に位置し、他のクラスメートとは少し離れた形になっていた。この写真を見た車イスを利用する男の子の母親が怒ったことがきっかけで、新聞の一面記事になる騒ぎとなったのである。母親は、この写真について、自分の息子だけがクラスの輪からのけ者にされていると主張し、小学校や写真を撮った会社に抗議した上で、新聞に写真を投稿した。母親は記事のなかで、「この写真に注目してもらうことで、障害をもつ子への差別に少しでも光を当てたかった」と述べ、学校とカメラマンの両方に非があると述べている。そして、数日後の新聞の一面には、撮りなおされた同じクラスの集合写真が掲載された。今度は、少年は車イスから降りて、ケア・ギバーに付き添われながら、他の子どもたちと一緒にひな壇に座っている写真であった。

障害のある人の包摂の仕方という観点からみた時、この事例と前節の事例との違いは何だろうか。バスの優先ルールの事例では、障害者と健常者をあらかじめ区別して優先順位をつけることで、バス利用における障害者と健常者の平等なアクセスを達成しようとする方法がとられていた。しかし、クラス写真の事例からわかることは、この場合は、区別すること自体が「差別」として捉えられているということである。違いのある人を他の人たちから区別することは、この場合は許容されない。クラス写真の事例では、障害者と健常者を区別するのではなく、両

者の間に違いがあっても違わないようにする、「みんな一緒」というやり方で障害者を包摂しようとしていると言える。撮り直された写真に示されるように、ここで目指されるのは、違いを見えなくすることなのである。

5-3-2. 「差別」概念のあいまいさ

クラス写真の事例に対する人びとの反応は、人びとの「差別」に対する考え方の多様性と複雑性を表していた。

クラス写真の新聞記事を見た日本人女性ひとみさんは、次のように話した。

「日本では考えられないよね・・・日本人だったら、そういうことがあっても「しょうがないよね」となって、言わないし、波風を立てないようにする。でも、こっち（バンクーバー）は違う。こういうことがあると、みんな言うし、新聞の一面記事にまでなる。」

ひとみさんは日本生まれで、現在 60 歳代半ばである。30 年ほど前にカナダ人のご主人の地元であるバンクーバーに家族で移住した。筆者がひとみさんと彼女の娘さんと知り合ったのは、隣組がきっかけである。彼女は隣組の会員で、毎週金曜日に行われるクラフトのプログラムに参加していた。ひとみさん家族が移住を決めた理由の一つは、障害をもつ娘さんのことを考えたためだという。バンクーバーでは「ニーズのある子」も「普通の子」もみんな一緒のクラスに入るのだと話し、「その方が良いですよ」と彼女は考えていた。それから、次のようにも言った。

「この写真の撮り直しの件もそうだけど、こういうサイドワークも、車イスの人たちでも通りやすいように作られている。でも、最初からそうだったわけではなくて、「そうして欲しい」「そうすべきだ」と言う人たちがいて、その人たちのおかげで、今の使いやすいサイドワークがあるんですよ。まあ、「そうすべきだ」と言う人たちがいて、「そうしましょう！」と言って実行する人たちがいるっていうことが、またすごいことだけどもね。」

筆者は、彼女の考え方を聞いて少し戸惑った。そもそも、このクラス写真を最初に見たとき、「ここまで大きく取り上げるようなことなのだろうか」と疑問を抱いていた。最初の集合写真に写っているひな壇と車イスを利用する少年との間の距離も、確かに少し離れてはいるが、「そのくらい別に良いのではないか」「自分だったら、そこまで大げさに取り上げて欲しくない」と思ってしまう。ひとみさんから見れば、筆者は「波風を立てない」ようにする日本人の典型的

な例なのだろうか。

この記事について、筆者とは異なる見方を示したのが、70歳代後半のカナダ人男性ダイブさんである。彼は、グランビル・アイランドのパブリック・マーケットでカードを販売している（3章および6章に登場）。筆者がたまたまマーケットに出かけた際に知り合い、親しくなり、フィールドワーク中に最も話をしたインフォーマントの一人である。写真の記事が掲載された日の数日後、筆者はマーケットでダイブさんに、この記事について話した。彼は、車イスを利用する少年がひな壇から離れた所に位置していたことについて「それは良くない」とすぐに反応した。それに対して、この記事を見て筆者自身が感じたことを話してみた。あれだけの距離でこのような騒ぎになることや写真の撮り直しまですることに驚いたこと、日本で同じようなことが起こっても新聞の一面記事にまではならないだろうと思うこと、カナダではあれだけの距離でも受け入れられ難いことなのだ知り驚いたということと話した。すると、しばらくして、彼は次のように話した。

「カナダでは、こういう類の話に過激に反応しすぎる（“too sensitive”）ことがある・・・カナダでは、すべての人を公平に扱おうとするし、受け入れようとするんだ。決して、誰ものけ者にされたりしないようにね。」

それから、次のようにも続けた。

「でも、この母親（車イスを利用する少年の母親）に対して、「まあまあ、そんなに深刻に受け止めなくても大丈夫だよ」なんてことは絶対に言えない。そう思っていたとしても、口に出したりしたら、また問題になるからね。」

ダイブさんは、この写真は望ましくないと考える一方で、カナダでは、このような出来事に対して過剰に反応しすぎることもあるとも考えていた。「差別」や「排除」に、敏感すぎることもある、と。たとえ、担任の先生が車イスを利用する子を差別しようとしたわけでもなく、当事者が「差別」だと感じれば「差別」になる。このクラスの先生は、もっと“smart”にならなくてはいけない、と彼は語った。

ダイブさんの話を聞いて、以前、滞在先のご主人ウィリアムさんが、同性愛者のコミュニティーについて話していたことを思い出した。バンクーバーには大きなゲイ・コミュニティーがあり、ブリティッシュ・コロンビア州では同性間の結婚が合法化されている。ある日の夕食時に、バンクーバーで毎年行われるプライド・パレード（Pride Parade）の話になった。夏に催

されるお祭りで、ゲイやレズビアンといった同性愛者が奇抜な衣装でパレードを行うものである。ウィリアムさんは、以前から同性愛には否定的な考えを示していた。友人が同性愛者だとわかって、人として尊敬はするが、同性愛自体や同性同士の結婚には反対である、と。バンクーバーのゲイ・コミュニティがニュースで取り上げられた際、「バンクーバーはおかしい」と言って、こう続けた。

「でも、同性愛に反対だと言うと、彼らは騒ぎ出す。彼らを人として認めないわけではないし、差別しようと思っているわけでもない。個人的に同性同士の結婚には反対だと考えていて、私がどのように考えようがそれは私の自由のはずだ。それなのに、ここでは、それを言うと差別主義者として非難されるんだ。」

ダイブさんやウィリアムさんの語りを通して、バンクーバーでは、障害者や同性愛者といったマイノリティーにまつわる出来事は、きわめて「Sensitive」な問題であるということが読みとれる。彼らに対する不用意な発言や対応は、「差別」として取りあげられる可能性があり、人びとは過敏に反応する。何が「差別」で何が「差別」でないかという、差別の基準はあいまいであるということがわかる。

小結

本章では、身体的に多様な人びとをどのように包摂するのかという視点から、2つの事例を見てきた。

車イス利用者を優先的にバスに乗せるという「暗黙のルール」は、障害者と健常者が同等にバスを利用できるように、あらかじめ両者の差異を明確にして、「弱者」の立場にある前者に適切な配慮をするというものであった。それに対して、クラス写真の事例は、障害者と健常者を差異化するのではなく、差をあってもないようにすることで、障害者と健常者の平等を達成しようとするものであった。この2つの事例は、どちらも障害者を社会的に排除しないこと、包摂することを目指しているという点で共通している。しかし、これまで見てきたように、両者が異なるのは、包摂を達成しようとする時の背景にある論理だということがわかる。本章では、さまざまに違いのある人たちを包摂する方法は、そのときどきの状況や文脈によって変わるものであることを示した。

また、このように状況によって包摂の仕方が変化するなかで、「差別」の基準も状況や個人個人によって変わるものであることを示した。クラス写真の事例に対する人びとのさまざまな反応が、そのことを物語っていた。どこからが差別で、どこまでは差別ではないかという一線は、

あいまいなのであることがわかる。あいまいだからこそ、その一線を超えないように、揺れ動き、慎重に発言し、行動する。次章では、バンクーバーに生きる個々人のライフストーリーに着目することを通して、多文化社会のなかで揺れ動きながらも逞しく生きる人びとの姿を描きだしたい。

第6章 多文化社会で生きる

本章では、多文化社会バンクーバーに暮らす人びとの日常生活や仕事に着目することを通して、彼／彼女たちが「多様性」と「包摂」の狭間で、揺れ動きながらも逞しく生きる姿を描きだす。

6-1. エスニック・バックグラウンドの活用と市民権をもつ意味

—中国系移民1世男性のライフヒストリー—

本節では、中国系移民1世の男性ウィリアムさん（インタビュー当時53歳）のライフヒストリーを記述する。特に、ウィリアムさんのビジネスに着目することを通して、エスニック・バックグラウンドに由来するコミュニティとカナダ市民としてのコミュニティを行き来しながら、人びととの関係性を築いていく姿を描きだす。

6-1-1. 中国からカナダへ

1981年に中国本土南部の広東省から、両親とともにカナダ・アルバータ州の都市エドモントンに移住した。ウィリアムさんが高校を卒業してすぐの頃である。彼によれば、当時のエドモントンには中国人は100人ほどいて、小さな中国系コミュニティがあったという。カナダへ移住した当初は、生活も仕事もかなり大変で、お金がなく仕事を2つ3つ掛け持ちしていた。最初の頃の仕事は最低水準で、ホテルの厨房で皿洗いをしていたという。

「最初のFホテルの時は、英語もしゃべれなかった。（面接では）「明日から来られる？」と聞かれただけ。」

その頃は、ウィリアムさんの他にも、英語のしゃべれない中国系移民の人たちが厨房で働いていたとのことである。

別々のホテルではあるが、彼の両親もホテルで働き、3人で生計を立てていた。カナダに渡る以前の両親の職業は、父親は大学教員、母親は小児科医であった。しかし、移住後にぶつかった言語的障壁は大きく、カナダに来てからは良い仕事に就くことができずに苦労したとのことである。とりわけ、小児科医だった母が、ホテルの掃除婦として忙しく働いていた姿を見るのが辛かったと彼は話した。

「母は色々なものを諦めて、自分や妹たち、家族のために働いてきた。」

ウィリアムさんは両親のことを語る時、「彼らは教養がある（“They are educated.”）」と表現する。リッチモンドの街中やバスに乗っていると、中国語で会話する高齢者たちを多く目にする。彼、彼女たちのほとんどは、先に渡加し、カナダ市民あるいは永住権保持者となった娘・息子の近親者として、移民ビザを得てカナダへやって来た者たちである。そのような中国系高齢者が英語を話せないケースは少なくない。ウィリアムさんは、自分の両親が高学歴で中国では専門職に就いていたこと、また英語を理解できることをあげ、英語を話さない「彼ら」中国系高齢者とは違うということを強調していた。

ウィリアムさんが 20 代後半のときに、同じ中国系移民の女性と結婚した。当時、職に就いていなかった妻と義父のために、2 人が中国料理店を経営できるようにと、エドモントンで飲食店の経営をはじめた。しかし、妻と義父だけでは店を切り盛りできず、ウィリアムさんも自身の仕事が終わった後に手伝っていたという。結局、店の経営はうまくいかずに閉店。店は日本人男性に売り渡したとのことである。

ウィリアムさん夫妻の間には女の子が誕生した。しかし、娘が 7 歳のとき、旅行先のキューバで妻が交通事故に遭い他界してしまう。辛い時期に、力になってくれた友人からバンクーバーへ来ないかと誘われたことがきっかけで、娘を連れてバンクーバーへ移住することを決意したという。バンクーバーへ移ってからは、バンクーバー国際空港に隣接するホテルに勤務。ホテルで働いているときは、宿泊客の送迎の仕事のために、大型バスの運転免許を取得したりしたという。以来、2010 年に上司と揉めて辞職するまで、ずっと同じホテルで働いた。辞職後は住宅投資や、不動産業のような仕事を個人で行い、収入を得ている。クライアントの多くは友人で、「自分の好きなようにやれる」現在の仕事や生活が気に入っていると語った。

「(ホテルで働いていた頃より)今は、ずっと良い。レンタル・ハウジングの収入があるから、そんなに働かなくて良いし、やりたいようにやれる。友だちを助けたりとか」

「バンクーバーに来て良かったと思うか？」と彼に尋ねると、「良かった。ここでジェイミー（現在の妻）とも結婚したしね」と語った。前妻を事故で亡くして以来、ウィリアムさんは 10 年間独身だったが、2006 年に現在の妻ジェイミーさんと再婚した。ジェイミーさん（インタビュー当時 42 歳）とは、ウィリアムさんが香港を訪れた際、友人の紹介で知り合ったとのことである。現在、ジェイミーさんは、バンクーバーの東側に位置するコキットラム市の建設会社に勤務しており、ウィリアムさんが送り迎えをしている。

ウィリアムさんは、仕事の関係で外出する以外は基本的に家にいて、料理、洗濯、掃除など、

家事のほとんどをこなしている。リッチモンド市の自宅には夫婦二人で暮らしており、娘（20代半ば）は車で15分ほどの所にあるアパートで一人暮らしをしている。ときには、娘を招いて3人で食事をしたり、また同じ市内に暮らすウィリアムさんの両親や姉妹家族ともクリスマスや旧正月などには集まって、家族みんなで過ごす時間を作っているようだった。このように、ウィリアムさんの近親者は同じリッチモンド市内に暮らしている。他の親戚もカナダ国内の別の州やアメリカ西海岸地域に暮らしている。出身地である中国広東省との物理的な行き来はなく、これからも帰る気はないと語っていた。

6-1-2. エスニック・バックグラウンドに由来した人的ネットワーク

ここでは、ウィリアムさんのビジネスにおける人間関係に着目することを通して、どのような人びとと、どのようなつながりを持ちながら日々の生活の場を築き上げているのかについて見ていく。

現在のウィリアムさんの仕事は、主に賃貸住宅の管理である。自分の所有するいくつかの住宅を賃貸に出して、その家賃収入を得ている。また、自分の物件のほかにも、友人が所有する住宅物件の管理も行っている。友人というのは、バンクーバーに居住しているわけではなく、普段は中国で仕事をし、生活している人たちである。ウィリアムさんは、彼・彼女たちがバンクーバーで購入した住宅物件の管理を請け負い、借り手を世話したり、物件の設備維持をおこなっている。

筆者がウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻のお宅にホームステイしている間、夫妻の友人たちとも何度か会う機会があった。自宅または友人宅での食事会や、時には飲茶に同席することもあった。そのような席での会話には、北米における最近の住宅市場の動向や、お互いが所有する物件についての話など、住宅投資に関する話題が頻繁にのぼっていた。

このような友人の一人に、レベッカさん（50代女性）がいる。彼女は中国東北地方の出身で、現在は広東省の深圳市で大学関係の仕事に携わっている。彼女はシングル・マザーで、一人娘（20代半ば）は、バンクーバーの高校、大学に通い、現在は地元の会社に勤めている。レベッカさん自身は、仕事のため一年の大半を中国で過ごす。リッチモンド市に一軒家を構えており、普段はそこに娘が一人で暮らしている。ある日、リッチモンド市にあるレベッカさんの自宅に食事に招かれた。レベッカさんは、リッチモンド市の自宅には年に数回しか帰ってこないが、リッチモンドに滞在している間は、しばしばウィリアムさん夫妻とこのような食事会を催すとのことであった。

ウィリアムさんは、レベッカさんがバンクーバーに所有する住宅の管理を行っている。食事の途中、バンクーバー市東部にあるレベッカさんの物件についての話になった。その家に現在

住んでいるテナントが近々引っ越すため、新しいテナントを探さなければならないといった内容である。ウィリアムさんがそのテナント探しを引き受け、家を貸すのにふさわしい“good person”かどうかを実際の面談を通して判断することになっている。また、別の日に催された飲茶の席には、レベッカさんの友人で中国本土に居住している女性アンナさん（50歳代）が加わった。レベッカさんとアンナさんは古くからの友人で、レベッカさんの紹介を通じて、アンナさんもウィリアムさんに住宅管理を世話してもらうようになったとのことである。

このように、レベッカさんとウィリアムさん夫妻は、単なる友人関係にあるだけではなく、ビジネス上の密接なつながりがあることがわかる。レベッカさんやアンナさんのような中国本土出身者とのビジネスを通じて、間接的にはあるが、ウィリアムさんは中国本土とのつながりを有しているのである。

6-1-3. 言語戦略とエスニック・バックグラウンドを活用したビジネス展開

レベッカさんは英語をほとんど話すことができない。そのため、ウィリアムさん夫妻とレベッカさんは中国語で会話をする。ちなみに、中国語を話せない筆者とのコミュニケーションは、ウィリアムさんとジェイミーさんによる英語と中国語の通訳によっておこなわれた。ウィリアムさん夫妻の母語は広東語（Cantonese）であるが、レベッカさんの母語は標準中国語（Mandarin）であるため、3人の会話には広東語と標準中国語が混ざっているとのことであった。ウィリアムさんのクライアントには、レベッカさんのように中国本土出身で標準中国語を話す人が多い。そのため、ウィリアムさんは標準中国語を独学で勉強して覚えたという。

ある時、ウィリアムさんとリッチモンドでビジネスをすることについて話をしたことがあった。筆者が、「リッチモンドには中国系の人たちが多いから、中国語を話せると得するのではないか？」と尋ねると、彼は次のように答えた。

「そうだね。でも今は広東語より、標準中国語の方が得だと思う」

彼は、標準中国語でコミュニケーションを取ることができれば、香港や広東省の人に限らず、中国本土の人たちすべてを対象としてビジネスができると話した。リッチモンドにも中国本土からの移民が増えているため、香港系の人びとも標準中国語を学ぶ必要が出てきているのだと語った。確かに、リッチモンド市在住者の母語についての調査によると、標準中国語を母語とする人びとの割合は、2006年から2011年の間に54%増加しており、他の言語を母語とする人びとの増加率と比べて圧倒的に大きい[City of Richmond The Hot facts-languages 2014]。このことから、近年のリッチモンドにおいて、中国本土出身者が存在感を増していることを

うかがい知ることができる。

ウィリアムさんは、リッチモンドで暮らしながら、このような言語状況の変化を身近に感じるなかで、ビジネス上の言語戦略として標準中国語を習得し、中国本土出身者とのつながりを広げていった。このようにビジネスを展開していくことを可能にしたのは、単に彼の標準中国語の能力に限らず、彼の中国系というエスニックな背景が影響しているものと考えられる。なぜなら、民族・文化的背景を共有するということは、他人との信頼関係を形成する一つの効果的な要素であると考えられるからである。すなわち、ウィリアムさんは広東語と標準中国語による言語力と、自らのエスニックな背景を活用することを通して、バンクーバーに居住しない中国本土出身者とのビジネスを展開してきたとみることができるだろう。

6-1-4. エスニック・バックグラウンドに基づかないビジネス展開

ここまで、ウィリアムさんのビジネスを介した交友関係について見てきた。中国系移民1世のウィリアムさんは、中国系というエスニック・バックグラウンドに由来する人的ネットワークと、広東語および標準中国語によるコミュニケーション力を駆使しながら、普段は中国本土に拠点を置くバンクーバー非居住者とビジネスを展開する姿がうかがえた。

ウィリアムさん自身や彼の中国系の友人たちは、住宅のオーナーである。それでは、それらの住宅を借りて入居しているのは、どのような人たちなのであろうか。ここでは、ウィリアムさんのクライアントで友人の一人でもある日本人女性京子さんとのかかわりを例に、エスニック・バックグラウンドに由来しないビジネスの側面について見ていこう。

ウィリアムさんとビジネス上の付き合いのある京子さん（女性、40歳代半ば）は、徳島県出身の日本人である。第1章で取り挙げた女性で、筆者にバンクーバーでの滞在先としてウィリアムさん夫妻を紹介し、ホームステイ契約の仲介をしてくれた人物である。

ウィリアムさんが京子さんと知り合ったのは、筆者がウィリアムさん宅でホームステイを始める5カ月程前である。京子さんが、クライアントである日本人家族からの依頼で、バンクーバー市の西に位置するキツラノ地区で賃貸物件を探していたときに、興味を持った物件が彼の管理する物件だったことがきっかけである。その時の物件には、京子さんの仲介でウィリアムさんと日本人家族が契約し、一年間滞在することとなった。それ以来、たまたま自宅が近所であることがわかり、仕事内容の接点も多いことから親交がはじまった。京子さんがクライアントのために物件を探しているときは、ウィリアムさんに良い空き物件がないかと相談したり、反対に、ウィリアムさんの管理する物件に空きが出たら、条件に合う新しい入居希望者がいないかどうか京子さんに尋ねるなど、もっぱら仕事上のかかわりが多いとのことである。

ウィリアムさんが、管理する物件の入居者（テナント）を探すときに接する人たちの多くは、

京子さんのようなバンクーバー居住者あるいは滞在者であり、エスニック・バックグラウンドが多様な人たちである。時には、「日系（“Japanese”）」であったり、「イタリア系（“Italian”）」であったり、「白人（“White people”）」であったりと、さまざまな人たちである。そのため、お互いに共通のコミュニケーション手段である英語を使って交渉をすすめていく。これは、ウィリアムさんが物件のオーナーたちと中国語を介してビジネスの話をすすめるのとは異なる点である。つまり、物件のオーナーたちとのビジネス上あるいはプライベートでのコミュニケーション手段が「中国語」である一方で、その物件のテナントたちとのコミュニケーションは英語を介しておこなわれるのである。

前述したように、ウィリアムさんは、中国本土出身の物件オーナーたちと中国語や中国系というエスニックな背景を活用しながら信頼関係を築き、ビジネスを展開していた。しかし、バンクーバー居住者と仕事上の関係を築いたり、物件の借り手との関係を築く上では、彼の中国系というエスニックな背景は活用されない。そこでは、ウィリアムさんの「カナディアン」としてのステータスが、彼らとの信頼関係を形成するうえで重要な要素となっているのである。たとえば、京子さんが筆者にホームステイ先を紹介する際、ウィリアムさん夫妻について「香港出身のカナディアン」と表現した。ここで京子さんが示していた「カナディアン」とは、ウィリアムさん夫妻がカナダ市民権をもっているということを意味している。このことから、カナダ市民権をもつ「カナディアン」であるということは、ウィリアムさんが賃貸を通じてバンクーバー居住者との信頼関係を形成する上で効果的な役割を担っていると捉えられるだろう。

本節では、中国系移民一世であるウィリアムさんの仕事における人間関係に着目してきた。ウィリアムさんは、中国語を駆使し、中国系という自らのエスニックな背景を活用しながら、中国本土出身の住宅オーナーたちとの関係を築きビジネスを展開していた。その一方で、その住宅の借り手を探したり、バンクーバーに居住する中国系以外の人びとと仕事で接する際は、英語を使用し、中国系という民族・文化的背景ではなく「カナダ市民」としてのステータスが相手との仕事上の信頼関係を築く重要な要素であることがうかがえた。

観光ビザ、学生ビザ、就労ビザ、永住権など、さまざまな程度の滞在資格があるなかで、その人のカナダにおける社会的立場を最も保障するのが市民権であると考えられる。つまり、市民権というカナダ社会における安定したステータスをもつことが、ウィリアムさんが自らのエスニックな背景を最大限に活用してビジネスを展開することを可能にしているのではないかと考える。

6-2. カナダ社会で働くことの意味

—中国系移民1世女性のライフヒストリー

本節では、中国系移民1世の女性ジェイミーさん（インタビュー当時42歳）のライフヒストリーを記述する。彼女は、前節で取り上げたウィリアムさんの妻である。同じ中国系移民1世であっても、両者の出身地域、移住時期、移住の動機、教育程度などのバックグラウンドは大きく異なり、バンクーバーでの経験も異なっている。

6-2-1. カナダと香港を行き来する

ジェイミーさんは、2006年にウィリアムさんとの結婚をきっかけにバンクーバーへ移住した。カナダには結婚以前にも訪れた経験があり、ウィリアムさんとの交際期間中にバンクーバーを数回訪れたほか、アルバータ州のエドモントンに暮らす親戚を訪問したこともある。

ジェイミーさんの家族は、両親と姉・弟の5人家族である。出身は香港だが、父親の仕事の都合でマカオで育った。マカオの大学を卒業したのち、就職のため香港に移り住んだ。働きながら香港の大学院に通って会計学を専攻し、MBAを取得した。現在、両親と姉は香港で暮らしており、弟は結婚してオーストラリアで生活しているという。

2006年にウィリアムさんと結婚してバンクーバーへ移住してからも、ジェイミーさんは年に数回は香港へ帰り、1週間から2週間ほど滞在するとのことだ。筆者がジェイミーさん夫妻宅に滞在している間にも、ジェイミーさんは春に一度香港へ帰り、1週間ほど滞在したあと、香港でしか手に入らない食材や、香港で購入する方が安く手に入るものを、スーツケースいっぱい詰めて持ち帰って来た。夫妻が暮らすリッチモンド市には中国系の食材・食品を扱う店が数多く立地し、香港スタイルの大衆食堂やカフェ、値段の手頃な飲茶レストランから高級レストランまで幅広くそろっている。そのため、日頃から香港や中国南部の食文化に親しんでいる夫妻にとって、リッチモンドで暮らしていて食生活の面で困ることはほとんどないと語っていた。それでも、たとえば個人的に好む菓子類など、リッチモンドのスーパーでは扱っていないものもある。ジェイミーさんは、筆者が夫妻宅に滞在する少し前（9月半ば）にも香港へ帰っていたが、その時に持ち帰って来たのは中秋節に食べる「月餅」で、「月餅ならこのメーカー」という彼女一押しの月餅を数箱購入して帰ってきていた。

ジェイミーさんが香港へ帰る一番の目的は、両親に会うためである。リッチモンドにいる間も、両親と国際電話やスカイプを利用して、頻りに連絡を取り合っているという。筆者が「両親はバンクーバーへ移住する気はないのか」と尋ねたところ、「ないだろう」と彼女は話した。父親は体を患い病院通いだし、高齢のため、カナダに移住しても、今からカナダの文化や制度に慣れるのは難しいだろうからと語った。彼女の両親は、これまでに一度もバンクーバーを訪

れたことはない。ジェイミーさんとウィリアムさんは、結婚式は挙げずに、現在の自宅のテラスでウィリアムさんの家族と少数の友人だけを招待して小さな結婚披露パーティーを開いたが、その理由はジェイミーさんの両親が式に参加できなかったためだという。当初は香港に暮らすジェイミーさんの家族も招いて結婚式を挙げる計画もあったが、彼女の父親が病気のため渡加することができなくなった。そのため、こじんまりとした、お披露目会のようなパーティーだけ行うことにしたのだと彼女は話し、次のように語った。

「結婚式にたくさんのお金をかけるよりも、その分のお金を年に 2〜3 回、両親に会いに香港へ帰るために使いたかったの」

このように、ジェイミーさんは移民してからも、両親と会うために香港を定期的に訪れる生活を送っている。「将来的に香港に帰ることは考えていない」と語るが、母国（地域）とカナダを物理的に行き来し、またインターネットや国際電話を利用して日常的に連絡を取り合うことを通して、母国（地域）とのつながりを保ちながら生活している。

6-2-2. 仕事探しと「カナダ経験（Canadian experience）」

ジェイミーさんは、香港で会計士の資格を取得し、卒業後は大手企業で会計士として働いていた。独身時代のことを「よく働いて、よく遊んだ」と語り、新しいことにも積極的に挑戦したと話す。

「中国で友人と新しいビジネスに挑戦して、失敗したこともあった。企業に勤めている時は、大きな額のお金を扱うから、何セントとか小さいお金には目もくれなかったけど、自分で経営するとなると、ほんの小さな額まで注意深く計算していかないとダメなのよね。自分でビジネスするのは、私よりもウィリアムの方がずっと長けているわ。」

ウィリアムさんと結婚してカナダへ移住するため、大学を卒業して以来勤めていた会社を辞めた。バンクーバーへ移住した当初は、家事をしながら、コミュニティ・カレッジに通って英語を勉強しなおしたと話した。仕事に就きたいと考えていたため、そのために、まずはしっかりと英語を身につける必要があると思ったという。

2007年に、コキットラム市にオフィスを構える建設会社に会計士として就職した。「カナダで職を得るのは大変だったか」と尋ねてみた。すると彼女は、仕事を探し始めてから半年で職を得ることができた自分は幸運な方だと語りながらも、最初は大変だったと話した。現在の会

社から雇用されるまでの半年間に、20以上の企業に履歴書を送ったが、次々に断られたという。カナダに新しくやって来た移民が、最初の職を得ることは大変だと語り、その理由を次のように語った。

「新参者の移民が最初の職を得るまでは大変。なぜなら、カナダでの仕事経験がないからよ。インタビュー（面接）で最初に聞かれるのが、「これまでに、カナダの企業で働いた経験はあるか?」「カナダの文化に親しんでいるか?（“Are you familiar with Canadian culture?”）」って質問なんだから。」

このような「カナダ経験（Canadian experience）」を重視する雇用主側の要求は、高学歴で専門的スキルを備えた移民がカナダ社会で再就職する上でぶつかる大きな障壁である。移住して間もない移民が、それ以前にカナダでの仕事経験があるとは通常考えにくい。そのうえで「カナダ経験」を問うことが、海外で教育を受け、専門性を磨いた移民を差別するときの尤もらしい論理的根拠として使われていると批判する声もある[Man 2004]。Man[2004]は、香港や中国本土からカナダに移民した高学歴で専門的技術をもつ移民女性（skilled immigrant women）が、外国の学歴・資格であること（カナダでは資格認定されないこと）や「カナダ経験」の欠如を理由に、移住後に正規の職を得ることに困難を抱えている状況に着目している。移民女性たちが移住先で最初に就く仕事は、資格を必要とせず、低賃金で、不安定な単純労働である場合が多く、それは「カナダ経験」を得るために仕事を選ばず、そのような仕事に身を置かざるを得ない状況があるからだと指摘する[Man 2004 : 142]。

ジェイミーさんの場合も、「カナダ経験」がないために、母国では比較的大きな企業で専門職に従事していた経歴があっても、バンクーバーで職を得るまでの道りは簡単ではなかった。しかし、Manが調査した女性たちと異なる点は、ジェイミーさんの場合は「カナダ経験」を得るための方法としてボランティアを選んだことである。彼女は、職探しをしながら、ある会社で3カ月間ほどボランティアとして働いた。それは、職を探すときに企業から求められる推薦状（Reference）を手に入れるためだと彼女は語った。推薦状とは、欧米で就職・転職をする際に企業から求められる書類で、その人の人柄や仕事能力などを証明する書類である。転職の場合であれば、前に勤めていた会社の上司に推薦状を書いてもらったり、正規雇用された経験のない学生などの場合は、ボランティアやアルバイト、インターンシップをするなどして推薦状を手に入れるのが一般的である。筆者も、現地の高齢者施設でボランティアとして働くにあたって、筆者のことを良く知る2名からの推薦状を提出するよう求められた。カナダでは、ボランティアやアルバイトといった正規雇用ではない場合でも、推薦状の提出が求められること

もあり、推薦状があることは正規・非正規を問わず、採用に有利に働くとされている。つまり、就職に際して、「カナダ経験」があるかどうかを証明するものこそ、この推薦状なのである。

移住して間もなく、カナダでの仕事経験がないジェイミーさんは、ボランティアをすることで「カナダ経験」を積み、推薦状を得るに至った。推薦状には、「彼女はこの会社で何カ月働き、職場でのコミュニケーションも問題ない」といった内容のことを書いてもらうのだと彼女は語った。彼女の話からは、推薦状が単にその人の人柄や仕事能力を証明するというだけでなく、移民にとっては、ボランティアであれ何であれ、カナダで働いた経験があるということを示し、現地の人たちともうまく交流でき、現地の文化や仕事環境にも適応することが可能であるということを示す意味合いも含まれていると捉えることができるだろう。

また、ジェイミーさんがもつ会計士の資格は、香港で取得したものであり、将来的にキャリアアップをはかるためにはブリティッシュ・コロンビア州が認定する会計士の資格 (Certified General Accountants: CGA) を取得する必要がある。そのため、働きながら地元の大学で開講される夜間の会計学コースに2年間通い、CGAを取得したという。

6-2-3. 仕事への意欲 (上昇志向)

ジェイミーさんが勤務する職場は、バンクーバー市の東に位置するコキットラム市 (City of Coquitlam) にある。自宅のあるリッチモンド市から職場に通勤するのに、バスとスカイトレインを乗り継いで往復3時間の道のりだ。バス停まではウィリアムさんが送り迎えをしているが、それでも通勤にかなりの時間がかかるため、毎朝6時過ぎに家を出て、帰宅するのはだいたい夜の7時半頃である。

筆者が持ち歩いていた地図を見ながら、彼女の会社が位置する場所を教えてくれた。地図上でみると、自宅からコキットラム市のオフィスまでの遠さが明らかである。ジェイミーさんは「遠いでしょ」と言って、いつも通勤のために利用するスカイトレインの話をはじめた。バンクーバーを走るスカイトレインには、バンクーバーの中心街 (ダウンタウン) と南のリッチモンド市を結ぶカナダライン (Canada Line) と、ダウンタウンと東のバーナビー市やサレー市とを結ぶミレニアムライン (Millenium Line) とエキスポライン (Expo Line) がある。このうち、ジェイミーさんが利用するのはエキスポラインである。ジェイミーさんによれば、カナダラインとミレニアム/エキスポラインとでは、利用する人たちが違うという。

「(乗っている) 人が違う。カナダラインは、リッチモンドからバンクーバーのダウンタウンを結ぶラインで、みんなドレスアップしている。なぜなら、ダウンタウンの職場で働く人たちだから。」

しかし、自分が利用するエキスポラインには、そのような服装の人たちは乗ってこないのだと話す。彼女は、その理由を、

「コキットラムは、私の会社のような建設関係の会社や石油関連の会社、製造業、工場などがある、そこで仕事をする人はドレスアップする必要なんてないからね。自分も、いつもこんな感じよ。」

と説明して、その日着ていたジーンズにシャツというカジュアルな格好を指した。それから、「でも、ダウンタウンのオフィスで働くなら、スカートに、シャツに、ジャケットに、ハイヒールを履くわ」と楽しそうに話し、「2つのラインでは、乗っている人が違うってはっきり言えるわ」と断言した。

ここでジェイミーさんが言う「エキスポラインを利用する人たち」には、彼女の会社で働く作業員の男性たちが含まれている。別のとき、ジェイミーさんは彼らについて次のように話した。

「彼らにとってのワーク（“work”）は砂や岩を扱うこと。オフィスでのワークではないわ」

ジェイミーさんは、どのスカイトレインに乗るかによって、利用する人たちの服装が異なることを主張した。このことは、2つのスカイトレインで、利用者の社会的および経済的背景が違うということを示唆している。彼女の説明から読み取れることは、カナダラインを利用してダウンタウンのオフィスへ通勤する人たちはミドルクラス以上の「ホワイトカラー」の職に従事する人たちで、通勤にミレニアム／エキスポラインを利用してコキットラム市など東へ向かう人たちは「ブルーカラー」の職に従事している人たちだということである。これはあくまでも彼女の見解であり、必ずしも正確な区分であるとは限らない。しかし、バンクーバーでは、住宅価格の違いなどを基準に、西は、東よりも社会的・経済的に中・上層の人たちが住むエリアとしてみられている。ジェイミーさんの見方は、そのような西側と東側に対するイメージを反映しているものであるとも考えられる。

ジェイミーさんは、利用するスカイトレインの違いを通して、働く場所の違いが人びとの社会的・経済的背景の違いであると示しながら、同じ場所で働いていても、自分が従事するオフィスでの「ワーク」と、作業員たちが従事する「ワーク」の意味を差異化することで、自らの現在の仕事における社会的・経済的な立ち位置を明らかにしようとした。筆者が彼女に、「もし、

ダウンタウンで働くチャンスがあったら、今の会社は辞めるか？」と尋ねると、「もちろん」と答えた。ジェイミーさんの話からは、彼女が仕事に対し強い上昇志向を持つ女性であることがうかがえる。それでは、彼女にとってキャリア・アップを目指すこと、そして「働くこと」とはどういう意味をもっているのでしょうか。

6-2-4. 働くことの意味

建設関係の会社であるため、バンクーバーが雨期に入る冬から春にかけては工事が滞り、比較的忙しくないが、夏から10月にかけては工事が増え、多忙になるという。忙しい時期は職場で残業をすることや、自宅に仕事を持ち帰ることも珍しくない。筆者がホームステイしている間にも、ジェイミーさんの仕事が長引いて夕食の時間が遅くなることや、深夜までジェイミーさんが仕事に取りかかる姿も多くみられた。

夫であるウィリアムさんは、ジェイミーさんが「働き過ぎである」と心配し、しばしば不満の声を漏らしていた。

「彼女は働き過ぎだ。体に良くない。」

「そんなに仕事をする必要はない。そんなに働かなくて、僕たち2人なら生活できるよ。」

ウィリアムさんは、ジェイミーさんが仕事のせいでなかなか休暇をとれないことへの不満と、体調を心配するあまり、しばしば彼女に「そんなに仕事をする必要はない」と言う。彼は、住宅賃貸から得る収入があれば十分生活していけると話す。彼女は「働きたいし、働かない」と言って、仕事を辞める気はまったくない。ある晩、夕食後にジェイミーさんと2人で話をした際、仕事について次のように語ったことがある。

「働くことが好き。働くことは、私にとってとても大事なことなの。経済的に自立することは重要だわ。保障でもあるわね (“kind of security”)。」

ジェイミーさんは、「働くこと (“working”)」と、経済的に自立することは重要なことであると語った。彼女にとって経済的な自立とは、夫の稼ぎに頼るのではなく、自分で働いて稼ぐことを意味している。

しかし、「保障」とはどういうことを意味しているのだろうか。自分も働くことで、万が一夫の収入がなくなった場合の蓄えを確保しておくという、経済的な保障とも捉えられる。しかし、それだけではないのではないだろうか。筆者には、彼女の仕事に対する上昇志向と、働くこと

を通して経済的に自立を達成しようとする姿勢は、単により良い給料や経歴を獲得することだけが目的ではないように思えた。ジェイミーさんは「働くこと」を通じて、移民先であるカナダの主流社会のなかに、「自分の場」を築き上げていこうとしているのではないだろうか。

「ワーク」という言葉の使われ方に着目して、アメリカ人高齢者が老後の活動をどのように意味づけるかを分析した藤田[1999]は、「仕事ができるということは、その人自身に「自分の場」があることである」とし、次のように述べている。

それは、時間・空間的に身体を置くことができる場であると同時に、社会の中で一個人が意義を見出すことのできる日常生活を送る上での「位置」であると考えられる。[藤田, 1999 : 73]

ジェイミーさんの仕事への姿勢を考える際に、この藤田の考えを援用することができないだろうか。すなわち、移民が移住先で職を得ること、それも正規の安定した職を得るということは、その人自身が、新たな社会のなかで家以外に身を置くことのできる「自分の場」を得ることだと考えられる。教育を受け、専門的技術を備えた移民が、より良い生活を求めて移住し、そのような生活を獲得するために競争するカナダ社会のなかで、「自分の場」を獲得することは簡単なことではない。ジェイミーさんの仕事に対する食欲さや熱心さは、カナダ社会の中に自分の「位置」を得るための努力であり、カナダで生きていくことへの覚悟の表れなのではないかと考える。そして、プロフェッショナルとしてさらなる成功を目指していくのは、そのような「位置」を確立しようとする意味合いがあるのではないだろうか。

6-3. 「チャイニーズであること」と「カナディアンであること」

—中国系移民1世夫婦の日常生活と近所付き合い

本節では、筆者がウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻と生活を共にするなかで見えてきた、夫妻の日常生活と近所付き合いに着目することを通して、自らの民族・文化的背景とのつながりを保ちながら、いかにカナダ市民として異なる文化的背景をもつ人たちとの関係性を築いているかということを描きだす。

6-3-1. 母国の文化・習慣を維持する

家の中での日常生活において、ウィリアムさん夫妻は母国の文化や習慣をかなりの割合で維持していた。たとえば、ウィリアムさん夫妻の普段の会話は広東語である。筆者が加わるときは英語を使って会話をしていた。夫妻と一緒に生活するなかで広東語に興味を持った筆者は、

簡単な広東語の表現をいくつか教わった。それ以来、筆者と夫妻の朝のあいさつは「Good morning」から「ジョーサン」になり、満腹の時は「バーウ」と言うようになった。また、夫妻が日常的に観るのは、広東語チャンネルのニュース番組やバラエティ番組、ドラマである。筆者がいる時は、カナダの公共放送局である CBC (Canadian Broadcasting Corporation) をつけていたが、筆者がどのチャンネルでも良いと言ってからは、3 人である時も広東語チャンネルを見るようになった。

食卓には、香港や広東省など中国南部の料理が並んだ。主食は米あるいは麺である。中国野菜が食卓に並ぶことが多く、なかでも白菜 (Bak Choi) や芥蘭 (Gai Lan) などは頻繁に食した。ほかにも、日本人の筆者には見慣れない料理が食卓に出ることも多く、その度に夫妻が中国南部の料理であるとか、香港で良く食べるなどと説明してくれた。ウィリアムさんが食材の買い出しをするのは、リッチモンド市中心地にある中国系スーパー「Wah Shang Supermarket」や「China World」、「T & T」、またはリッチモンド市のパブリック・マーケットなどである。このパブリック・マーケットは、3 章で取り挙げたグランビル・アイランドのパブリック・マーケットとは異なり、ジェイミーさんが「パブリック・チャイニーズ・マーケット」と称するように、中国色の強いマーケットである。夫妻は母国の食文化を好み、維持しているため、中国の食材や調味料の品ぞろえが良いこれらの店で買い物をし、カナダ・チェーンのスーパーマーケットを利用することはほとんどないとのことだった。一方で、中国産よりもカナダ産や香港産を好み、その理由としてジェイミーさんは「中国産より安全だから」と話した。

また、休日のランチとして飲茶レストランに出かけることもあった。香港からの移民が多いリッチモンド市には、多くの飲茶店がある。そのため、競争率が高く、評判の悪い店はすぐに閉店するのだという。香港出身のジェイミーさんによれば、リッチモンドでは香港とほぼ同じクオリティの飲茶が味わえるとのことである。「餃子であれば〇〇〇の店」「春巻きならあそこ」というように、いろいろな飲茶店を試したなかで、料理ごとにお気に入りの店があるようだった。

2 月の旧正月には、中国南部の伝統料理をテーブルいっぱいにならべた。前日の夜のうちにすべての料理をテーブルにならべ、そのまま年をまたがせることで、幸運を翌年につなぐという意味合いがあるのだという。また、「福」と書かれた赤い袋を飾る風習もあり、旧正月の間はリビングの至るところに赤い袋が飾られていた。

このようにウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻は、プライベートな生活空間では、母国の食文化や習慣を維持しながら生活していた。夫妻宅での生活は、筆者にとって、カナダにいながら、まるで中国文化を経験しているような気持ちにさせるものであった。

6-3-2. 近所付き合い

—「チャイニーズ・スタイル」と「カナディアン・スタイル」

ウィリアムさん夫妻は、しばしば自宅に親戚や友人を招いてパーティーをすることがあった。親戚や中国系の友人たちを招いて開くパーティーでは、中国で頻繁に食される食材を使用し、中国の料理法や味付けで調理された料理がテーブルいっぱいを用意された。また、飲茶レストランや、ほかの中国料理店で食事会をおこなうことも多かった。

一方、日本人の京子さん家族を招く場合や、「白人（“White people”）」の近隣住民を招いてパーティーを開く場合は、中国系の友人たちにふるまうのとは趣の異なる「西洋風（“Western style”）」あるいは「カナダ風（“Canadian style”）」³⁰の料理が用意された。

興味深いのは、中国系の友人たち以外の人たちと開くパーティーで、どのような料理を用意するか（用意するべきか）が、ウィリアムさんにとって悩みの種であることである。たとえば、妻のジェイミーさんが、左隣に住むロン夫妻を自宅に招待してパーティーを開こうと提案したことがあった。ロン夫妻とは、日頃から親交があり、クリスマス・パーティーに招待されるなど、良い隣人関係にある。しかし、ロン夫妻をパーティーに招待することに、ウィリアムさんは乗り気ではなく、「白人（“White people”）」のロン夫妻にどのような料理を用意するかで、かなり気を使っているようだった。

「彼ら（White people）のパーティーといたら、肉だ。こないだロンが開いたパーティーでは、彼がずっとステーキを焼いていただろ？それに、お酒もかなり用意しないとイケないし・・・」

「チャイニーズ・スタイルのパーティーとは違うんだ。チキン（鶏の足や手の部分を使った料理）を用意しても、気味悪がる人もいる」

それならばロン夫妻を飲茶に招待するのはどうかとジェイミーさんが提案すると、「だめ、だめ。彼ら（ロン夫妻）が（飲茶に）行ったことがあるとは思えない。気に入る料理があるかもわからないだろう？」とウィリアムさんは反対したのである。

このように、ウィリアムさんがロン夫妻との付き合いを語るなかで、「自分たち」（チャイニ

³⁰ ウィリアムさん夫妻が「カナダ風」のパーティーで必ず用意するのが、フィンガー・フード（Finger Food）である。これは、生の野菜や果物を一口サイズに切って、皿に盛り合わせたものである。フィンガー・フードは、親戚との集まりや中国系の友人たちとのパーティーでは用意されない。ウィリアムさんは、中国では野菜を生そのまま食べる習慣はないのだと語っていた。日常的な食卓にも、いわゆるサラダが出ることはなく、野菜は炒めるか、蒸すか、煮るなどして必ず熱が通されていた。

ーズ)のやり方と「彼ら」(白人)のやり方が異なることを強調する場面が度々見られた。別のケースでは、ロン夫妻の長女の結婚式のあとに妻ジェイミーさんが、次女には近々結婚する予定はないのかとロンさんに尋ねたことに対し、次のようにウィリアムさんが注意する場面があった。

「だめだよ、ジェイミー。そういうことは本当は直接きくもんじゃないよ。「次は〇〇〇(ロン夫妻の次女の名)の番だね」と冗談で言うなら良いけど、「結婚の予定があるの? (“Does she have any plan?”)」なんてきくのは、プライバシーの問題だ。そんなふうにきくのは、中国のやり方 (“Chinese way”) だよ」

ウィリアムさんは、前述したような中国系住宅オーナーたちとの「中国語」を介した、「中国系」であることに基づいて展開されるコミュニティに生きる一方で、京子さん家族やロン夫妻との付き合いのように、英語を介したビジネスや近所付き合いを通して、人種やエスニシティの同一性を前提としない「カナダ市民」としてのつながりや関係性を構築していた。「中国系」としてのつながりを生きる現実も、「カナダ市民」としてのつながりを生きる現実も、ウィリアムさんの日々の生活を支える重要な関係性なのだと感じられた。そして、相手のバックグラウンドに応じて、使用する言語を巧みに使い分け、パーティーで用意する料理を注意深く選ぶ姿からは、ウィリアムさんのなかでこの二つの現実が「巧みに棲み分けられている」[河上 2014: 80]と理解することができる。これは、ウィリアムさんが、バンクーバーという多言語・多民族な環境のなかで生きる過程で身に付けた、個人の処世術とみなすこともできるのではないだろうか。

6-3-3. 「私たちは彼らとは違う (“We are different from them.”)」

ウィリアムさんおよびジェイミーさんが近隣住民との付き合いを大切にしようとしていることに関連して、興味深い出来事があった。それは、クリスマス・シーズンのある日、リッチモンド市内のクリスマス・イルミネーションを見に行くため、2人が筆者をドライブに連れてってくれたときのことである。クリスマス・シーズンになると、家の外観や前庭にクリスマス用の飾りつけを施している家庭がよく見られる。ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻も、家の外観に電飾を施して、夜になると、カラフルな光を点灯させていた。毎年手の込んだ飾りつけを行う家のことは市内でも良く知られ、夜になると、その家の飾りつけを見るために人びとが集まって来るほどである。近所のいくつかの住宅エリアを見回るなかで、装飾をしていない家を見たときの2人の反応は興味深かった。2人はクリスマスの装飾をしていない家を見ると、

落胆したように次のように語った。

「(このエリアは) 以前はもっとデコレーションしている家が多かったのに。残念だわ。きっと最近の移民 (“new immigrant”) ね。新しい大きな家は、きっと最近の移民が住んでいるわ。彼らにとってはローカルの文化なんてどうでもいいのよ。」(ジェイミーさん)

筆者にとっては、家にクリスマスの装飾をしないということが、なぜ「最近の移民」につながるのかが不思議に思えた。しかし、ジェイミーさんは、家に装飾を施していない家には、最近来た移民が住んでいると考え、そのような移民をローカルの文化に馴染もうとしない人たちとして捉えたのである。

クリスマスの飾りつけをめぐるジェイミーさんとウィリアムさんの言動からみえてくるのは、2人がクリスマスの飾りつけを行うことを、カナダの文化、「ローカル」の文化であると捉えていることである。さらに、飾りつけを行うかどうかを、移民がカナダ社会に馴染もうとすることを示すものさしとして捉えているということである。つまり、2人にとっては、近隣住民が家の飾りつけを行い、同じ生活空間を彩るなかで、飾りつけを行わないで近隣 (“Neighbour”) に同調しないことは、カナダ社会・文化に馴染もうとしない移民であることを意味するのである。クリスマスの飾りつけを行うには、装飾品を購入する費用や、明かりをつけるため電気代もかかる。そのため、比較的経済的に余裕がなければ家計の負担になるし、また一人暮らしの高齢者が自分で家の装飾をすることは難しいと想像できる。したがって、必ずしも、飾りつけを行わない家に最近の移民が住んでいるとは限らないように思える。筆者がここで注目するのは、ジェイミーさんとウィリアムさんのクリスマスの飾りつけに対する見方を通して、彼らがいかに「カナダ社会に馴染もうとしない移民」と周囲からみられることを避けようとし、クリスマスを祝うというカナダ文化に呼応することで「ローカル」の一員として自らを位置づけているかということである。

ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻は、自分たちを「最近の移民」から区別して語っていた。その際に夫妻が指す「最近の移民」とは、中国本土出身の移民で、富裕な移民のことを意味していた。たとえば夫妻は、近年の富裕な移民の多くが、中国本土出身者であると説明したうえで、香港や広東省にルーツをもつ自分たちは彼らとは「違う (“different”）」ことを強調し、次のように語る。

「私たちはチャイニーズよ。ただ、中国本土には属していないってだけ (“Actually, we are Chinese. But we just don't belong to Mainland China.”)」(ジェイミーさん)

「そう。中国本土には属していない。それに、僕はカナダ人だ。（“We are Canadian.”）」
（ウィリアムさん）

ウィリアムさんとジェイミーさんが、このように、中国本土出身の「最近の移民」たちと自分たちとは「違う」ということを強調する背景には、帰属意識の違いだけでなく、バンクーバー社会にある中国系移民に対するネガティブなイメージが関係しているのではないかと考える。

筆者がバンクーバーに滞在するなかで、中国系移民に対するネガティブな語りをしばしば耳にした。たとえば、バンクーバーで知り合った日本人女性による「ベンツや BMW に乗っているのは、だいたいチャイニーズ」という語りや、ブランド品で着飾った中国系の女性たちに対し「きらきらした奥様方」といった語りをしばしば耳にした。これらの語りから、BMW やベンツ、ブランド品といった経済力を示す象徴が、中国系移民と結びつけられていることがわかり、「お金持ちのチャイニーズ」といったイメージが浸透していることがうかがえた。

このようなイメージについて、Man[2004]は、新聞記事などのメディアによって、香港出身のビジネス移民の裕福さが取り上げられることにより、中国系移民に対する偏ったイメージが形成されたと指摘している³¹[Man 2004 : 136]。

ウィリアムさんとジェイミーさんが、「最近の移民」と中国本土出身の富裕な移民とを結び付け、そのような移民と自分たちとを区別するのは、バンクーバー社会にある、このような中国系移民に対する見方と無関係ではないと思われる。つまり、彼らは、現地で否定的に語られるような「お金持ちのチャイニーズ」と、隣近所に暮らす白人の「カナダ人」住民と親しい交流があり、現地の文化や習慣に適應できる自分たちは違うのだという意識をもっている。自分たちのもつ「チャイニーズ」としての文化的背景を認めながらも、「ローカル」「カナダ人」として自らを位置付けることで、しばしば否定的に語られ、現地住民から良く思われていない「チャイニーズ」と自分たちとを区別しているのだと考える。

³¹ Man[1995]によれば、1980年代後半以降、香港や中国本土から多くの移民がカナダへと押し寄せた結果、中国系移民への関心が高まり、メディアの注目を集めた。しかし、メディアの多くが、そのような近年の中国系移民を「富裕なビジネス移民の増大」という形で取り上げたことにより、“Gucci Chinese”という呼び名や、1970年代に特にベトナムからの難民を総称する「ポートピーポー」に対して、「ヨットピーポー」などと呼ばれるようになったという。その結果、中国系移民はメルセデス・ベンツを乗り回し、「モンスター・ハウス」（大きな家のこと）に住み、投資好きで、不動産開発に貪欲であるといったイメージが築き上げられていったとされる。実際には、そのような移民は一部の限られたエリート層であるにもかかわらず、香港からの移民が特に集中したバンクーバーでは、「富裕な香港人移民がバンクーバーを侵略している」とか、富裕な中国系移民がバンクーバーの住宅価格の高騰を招き、カナダ市民が不利益を被っているとする否定的なイメージが広まったとされる[Man 1995 : 303-304]。

本節では、ウィリアムさんとジェイミーさんの日常生活や近所付き合いのさまざまな場面について見てきた。彼らが「私たちは彼らとは違う（“We are different from them.”）」と語るときの「彼ら」とは、現地社会で否定的イメージを含んで語られる「チャイニーズ」であり、「カナダ文化に馴染もうとしない移民」であることが見えてきた。自分たちをそのような「彼ら」と差異化する過程は、「ローカル」や「カナディアン」の一員として自らをバンクーバー社会のなかに位置づける過程と同時に進行していた。夫妻は、現地社会に中国系移民に対する偏見・差別的な見方があることを自覚しているからこそ、そのような「チャイニーズ」として一くくりに見られることを避けようとするのだと考える。

また、中国系移民にかぎらず、エスニック・マイノリティという存在が、その言葉が表すように社会的にも文化的にもマイノリティであるということ、そのようなエスニック・マイノリティが自分のエスニックな部分を強調しすぎれば、社会的に「差別」「排除」の対象となりやすい立ち位置にあるということ認識している。だからこそ、自分を「誰」と差異化し、自分が「誰」であるかということに意識的であり、相手が「誰」であるかによって、微妙に自らの立ち位置を変えながら、相手との距離感をはかっているのだと考える。

6-4. 多文化的経験と差別に対する敏感さ

—カナダ人男性のライフヒストリー

前節までは、ある中国系移民夫妻の日常生活、仕事、交友関係に着目し、彼らが「チャイニーズ」としてのつながりを保ちつつ、「カナディアン」として、異なる民族・文化的背景をもつ人たちとの関係性を築き上げながら生活する様子を描きだした。夫妻の事例は、多文化社会バンクーバーにおいて、エスニック・マイノリティがどのような生活を送っているのかという事例として取り挙げた。本節では、視点をエスニック・マイノリティから、カナダ社会の「マジョリティ」（主流集団）としてみなされるカナダ生まれのイギリス系の白人男性デイブさん（インタビュー当時 77 歳）に移し、主に彼の仕事に着目することを通して、異なる文化的背景をもつ人たちとどのようにかかわりながら生活を送っているかということを描きだす。

6-4-1. バンクーバーへ

1936年にカナダ東部に位置するオンタリオ州の小さな町で生まれたデイブさんは、同州の小学校で教師として働き、定年退職後に現在の妻ハナエさん（70歳代後半）と結婚した。デイブさんにとってハナエさんとの結婚は再婚である。前妻との間には3人の子どもをもうけ、離婚後は男手ひとつで子どもたちを育てた。子どもたちはすでに結婚して独立しており、孫たちもいるとのことである。

再婚を機にハナエさんが居住するバンクーバーへと移り住んだ。ハナエさんはブリティッシュ・コロンビア州（BC州）出身の日系カナダ人2世で、定年退職以前の職業はデイブさんと同じく小学校の教師であった。オンタリオ州とBC州という地理的に離れた環境でどのように知り合ったのかと尋ねると、「ペンパル」（文通）がきっかけだという。ある日、デイブさんがラジオを聞いていると、BC州在住で教師をしている女性がペンパル相手を募集しているという投書が流れた。興味を持ったデイブさんがその女性に手紙を出し文通が始まった。その女性が現在の妻ハナエさんであると、デイブさんはうれしそうに2人の馴れ初めを語ってくれた。結婚して以来17年間、夫妻はバンクーバー郊外のニュー・ウェストミンスター市（New Westminster）で暮らしている。

バンクーバーを初めて訪れたときのことを尋ねてみると、

「東洋の顔立ち（“oriental faces”）をした人たちがたくさんいて驚いたよ。」

と語った。彼が育ったオンタリオ州の町では、昔はそのような“oriental faces”を見ることはほとんどなく、「白人（“White people”）」「ワスプ（“WASP”）」しかいなかったと話した。母親はスコットランド系移民で、幼少期は姉とともにアングリカン教会に通っていた。デイブさんが子どもの頃、母親はシングル・マザーで、農場で働きながら家では縫い物をしてデイブさんと姉を養ったという。母親はいつも忙しくしていて、デイブさんもよく手伝いをしたと語った。

退職後の趣味として、デイブさんは独学で切り紙を始めた。以前、日本の本を扱う本屋に立ち寄った際、壁に飾られていた切り紙の作品に魅せられたことがきっかけだと語る。退職して時間ができたら切り紙をしてみたいと考えていたという。

15年前からは、パブリック・マーケットで「クラフト・デイヴェンダー（Craft Dayvendor）」（以後、ヴェンダーあるいはクラフターと表記する）として自身で作った切り紙のカードを販売している。デイ・ヴェンダーとは、マーケット内で、日単位で出店を出して商売をする人たちのことである。パブリック・マーケットには、食品を扱う店の他に、クラフト（手工芸品）を販売するヴェンダーたちがいて、それぞれ自分の作品に値を付け、マーケット内の決められたスペースで販売している。販売するものは既製品ではない、ヴェンダーの手作りの作品であることが決まりとされている。デイブさんが作るのは、ポップ・アップ・カード（Pop-up cards）というもので、一枚の紙を切り折りし、カードを開くと絵や文字が飛び出すしかけのカードである。マーケット内の自分の持ち場のテーブル上に作品を並べて販売しながら、実際にその場で作品を作ること、興味を持って立ち止まるお客さんたちと会話する機会も増えるので良い

とのことだった。

筆者がデイブさんと知り合った場所も、このマーケットである。現地滞在中に友人とマーケットを訪れた際、デイブさんのテーブル上に並べられたクリスマス・カードに惹かれて、筆者が声をかけたことがきっかけである。筆者が日本から来たことを話すと、自身の妻も日本人（“Japanese”）であると言って写真を見せてくれた。話していくうちに、筆者の出身地が、妻ハナエさんのルーツと同じ県であることが判明した。それ以来デイブさんとの交流が始まり、マーケットで彼にカード作りを教わりながら、デイブさんのライフヒストリーや、マーケットでの仕事について話をうかがった。

6-4-2. 客の文化的背景を考慮したビジネス

デイブさんがヴェンダーとなった 15 年前と現在を比べて、マーケットに何か変化があったかどうか尋ねてみた。彼によれば、以前からあった「ビジネス」（食べ物屋）がマーケットを去っては新たなビジネスが加わったり、ビジネス自体は変わらないがオーナーが変わるなどして、多少の変化はあったと話した。また、ヴェンダーについては、2 年ごとにオーディションが行われて入れ替わりがあるため、その度に新規のヴェンダーとして加わる「新しい人たち（“new people”）」と出会うとのことだった。

このようなマーケット内のビジネスや働き手の変化のほかに、訪れる人たちのバックグラウンドにも変化が見られると語る。マーケットを含むグランビル・アイランドは、バンクーバー観光の名所として知られ、さまざまな国・地域から毎年多くの観光客が訪れる観光地である。ヴェンダーたちは、そのような多様な民族・文化的背景をもつ人々を相手に商売をしている。デイブさんは 15 年前と比べてアジア地域からの観光客が増えたと語り、最近では中国や韓国からの観光客を多く見かけると話した。

「以前は日本人の客がたくさん来ていた。でもこの頃は日本人は少ないね。韓国系や中国系の観光客が増えたと思う。」

なかでも中国からの観光客は多いと話す。中国とバンクーバーを結ぶフライト便数を挙げ、北京-バンクーバー間の直行便だけでも毎日 4 便も運航されているのだと語った。

このような、観光客の民族・文化的背景の変化は、デイブさんの商売にいくらか影響を与えていた。たとえば、デイブさんは中国からの観光客が増えたと話すなかで、次のように話した。

「中国人観光客が多いのだから、それ用のカードも考えようと思うんだ。中国人はめったに

カードを買わないけどね。そもそも、彼らは白を好まないし。」

デイブさんの作るカードは白を基調としている。しかし、中国の文化では、葬式で白い服を着るなど、白は不幸な出来事を連想させる色として敬遠されるのだと語り、そのことが中国人観光客に自分のカードが好まれない理由の一つであると考えたようだった。中国では白は不吉な色と考えられていることや、反対に赤は縁起の良い色とされているということを、中国系の友人に聞いたのだと語った。このような友人の意見をふまえて、デイブさんは赤いカードを作ろうと思うと筆者に話した。それ以来彼は、龍や干支をモチーフとする赤いカードを数枚用意しては、しばしばテーブルに並べるようになったのである。

このようにデイブさんは、中国人が好むと考える色や「中国的」なモチーフを商品に取り入れることで、増加する中国人観光客を自分の顧客として取り込もうとした。デイブさんの行動からは、マーケットを訪れる人びとの文化的背景を考慮して、商売をさらに発展させようとする姿がうかがえる。

6-4-3. 相手のバックグラウンドの尋ね方

客の文化的背景を考慮するという姿勢は、デイブさんが客と会話を交わすときにも表れていた。このことを、彼が客とのやり取りの中で頻繁に使うフレーズに着目することを通して見ていこう。

ヴェンダーたちは、客と会話を交わすことが多い。デイブさんもその一人で、カードに興味を示し、立ち止まって眺めていく人たちに積極的に声をかけていた。

「どうぞ、手にとって見てみて。触っても問題ないよ。（“Please pick up and take a look. These are touchable.”）」

このように声をかけて会話のきっかけを作るが、その後にデイブさんがよく聞く質問は、

「ぼくに会うために、どこから来たの？（“Where have you come from to see me?”）」

である。筆者はデイブさんが接客する様子を間近で見ると、彼がこのような言い回しで、相手がどこから来たのかを尋ねることに興味を抱いていた。デイブさんが客の出身地を尋ねたいのは明らかであるが、なぜもっとシンプルに「Where are you from?」と尋ねないのだろうかと疑問にも思っていた。明るく少々おどけた調子で尋ねる様子を見て、このように回りくど

い聞き方をするのは、場を和ますためのデイブさんなりの工夫だろうと考えていた。
ある時、この疑問をデイブさんにぶつけてみた。すると彼は、次のように答えた。

「“Where are you from?” と聞きたいときは、もっと柔らかく (“soft”)、“Where have you come from to see me?” と聞くようにしているんだ。」

デイブさんの答えからは、相手の出身地、ひいてはその人の文化的背景を知りたいのだが、“Where are you from?” と直接的に尋ねることを避けようとする態度がうかがえる。そして、そのような直接的な聞き方よりも、“Where have you come from to see me?” と明るい調子で聞く方が、物腰の柔らかい聞き方であると考え、客に良い印象を与えると考えていることがわかる。

また、デイブさんが客の出身地や文化的背景を知ろうとする時の聞き方で、興味深いものが他にもある。たとえば、相手の見た目から、中国人や日本人だろうと推測する時、それを確かめようとして彼は “Are you a Chinese boy?” とか “Are you a Japanese girl / lady?” という聞き方をする。筆者が、“Are you Chinese?” とか “Are you Japanese?” という風には尋ねないのかと聞くと、

「(そのように聞くのは) 失礼 (“rude”) な感じがする。だから気をつけている。」

と彼は答えた。それに対して筆者が、「確かに、“Are you a Chinese boy?” とか “Are you a Japanese girl?” と聞く方が、きつくない (“not strong”) 感じがする」と話すと、デイブさんは「そう努めているんだけどね (“I’m trying to be.”)」と話した。

このようなデイブさんの言動や語りを通して、彼が相手の文化的背景を知ろうとするときの聞き方に、かなり注意を払っている様子が読み取れる。相手のバックグラウンドを尋ねる上で、直接的な表現を避けようと努め、より “soft” で、かつ “rude” でないやり方で聞きだそうとするのである。言い換えれば、デイブさんにとって、その人の民族的・文化的背景を直接的に尋ねることは、「威圧的」(not soft, strong) で、不作法 (rude) なことであり、相手の気分を害する危険性があることと捉えていることがわかる。

このことは、デイブさんが長年ヴェンダーとして、民族・文化的に多様な人たちと接するなかで身に付けた接客スキルであるとも考えられる。しかし、このように彼が相手の民族・文化的背景の尋ね方に注意を払うのは、彼自身の背景—白人であること—も関係しているのではないかと考える。デイブさんは、カナダ社会の「マジョリティ」とされるイギリス系の「白人」

カナダ人であり、外見的な特徴から見れば「カナダ人らしさ」を最も備えた人物であると考えられる。自らがそのようなマジョリティの一員であること、マイノリティ集団からもそのように見られていることを自覚しているために、マイノリティとの接し方に注意を払うのだと考える。つまり、白人というカナダ社会においてマジョリティの位置にあるがゆえに、マイノリティ集団との関係性のなかで、かかわり方次第では自らが意図していなくとも相手から「威圧的」とか「差別」であるにとられてしまう可能性があるということを認識しているのだと考える。マジョリティの一員であるからこそ、相手から「威圧的」だとか「差別」だと捉えられないよう、自らの言動に意識的・無意識的に敏感になっているのではないかと考える。

小結

本章では、多文化社会において、人びとがどのように異なる文化的背景をもつ人びととかがわりながら生活しているのかという視点から、バンクーバーで暮らす3人の生活や仕事、交友関係に着目した。

中国系移民1世のウィリアムさんは、自らのエスニック・バックグラウンドと広東語および標準中国語を活用して、非バンクーバー在住者の中国系住宅オーナーたちと交友関係を築き、ビジネスを展開していた。一方で、住宅の借り手となるバンクーバー在住者は、多様な文化的背景をもつ人びとであり、そのような人びとは英語を介してコミュニケーションをとり、エスニック・バックグラウンドに由来しない人間関係を形成していた。

ウィリアムさんの妻であるジェイミーさんは、香港とカナダを定期的に行き来していた。仕事に対する姿勢や語りからは、ジェイミーさんの上昇志向の強さがうかがえた。仕事を通じて経済的に自立を達成しようとする姿からは、移民先の新しい社会で生きていくことへの覚悟が感じられた。ウィリアムさんに比べて移住年数の短いジェイミーさんは、キャリア・アップを目指して働くことを通して、カナダ社会のなかに「自分の場」を築き、根を張ろうとする過程にあるのではないかと考える。

ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻は、自らの民族的背景を「チャイニーズ」と語る一方で、中国本土出身の「最近の移民」と自分たちは違うのだと強調していた。その背景には、バンクーバーで、しばしば「お金持ちのチャイニーズ」というように否定的に見られる中国系移民と自らを区別する意味合いがあると考えられた。そのような「最近の移民」と自分たちは違うのだと語る際、自らを「ローカル」や「カナディアン」として位置づけて語る様子も見られた。

ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻、とくにウィリアムさんの言動からは、相手のバックグラウンドによって、エスニックな部分を出したり、ときには抑えたりしながら、相手とうま

く付き合っけいこうとする姿がうかがえた。しかし、そのように、異なる文化的背景をもつ人たちと適度な距離をはかりながらうまく付き合っけいこうするのは、エスニック・マイノリティ側だけのことではないことを、カナダ人男性デイブさんの語りや言動を通して示した。デイブさんが仕事において客と接する様子からは、相手にできるだけ“soft”であろうとし、「威圧的」と捉えられないようにと注意を払う姿が見えてきた。それは、「白人」というカナダ社会において中心的位置にあるがゆえに、とりわけマイノリティとの関係性のなかで、かかわり方次第では自らが意図していなくとも相手から「威圧的」とか「差別」であると捉えられてしまう可能性があることを認識しているからではないかと考えた。

本章で取り挙げた人びとの生き方を通して、何が見えてきただろうか。筆者が出会った人たちは、自らの「多様性」を極端に強調するわけでも、また完全に相手に同調しようとしているわけでもなかった。「多様性」と「包摂」という相反するベクトルの間で揺れ動きながら、差異を強調しすぎて自分自身が差別の標的とならないように、あるいは異なる文化的背景をもつ「他者」を刺激しすぎないように、慎重に発言し、行動する姿がうかがえた。そのような姿を一言で表現するならば、「気を遣っている」と言うことができるかもしれない。しかし、「気を遣う」ことの背景にあるのは、相手の機嫌ばかりをうかがうというようなネガティブな意味合いというよりも、自分の心地よい居場所を築きたいとする気持ちや、相手と適度な距離をとりながら良い関係を築きたいとする前向きな意思なのではないかと筆者は考える。

終章

本論文では、多文化社会バンクーバーにおける「多様性と包摂」のあり方がいかなるものかということ、4つの異なる公共空間を事例として、それぞれの場で多様性がどのように表象されるのかという視点から検討してきた。これらの事例を通して、それぞれの状況の違いによって、「多様性を認めること」と「包摂すること」のバランスの取り方が変化するというを示した。本章では、まず、それぞれの場の状況がどのように異なるか、そして、その状況の違いによって、「多様性と包摂」のあり様がどのように異なるのかということ整理してみたい。

2章と3章では、文化的多様性がありながらも、ある空間において、特定の文化が表象される理由を、リッチモンド市中心地とパブリック・マーケットの2つの事例をもとに検討した。

リッチモンド市の商業施設が集まる中心地が「ニュー・チャイナタウン」と称されるのは、同市における中国系住民の多さや中国語を表記した看板が目立つことが関係していた。リッチモンド市の事例を通して、多文化的な状況があるなかでも、中国語表記の多さが目立つことにより、中国文化や中国系の人びとと同市が結びつけて認知されることを明らかにした。しかし、数の多さから中国文化がとりわけ表象されることにより、住民の民族・文化的多様性が見えづらくなっている側面もあった。また、中国語の看板をめぐる論争からは、一部の人たちからすれば、数の多さによって際立つ中国文化が「問題」として映ったり、移民の包摂の妨げとして捉えられていることも見えてきた。このような状況がありながらも、商店の看板にどの言語を表記するかはオーナーの自由であるという商業的観点から、特定の言語を看板に表記することが実質的に容認されている様子が見てとれた。また、「ここはカナダであるから、どのような言語のサインを出しても良いんだ」という語りからは、多文化主義のもと、多様な文化が尊重されるべきであるとする論理が働いていることがうかがえた。

このように、リッチモンド市中心地において店の看板に中国語が表記されることは、特定の文化的背景をもつ人たちを顧客対象として取り込む店側の商業的戦略として、実質的に容認されていた。しかし、そのように、特定の言語を用いて、特定の文化的性質をアピールすることが、どのような空間でも認められているわけではないということ、パブリック・マーケットの事例を通して示した。パブリック・マーケットには、さまざまな国の料理や食材を扱う店が並び、多様な文化的背景をもつ人たちが訪れる観光地である。観光地としてより多くの人を集めるために、バラエティに富んだ食を用意し、食文化の多様性が「カナダらしさ」として表象されていた。このように食を通じて多文化性が表象される一方で、標識や注意書きに表記される言語は英語と仏語であった。英語圏のバンクーバーでは、仏語話者は少数派であるため、数的に仏語の需要が多いとは考えにくい。それにもかかわらず、このマーケットで仏語が表記さ

れる理由は、このマーケットがカナダ政府機関によって運営・管理される場であり、英語と仏語を公用語に定める国の政策が反映されているためだと考えられた。リッチモンド市中心地において中国語の看板が、中国系住民を惹きつけるために掲げられるのとは異なり、このマーケットで仏語が表記されるのは、マーケットが「パブリック」な場であるということ象徴的に表すためであると考えられる。マーケットで働くヴェンダーの「ここはカナダであるから、サインは英語と仏語だけであるべき」という語りからは、政府機関の管理する場である以上、公用語である英語と仏語のサインのみが表記されるべきであるとする考え方がうかがえる。このマーケットには、リッチモンド市中心地で中国語のサインが容認された論理とは対照的な論理が働いていることがわかる。

リッチモンド市中心地とパブリック・マーケットにみられる言語の表象のされ方の違いは、「多様性を認めること」と「包摂すること」のどちらにより力点を置いているかの違いであると見ることできる。前者の場合は、多文化的状況があるなかで、多様な文化的背景をもつ人たちがそれぞれの文化を強調することは、商業的観点から許容されるとする論理であった。つまり、「多様性を認めること」により重きが置かれていると捉えられる。一方、後者の場合は、「パブリック」でなくてはならないために、多文化的状況があっても、公用語を尊重するべきであるとする論理が働き、「包摂すること」が重視されていると捉えられる。この2つの事例は、「多様性を認めること」と「包摂すること」のバランスをどのようにとるのかという点で、対極的なケースであると考えられる。

パブリック・マーケットは、「パブリック」であるがゆえに、「誰でも利用できる」という公共性、平等性をより強く打ち出す必要がある場所だと考えられる。このような公共性がより強調される空間がある一方で、移民によって構成されるバンクーバーでは、特定の民族的背景をもつ人たちに利用してもらうことを目的として作られた、特殊性、エスニック性がより強調される空間もある。そのような空間の事例として、日系エスニック組織「隣組」に注目すると、日系組織としてのエスニックな側面と、公的な資金援助によって運営されるという公共的側面との間でジレンマを抱えながら活動する組織の姿が見えてきた(4章)。隣組は、バンクーバーに暮らす主として日系人・日本人高齢者を対象に福祉サービスを提供するボランティア組織であり、もともとは、戦前の日系移民1世の高齢者をサポートする目的で設立された組織であるが、現在の隣組の利用者の多くは戦後に移住した日本人移住者であり、利用者のバックグラウンドやニーズも多様化していることがわかった。多様な層の人びと、多様なニーズに対応するため、バックグラウンドの異なるスタッフが、相互補完的に組織を運営していた。

しかし、ここで多様なニーズを持つ人として想定されているのは、主に日本語を理解し、日本にルーツを持つ人たちであり、そのような背景を持たない人たちにとっては隣組は近寄り

たい場となっていることも見えてきた。韓国系の女性が隣組のサービスに関心を持ち立ち寄った際、「日本人のためだけの組織ではないが、日本語ができないと難しい」という形で暗に参加を断る姿からは、隣組が特定の民族・文化的背景をもつ人びとを尊重した場であるがゆえに、その文化に属さない人びとにとっては閉鎖的な場になり得ることがうかがえる。

隣組における韓国系の女性をめぐる出来事は、隣組の「エスニック組織」としての側面と、高齢者福祉という公共サービスに携わり、公的資金が流れる公共的側面との間で起きたコンフリクトであると捉えられる。人種や民族の違いで参加に制約を設けることが「差別や偏見」と捉えられる多文化主義の社会では、日本にルーツを持つ人のための組織でありたくても、日本人しか参加できないと言うことはできないと考えられる。しかし、多様な文化的背景をもつ人たちを受け入れれば、そもそも対象とする日本人利用者へのニーズに十分に応じることができなくなる可能性もある。韓国系の女性をめぐる出来事は、エスニック組織の抱えるこのようなジレンマが浮き彫りになった出来事として捉えられるのではないだろうか。

また、「日本人のためだけの組織ではないが、日本語ができないと難しい」という表現からは、相手に「差別」や「排除」として捉えられないように注意深く断ろうとする姿がうかがえる。多文化主義の社会では、民族・文化的な違いを理由に参加を断ることは「人種差別」として非難されかねない。そのため、「日本語ができないと難しい」と表現することで、相手に自ら参加をあきらめてもらうような言い方をしたのではないかと考えられる。この出来事から見えてくるのは、「差別」や「偏見」の境目があいまいなものだということである。「日本人のためだけの組織ではないが、日本語ができないと難しい」という言い方は、たとえ言った本人に差別の意図がなかったとしても、相手によっては差別として捉えられかねない微妙なものである。つまり、それを差別と捉えるかどうかは人の見方によって異なり、どこからが差別で、どこまでが差別じゃないかという基準も、人やその場の状況によって変化するということである。

このことを物語るのが、5章で取り挙げた小学校のクラス写真の事例である。この場合は、担任の教師やカメラマンに差別の意図がなくても、車イスを利用する少年の母親が「差別」として捉えたために問題となった。筆者からすれば、そんなにとりたてて取り上げる程のことではないと思うようなひな壇と車イスとの距離が、相手にとっては大きな距離であり、「差別」となる。このような見解の違いは、筆者の差別に対する基準と、この少年の母親の差別に対する基準が異なることを意味しているのである。

4章までは、主に民族・文化的多様性に着目し、多様な文化を認めることと、その多様性を包摂することとが、どのように折り合いが付けられるのか、またどのような場合にコンフリクトが起きているのかということに注目した。5章では、身体的に多様な差異をもつ人びとを包摂するあり方について、2つの出来事をもとに検討した。バスに乗る際に車イス利用者を優先

的に乗せる「暗黙のルール」は、多様な人びとがいるなかで、明らかに「強者」と「弱者」が存在し、そのままでは「弱者」が不利益を被る場合、「弱者」を優先することで、「強者」と同等の位置にまで押し上げようとするケースとして見ることができる。すなわち、優先順位をつけることで、健常者と障害者の間にある格差を調整し、身体的差異をもつ人びとの包摂を成り立たせようとする事例であると考えられる。

このように、障害者を優先的に乗せることで、バスへの物理的アクセスを保障しようとするルールがある一方で、障害者割引制度に着目すると、割引を利用できるのはカナダ市民および永住者に限られていた。このルール上では、人びとは健常者か障害者かという区別よりも、カナダ市民／永住者かそうでないかという基準によって線引きされるのである。

障害のある人をいかに包摂するか＝排除しないかという観点からみた時、バスの利用をめぐる事例と異なる方法がとられていたのがクラス写真の事例であった。バスの優先ルールの事例では、障害者と健常者をあらかじめ区別して優先順位をつけることで、バス利用における障害者と健常者の平等なアクセスを達成しようとする方法がとられていた。しかし、クラス写真の事例からわかることは、この場合は、区別すること自体が「差別」として捉えられているということである。違いのある人を他の人たちから区別することは、この場合は許容されない。クラス写真の事例では、障害者と健常者を区別するのではなく、両者の間に違いがあっても違わないようにする、「みんな一緒」というやり方で障害者を包摂しようとしていることを明らかにした。

「多様性」と「包摂」の狭間で

以上のことから、「多様性を認めること」と「包摂すること」が、いつでも同じようにバランスがとられているわけではないということがわかる。また、「多様性」と「包摂」という相反するベクトルの間で、両者を同時に成り立たせようとする際に、それぞれの場でジレンマが生み出されていることがわかる。

では、このような「多様性」と「包摂」という互いに反するベクトルの間で、人びとはどのように異なる文化的背景をもつ人たちとかがわりながら、生活を送っていただけるか。このことを、現地に暮らす3人のライフヒストリーを事例として描きだした。

中国系移民1世のウィリアムさんの事例からは、中国語を駆使して中国系としてのつながりを保ち、活用しながらビジネスを展開する一方で、エスニックな背景を異にする人たちとの関係性においては、自らの中国系としてのバックグラウンドを抑え、カナダ市民としてうまく付き合っていこうとする姿が垣間見えた。ウィリアムさんがそのようなエスニックな背景を活かしてビジネスを展開できるのは、カナダ市民としての安定したステータスがウィリアムさんの

社会的な立場を保証し、バンクーバーで生活する人たちと信頼関係を築く上で重要な要素となっていたからでもあった。ウィリアムさんは、自身のエスニックな背景を活用することで築かれるコミュニティと、エスニックな背景を強調せずにかかわるコミュニティへの身の置き方を巧みに使い分けながら、どちらのコミュニティとも適度な関係を保っているのではないかと感じられた。

同じく中国系移民1世であっても、ジェイミーさんのバンクーバー社会での歩みはウィリアムさんとは異なるものであった。ジェイミーさんは、母国で教育を受け、会計士としての専門的スキルや仕事経験を積んだ後、ウィリアムさんとの結婚を機に移住した。ジェイミーさんの仕事に対する貪欲さや熱心さから見てきたのは、移民先であるカナダの主流社会のなかに、働くことを通して「自分の場」を築き上げていこうとする姿であった。それは、彼女がカナダ社会で生きていくことの覚悟の表れとして筆者の目に印象的に映った。

ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻は、家では母国の文化や習慣を維持し、エスニックなつながりを保ちながら生活していた。その一方で、カナダ社会にある中国系移民へのネガティブなイメージを認識し、周囲から「カナダ社会に馴染もうとしない移民」と見られることを避けようとする姿もうかがえた。多様な文化を認めるといっても、カナダで生きていくためには、しかも社会から差別や排除の対象とされずに生きていくためには、自文化を強調してばかりでは「あの人は違う」と煙たがられかねない。自分の母国の文化との「つながり」を保ちながら、ホスト社会で排除されないよう、「居場所」を確保していく。自分の心地よい「居場所」を築くためには、必死の努力と覚悟がいるし、競争のなかで自らつかみとっていくしかない。ウィリアムさん・ジェイミーさん夫妻は心地よい「居場所」を作るために、カナダ人になることを選択したのではないだろうか。夫妻の生き方を通して、「チャイニーズ」と「カナディアン」の間を揺れ動きながら、多文化社会のなかで逞しく生きるエスニック・マイノリティの姿を描きだすことを試みた。

一方、カナダ生まれの白人男性デイブさんの仕事に着目することを通して、多様な文化的背景をもつ人びとと接するなかで、相手の文化的背景を尋ねる際に注意を払う姿が見えてきた。相手にできるだけ“soft”に対応しようと気を遣うのは、「白人」というカナダ社会においてマジョリティと見なされる位置にあるがゆえに、とりわけマイノリティとの関係性のなかで、かわり方次第では自らが意図していなくとも相手から「威圧的」とか「差別」であると捉えられてしまう可能性があることを認識しているからではないかと考えた。多文化社会のなかで、揺れ動きながら生きているのは、マイノリティの側だけではないのだということを、デイブさんのライフヒストリーを通して描きだした。

以上のことをふまえて、本研究の序章で示した次の2つの問題について考えてみたい。

- ① 多様な民族的・文化的・身体的差異をもつ人びとを、どのように包摂しているのだろうか。
- ② 「多様性を認めること」と「包摂すること」を両立させるために、どのように折り合いがつけられるのだろうか。

本研究で扱ったさまざまな事例を通して、

- 「多様性を認めること」と「包摂すること」という相反するベクトルの間で、それぞれの状況でジレンマを抱えながらも、多様性を包摂しようと取り組んでいるということ
- 状況が異なれば、折り合いの付け方も異なり、「多様性と包摂」のあり方も異なるということ
- そして、「多様性を認めること」と「包摂すること」のどちらか一方に極端に偏り過ぎないような形で、両方のバランスをとっている

とすることができる。と考える。

最後に、本研究を通して、多文化主義について何が言えるか考えてみたい。序章で述べたように、民族・文化的多様性を認めながら、国・社会のまとまりをどのように維持していくのかという問題は、多文化主義の文脈のもとに語られてきた。1990年代後半以降、国民統合理論としての多文化主義の「失敗」が、とりわけヨーロッパの国々を中心に叫ばれ、そこでは、多文化主義がエスニック・グループ間の差異を強化し、集団間の軋轢を生み、社会の分離を招くといったことが指摘されてきた[Vertovec 2010]。しかし、本研究をふまえて、現時点でのバンクーバー社会における多文化主義を「失敗」とまで言い切ることはできないと考える。なぜなら、筆者が出会った人びとの姿からは、異なる文化的背景をもつ人たちと日常的にかかわるなかで、異なる「他者」と適度な距離を保ちながらうまく付き合っていこうとする前向きな姿勢が感じられたからである。しかし、だからといって、多文化主義が、どのような状況にも対応し得る万能な理論であるとも言えない。本研究で扱った事例からは、それぞれの場で「多様性をどこまで認めるか」「どこまで包摂するか」ということでジレンマを抱え、いつでも同じ基準で「多様性と包摂」が成り立つわけではないことが明らかとなった。また、異なる背景を持つ人たちの間で緊張関係が見え隠れしていることも事実であった。たとえば、リッチモンド市における中国語表記の問題は、フィールドワーク時に一端収まったように見えたが、2014年になって再度、新聞記事上で話題にのぼっていた。今後、リッチモンドの言語表記の問題はどのようなのであろうか。また、本研究では、バンクーバーを事例として、多文化主義における「多様

性」と「包摂」の折り合いの付け方が、どちらか一方の極に偏りすぎない形でバランスがとられているのではないかと考えた。しかし、これから、そのようなあり方は変化するだろうか、どちらか一方に極端に偏るようなことがあるだろうか。バンクーバーの多文化主義のあり方、そして、多文化主義の社会で生活する人たちの生き方に、今後とも注目していきたいと考える。

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々のご協力とご支援をいただいた。まずバンクーバーでの生活をサポートしていただいた K. K 氏とホストファミリーに感謝したい。筆者の現地での安全や健康面を気にかけて、調査を無事に遂行できるよう多大なご支援をいただいた。また、パブリック・マーケットでの出会いを通して、インフォーマントそして友人として筆者の調査に協力してくださった N. D. M. 氏に感謝する。研究テーマに関わることから日常のささいな出来事についてまで、様々な話題に関して一緒に議論した時間は、毎回興味深く、貴重なものだった。隣組のスタッフの方々には、まず筆者をボランティアとして受け入れていただいたことに感謝したい。ボランティアとして受け入れていただいたことが、フィールドワークを実現させる足掛かりとなった。そして、お忙しい中、筆者の質問や疑問に一つ一つ丁寧に答えてくださった。また隣組のボランティアや利用者の方々にも、貴重なお話をうかがわせていただいた。他にも、リッチモンド市の障害者センターや、隣組からの派遣ボランティアとして関わらせていただいた高齢者施設での出会いも、筆者のフィールドワークの貴重な一部となった。心より感謝する。

本論文は、主指導教員の佐野眞理子先生のご指導とご協力なしには書き上げることはできなかった。厳しくも温かく筆者の研究を見守り、指導してくださった佐野先生には感謝し尽くせない。また、副指導教員の高谷紀夫先生、三木直大先生、長坂格先生には、修士論文の執筆にあたり、貴重なご指導とご助言をいただいた。そして、広島大学大学院総合科学研究科人類学系院生室の学生や卒業生の方々からは多くの励ましと刺激、ご助言をいただいた。ありがとうございました。

バンクーバーでの調査費用に関して、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」(日本学術振興会)から一部援助をいただいた。また、同プログラムでご指導いただいた広島大学大学院の町田宗鳳先生に感謝する。

最後に、心配をかけてばかりの筆者をいつも見守り、応援し、支え続けてくれる家族に感謝する。本当にありがとうございました。

参考文献

(日本語文献)

青木麻衣子

2008 『オーストラリアの言語教育政策—多文化主義における「多様性」と「統一性」の揺らぎと共存』 東信堂

王維

2011 「バンクーバーにおける華人コミュニティ及びチャイナタウンの行事」
『香川大学経済論叢』84(1) : 1-43

香川貴志

1998 「住宅形態を介した文化摩擦—バンクーバーにみるモンスターハウスとツリーウォーズ」 『地理科学』53(3) : 174-180

梶田孝道

1996 「第4章 「多文化主義」をめぐる論争点—概念の明確化のために」 『エスニシティと多文化主義』(初瀬龍平(編)) 同文館出版 67-102頁

河上幸子

2010 「ジャパンポップから広がるコンタクト・ゾーン—サンフランシスコ日本町をめぐる文化創造とマンガ・アニメ産業」 『コンタクト・ゾーン』3 : 106-123

2014 『在米コリアンのサンフランシスコ日本街—境界領域の人類学』 御茶の水書房

島村恭則

2006 「ポスト「多みんぞくニホン」展への課題：大阪の社会空間から」 『国立民族学博物館調査報告』64 : 83-90

徐阿貴

2001 「元在日韓国人カナダ移住者のアイデンティティ再形成—カナダ多文化主義との関連を中心に—」 『年報社会学論集』(14) : 76-88

関根政美

1996 「第3章 国民国家と多文化主義」 『エスニシティと多文化主義』(初瀬龍平(編)) 同文館出版 41-66頁

谷垣真理子

2010 「カナダへの香港人移民」 『東洋文化研究所紀要』157 : 156-190

寺迫正廣

1998 「多文化主義とクレオール性: N.ピソンダットの多文化主義批判を中心に」 『独
仏文学』 32 : 163-195 頁

藤田真理子

1999 『アメリカ人の老後と生きがい形成—高齢者の文化人類学的研究』 大学教育出
版

ピーコック、J・L (今福龍太訳)

1993 『人類学とは何か』 岩波書店

ベドナー、マイケル (古瀬敏訳)

1993 『商業空間とアトリウム—室内歩行者空間のデザイン』 鹿島出版会

南川文里

2004 「アメリカ社会における人種エスニック編成—エスニシティのナショナルな条件
—」 『社会学評論』 55(1) : 19-32

山下博樹

2009 「バンクーバー都市圏の商業中心地」 『地理』 54(11) : 36-43

2011 「バンクーバー郊外のニュー・チャイナタウン, ゴールデンビレッジの都市景観」
『都市地理学』 6 : 72-78

山田千香子

2000 『カナダ日系社会の文化変容—「海を渡った日本の村」三世代の変遷』 御茶の
水書房

米山リサ

2006 「多文化主義論」 『文化人類学 20 の理論』(綾部恒雄(編)) 弘文堂 302-319
頁

(英語文献)

Backhaus, Peter

2006 “Multilingualism in Tokyo: A Look into the Linguistic Landscape”
International Journal of Multilingualism. 3(1):52-66

Chiang, Frances Shiu-Ching

2001 “Intersection of Class, Race, Ethnicity, Gender and Migration: A Case Study
of Hong Kong Chinese Immigrant Women Entrepreneurs in Richmond,
British Columbia.” The University of British Columbia Faculty of Graduate
Studies (Doctoral Thesis)

Deer, Glenn

- 2006 "The new yellow peril: The rhetorical construction of Asian Canadian identity and cultural anxiety in Richmond." In Cheryl Teelucksingh (Eds.), *Claiming Space: Racialization in Canadian cities* (pp.19-40). Waterloo: Wilfrid Laurier University Press.

Donofrio, Julie Therese

- 2007 "Preservation as a Tool for Waterfront Revitalization: Design, Management, and Financing Solutions from Vancouver, Boston, and London", University of Pennsylvania (MASTER OF SCIENCE IN HISTORIC PRESERVATION)

Dwyer, Claire and Justin K.H. Tse, David Ley

- 2013 "Immigrant Integration and Religious Transnationalism: the case of the 'Highway to Heaven' in Richmond, BC" *Metropole British Columbia Working Paper Series*:13(6) : Metropole British Columbia Centre of Excellence for Research on Immigration and Diversity

Man, Guida

- 1995 "The Experience of Women in Chinese Immigrant Families: An Inquiry Into Institutional and Organizational Processes" *Asian and Pacific Migration Journal*, 4(2-3): 303-326
- 2004 "Gender, work and migration: Deskilling Chinese immigrant women in Canada" *Women's Studies International Forum*, 27(2): 135-148

McCullough, Michael

- 1998 *Granville Island-An Urban Oasis*. Canada Mortgage and Housing Corporation

Peter S. Li and Eva Xiaoling Li

- 2013 "Chapter One: Vancouver Chinatown in transition" in *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora* Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng (ed.), pp.19-34,

Prato, G.B.

- 2012 "Introduction—Beyond Multiculturalism: Anthropology at the Intersections Between the Local, the National and the Global." In G.B. Prato (Eds) *Beyond Multiculturalism: Views from Anthropology*. (pp.1-19). Fahnham: Ashgate Publishing

Ray, B.K., Halseth, G. and Johnson, B.

1997 “The Changing ‘Face’ of the Suburbs: Issues of Ethnicity and Residential Change in Suburban Vancouver” *International Journal of Urban and Regional Research*, 21(1): pp.75-99

Tonari Gumi

2010 *Spirit of The Issei: The Story of Tonari Gumi*. Toronto: TI-JEAN PRESS

Vertovec, S.

2010 “Towards post-multiculturalism? Changing communities, conditions and contexts of diversity.” *International Social Science Journal* 61(199) : 83-95

(資料・ウェブサイト)

City of Richmond The Hot facts-languages 2014

(<http://www.richmond.ca/shared/assets/Languages6251.pdf>)

City of Vancouver official website page “Diverse Communities and Multiculturalism”

(<http://vancouver.ca/people-programs/diversity-and-multiculturalism.aspx>)

Kari Huhtala 2004 February 17 “Richmond-A City of Cultural Fusion & Change”

(http://www.creativecity.ca/database/files/library/richmond_cultural_fusion_change.pdf)

Translink 2011 2月1日 Guide to Getting Around Metro Vancouver

The Province

2013年6月13日付け記事 「The photo that broke a mother’s heart」

Times Colonist

2013年6月19日付け記事 「Mom of son in wheelchair happy with ‘gorgeous’ photo retake」

Vancouver Sun

2012年1月14日付け記事 「Chinese-only sign debate: All Canadians benefit from common language.」

2013年3月16日付け記事 「English should predominate in Richmond signs. Many Chinese agree. Update」

The Huffington Post B.C.

2013年3月15日付け記事 「Chinese Signs In Richmond: Should There Be A Limit?」

2013年3月18日付け記事 「Chinese Signs In Richmond: City Council Rejects Restrictions.」

Richmond News

2012年1月26日付け投稿記事 「Sign Language Reflects Business」

2012年3月1日付け投稿記事 「Why Such Fuss Over 12 Signs?」